

田村遺跡群・緑の広場調査報告書

－高知県立高知空港緑の広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2002.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

田村遺跡群・緑の広場調査報告書

－高知県立高知空港緑の広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2002.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

南国市には、登録されているだけでも280近くの遺跡が存在しています。この数は高知県の中で最も多く、高知県の歴史を知る上で重要な資料を提供する貴重な地域となっています。その中でも、田村遺跡群は南四国における弥生時代の拠点集落として、重要な資料を後世に伝える役割を担っている遺跡です。

今回の発掘調査は、高知空港整備事務所からの依頼による緊急発掘調査であり、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが主体となって実施しました。その結果、弥生時代中期を中心に多量の遺物が出土し、遺構についても竪穴住居跡7棟を含む重要なものを検出することができ、田村遺跡群本体の調査に対しても貴重な資料を提供することができました。

調査の成果をまとめた本書によって、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と関心が一層高まりますことを願うと共に、今後における教育・研究活動などの埋蔵文化財保護の一助となることを期待するものであります。

最後に、発掘調査にご協力頂いた地域住民の方々をはじめとする高知空港拡張整備事業に携わっている関係者各位の皆様にご心より感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 門 田 伍 朗

例 言

1. 本書は、田村遺跡群における高知県立高知空港緑の広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は高知県空港整備事務所の依頼を受けて、高知県からの委託の基に財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 高知県立高知空港緑の広場整備事業は高知空港拡張整備事業に伴う周辺整備事業の一環として県が実施するものであり、今回の調査範囲は掘削を伴う水路部分の工事範囲であった。
4. 発掘調査期間は平成13年8月30日～10月4日であり、調査面積は 640.38m²である。
5. 発掘調査体制は次のとおりである。

総 括	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	所 長	門田 伍朗
		次 長	島内 信雄
		調査課長	重森 勝彦
調査担当	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	調査第2班長	森田 尚宏
		主任調査員	堅田 至
		主任調査員	山田 和吉
総務担当	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	総務課主任	山本三津子
		総務課主幹	中城 英人

6. 本書の執筆は堅田至と山田和吉が行い、編集は堅田及び山田を中心に森田が取りまとめた。
7. 発掘調査及び整理作業について、技術補助員の宮地啓介と坂本憲彦には多大な協力を得た。同時に吉成承三調査員にも多大な助力を頂いた。記して感謝する次第である。また、現場作業員及び整理作業員の方々にも協力を頂くとともに埋蔵文化財センターの調査員一同にも協力を頂いた。記して感謝したい。
8. 本書に用いた遺構の記号は以下の通りである。

S K	土坑	S T	竪穴住居跡	S D	溝	S R	自然流路	P	柱穴
S A	柵列								

9. 現地測量については国土座標第IV系を基準とした。
10. 遺物図版については、土器は縮尺1/4、石器は縮尺1/2に統一して掲載した。
11. 発掘調査にあたっては、地元住民の方々をはじめとする関係各位の皆様のご理解、ご協力をいただいた。記して敬意を表したい。
12. 出土遺物及び発掘調査資料は高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
13. 本発掘調査の調査略号は01-8NTであり、遺物の注記等にはこの調査略号を使用している。
14. 付編として、緑の広場用地内に設置された「展望台建築に伴う立会調査」の結果を収録した。執筆は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査員小野由香が、編集は森田が行った。

本文目次

I. 調査の契機と経過(森田).....	1
II. 遺跡の地理的・歴史的環境(堅田)	
1. 地理的環境.....	2
2. 歴史的環境.....	2
III. 調査の概要(山田).....	6
IV. 基本層序	
1. A区(山田).....	7
2. B区(堅田).....	9
V. 遺構と遺物	
1. A区(山田)	
(1) 遺構についての概要.....	10
(2) A①区検出遺構と遺物.....	12
(3) A②区上面検出遺構と遺物.....	16
(4) A②区下面検出遺構と遺物.....	19
(5) A③区上面検出遺構と遺物.....	28
(6) A③区下面検出遺構と遺物.....	28
(7) A①・A②区南トレンチ・遺物包含層出土遺物及びその他の出土遺物.....	31
2. B区(堅田)	
(1) 遺構についての概要.....	33
(2) B①区検出遺構と遺物.....	33
VI. まとめ	
1. A区(山田)	
(1) 遺構について.....	41
(2) 遺物について.....	42
2. B区(堅田)	
(1) 遺構について.....	42
(2) 遺物について.....	42
付編 展望台設置に伴う立会調査(小野)	

挿 図 目 次

Fig.1	南国市位置図	1
Fig.2	周辺遺跡分布図	4
Fig.3	遺跡周辺地形図	5
Fig.4	調査区設定図	6
Fig.5	A①区南壁セクション図	7
Fig.6	A②区南壁セクション図	8
Fig.7	B② I・II区北壁セクション図	9
Fig.8	A区調査区設定図	10
Fig.9	A③区遺構全体図	10
Fig.10	A①区・②区遺構全体図	11
Fig.11	SD1～3完掘平面・セクション図	12
Fig.12	SD2遺物出土状況図	12
Fig.13	SD1～3出土遺物実測図	13
Fig.14	SD2出土遺物実測図	14
Fig.15	SD2・3出土遺物実測図	15
Fig.16	P2・17・24・25・41・44完掘平面・エレベーション・出土遺物実測図	16
Fig.17	P35・45・40・51・90完掘平面・エレベーション・出土遺物実測図	17
Fig.18	SK1・5・6完掘平面・エレベーション・出土遺物実測図	18
Fig.19	SD4・ST1完掘平面・セクション・出土遺物実測図	19
Fig.20	ST1出土遺物実測図	20
Fig.21	ST2完掘平面・セクション・出土遺物実測図	21
Fig.22	SK3・4完掘平面・エレベーション・出土遺物実測図	22
Fig.23	SK7・SD6・7完掘平面・エレベーション図	23
Fig.24	SD5～7出土遺物実測図	24
Fig.25	SR1完掘平面・セクション・出土遺物実測図	25
Fig.26	SR1出土遺物実測図	26
Fig.27	P57・89・13完掘平面・セクション・出土遺物実測図	27
Fig.28	P73完掘平面・エレベーション図	28
Fig.29	ST3・SK9完掘平面・セクション図	28
Fig.30	ST3・SK9出土遺物実測図	29
Fig.31	ST5完掘平面・セクション図	29
Fig.32	ST6・SK8完掘平面・セクション・エレベーション・出土遺物実測図	30
Fig.33	A②区南トレンチ・遺物包含層・遺構検出面・IV層・V層・表採遺物実測図	32
Fig.34	B区調査区配置・B①区遺構全体図	33
Fig.35	ST1完掘平面・セクション・出土遺物実測図	33

Fig.36	SD1完掘平面・セクション・出土遺物実測図	34
Fig.37	SD2～5完掘平面・セクション・出土遺物実測図	35
Fig.38	SD6～9完掘平面・セクション・出土遺物実測図	36
Fig.39	SD10～13完掘平面・セクション・出土遺物実測図	37
Fig.40	SD15・16・SA1・2・SK1完掘平面・セクション・エレベーション・出土遺物実測図	38
Fig.41	PI0・遺物包含層等出土遺物実測図	40

表 目 次

A区土器観察表1	43	A区土器観察表7	49
A区土器観察表2	44	A区石器観察表	50
A区土器観察表3	45	B区土器観察表1	51
A区土器観察表4	46	B区土器観察表2	52
A区土器観察表5	47	B区石器観察表	53
A区土器観察表6	48		

写 真 図 版 目 次

PL.1	田村遺跡群周辺航空写真
PL.2	田村遺跡群航空写真
PL.3	調査前状況 (A区) 調査区完掘状況 (A①区)
PL.4	上面検出遺構完掘状況 (A②区) 下面検出遺構完掘状況 (A②区)
PL.5	下面検出遺構完掘状況 (A③区) ST1完掘状況 (A②区下面)
PL.6	ST1遺物出土状況 (A②区下面) ST1石包丁出土状況 (A②区下面)
PL.7	ST1叩石出土状況 (A②区下面) ST2貼床状床面完掘状況 (A②区下面)
PL.8	ST2完掘状況 (A②区下面) ST3床面検出状況 (A③区下面)
PL.9	ST5完掘状況 (A③区下面) ST6・SK9・13～15・P85・86完掘状況 (A③区下面)
PL.10	SK1完掘状況 (A②区上面) SK1叩石出土状況 (A②区上面)

- PL.11 SK4完掘状況 (A②区下面)
SK4扁平片刃石斧出土状況 (A②区下面)
- PL.12 SK5完掘状況 (A②区上面)
SK6完掘状況 (A②区上面)
- PL.13 SD2遺物出土状況 (A①区)
SD2遺物出土状況壺 (A①区)
- PL.14 SD2遺物出土状況壺 (A①区)
SD2完掘状況 (A①区)
- PL.15 SD5完掘状況 (A②区下面)
SD5壺出土状況 (A②区下面)
- PL.16 SD5叩石出土状況 (A②区下面)
SR1①～③層完掘・遺物出土状況 (A②区下面)
- PL.17 P17完掘状況 (A②区上面)
P35・45完掘状況 (A②区上面)
P51完掘状況 (A②区上面)
P57完掘状況 (A②区下面)
P25・41・44完掘状況 (A②区上面)
P40完掘状況 (A②区上面)
P57土器出土状況 (A②区下面)
P89南壁セクション (A②区下面)
- PL.18 調査前状況 (B区①)
調査前状況 (B区② I・II)
- PL.19 調査区設定状況 (B区①)
調査区設定状況 (B区② I)
- PL.20 調査区設定状況 (B区② II)
調査区北壁セクション (B区①)
- PL.21 古代遺構検出状況 (B区①)
古代遺構完掘状況 (B区①)
- PL.22 SA1遺構検出状況 (B区①)
SA2遺構検出状況 (B区①)
- PL.23 SA1柱穴・小石検出状況 (B区①)
SA1完掘状況 (B区①)
- PL.24 SD1遺物出土状況 (B区①)
遺物包含層遺物出土状況 (B区①)
- PL.25 完掘状況 (B区①)
完掘状況 (B区①)
- PL.26 調査状況 (B区①)

- 北壁セクション (B区② I)
- PL.27 完掘状況 (B区② II)
- 北壁セクション (B区② II)
- PL.28 SD2出土遺物 (A①区)
- PL.29 SD2出土遺物 (A①区)
- ST1・SD5・SR1出土遺物 (A②区下面)
- PL.30 SD2出土遺物 (A①区)
- ST1・SK4・SR1・P57出土遺物 (A②区下面)
- SK9出土遺物 (A③区下面)
- PL.31 SD1～3出土遺物 (A①区)
- SD2出土遺物 (A①区)
- PL.32 SD2・3出土遺物 (A①区) P17・24・41・35・SK1・SD4出土遺物 (A②区上面)
- ST1・2・SK4・SD5・7・SR1出土遺物 (A②区下面)
- PL.33 SR1出土遺物 (A②区下面)
- SR1・P13出土遺物 (A②区下面) ST3出土遺物 (A③区下面)
- PL.34 ST3・SK8出土遺物 (A③区下面) 遺構検出面・IV層出土遺物 (A②区) 遺物包含層出土遺物 (A区) V層・IV層・南トレンチ出土遺物 (A②区) 遺物包含層・表採遺物 (A区)
- PL.35 ST1・SD1・2・4・7・8出土遺物 (B①区)
- SD10・11・遺物包含層出土遺物 (B①区)
- PL.36 遺物包含層出土遺物 (B①区)
- SD2出土遺物 (A①区) SK1出土遺物 (A②区上面) ST1・SK4・SD5・6・SR1出土遺物 (A②区下面)
- PL.37 SR1出土遺物 (A②区下面) ST3出土遺物 (A③区下面) 南トレンチ・V層・遺構検出面出土遺物 (A②区) 表採遺物 (A区)
- SD1・9・10・16・SK1・遺物包含層出土遺物 (B①区)

I. 調査の契機と経過

1. 調査の契機

田村遺跡群は高知県を代表する弥生時代の集落遺跡であり、昭和55～58年度に行われた前回の拡張整備事業に伴い第1次発掘調査が行われている。第1次調査では弥生時代前期初頭の集落跡や前期水田跡とともに中期から後期にかけての竪穴住居跡等が検出されており、集落は西方及び北方に広がるものと考えられていた。その後、滑走路を2000mから2500mへの拡張が計画され、田村遺跡群についても拡張範囲にその大半が含まれることから、再度の発掘調査が必要とされた。拡張事業については地元地権者等との協議が進められるなかで田村遺跡群の発掘調査についても着手時期及び調査方法が検討され、平成8年度から現地調査に入ることとなった。本調査は平成8年11月から開始され、道路・水路部分も含め平成13年12月末をもってすべての現地調査を終了した。

田村遺跡群の発掘調査を行う中で、県による周辺整備事業の一環として空港周辺部の公園化が計画された。空港公園計画は、今回の西方拡張範囲の周辺部について緩衝緑地機能も含めて緑地公園化するものであり、空港北側の範囲については田村遺跡群の範囲内に含まれることもあり、遺跡公園的な整備案が出され、検討されたが、現時点では未確定な部分が多い。この中で、空港本体調査区であるD1区の北側部分については地元要望も取り入れたコミュニティ広場として平成15年度の空港拡張完成時までに整備を行う方針であり、平成13年度から工事着手したいとの要望であった。これを受けて公園整備にかかる埋蔵文化財の取り扱いについて県教育委員会も含めて協議した結果、公園整備自体は軽微な盛土工法であり、遺跡に与える影響は少ないと判断されたため、工事に伴う全面的な発掘調査は行わないこととなった。しかしながら、新たに掘削を伴う水路部分については田村遺跡群北部の状況を確認することも含め、事前の発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の経過

本調査の対象となった水路の範囲の中で、東側のコミュニティ広場部分をA区、西側の部分をB区として調査が開始された。A・B区ともに水路工事のため幅約5mのトレンチ状の調査区となり遺構の全体把握の点では不十分であったが、東西方向のトレンチとして空港本体の本調査との関連性を確認することができた。遺跡の広がりとしては、Aトレンチにおいて弥生時代中期の遺構群が確認されており、集落の範囲内に含まれている。これに対してBトレンチでは遺構密度は低く、空港本体調査と同様に北西部は集落の範囲外である。調査の実施にあたっては、A区部分は家屋跡もあり攪乱部分が多く見られ、B区には仮設道路等が存在しており、調査面積は640.38m²と当初予定より減少した。調査期間は平成13年8月30日より同年10月4日までの約1ヶ月間であった。



Fig.1 南国市位置図

Ⅱ．遺跡の地理的・歴史的環境

1．地理的環境

田村遺跡群の所在する南国市は、高知県の中央部に位置しており、東は香美郡吉川村・野市町・土佐山田町、北は長岡郡本山町・土佐郡土佐町、西は土佐郡土佐山村・高知市に接し、南は土佐湾に面している。市の中心部は高知市の東隣に続く香長平野に位置し、高知市の近郊として最近徐々に人口が増加しつつある。市域は北部の山地と南部の平野部・沿海部に分かれる。北部には土佐町との境界に山々が連なり、山地以北の地域を嶺北、以南の南国市域を含む地域は嶺南と呼ばれている。東部の境界は物部川であり、野市台地へとほぼ平野部が続いている。西部は笹ヶ峰から南へ標高を低下しながら山地が連なるが、逢坂峠から南は小丘陵はあるものの平野によって高知市と接続している。

市域の河川では、北部山地を穴内川(黒滝川)が東流し、中北部を国分川が支流をあわせて西南流して五台山(高知市)の南部から浦戸湾に注いでいる。南東部は香美郡との境を物部川が流れ、土佐湾に注ぐ。物部川は山田堰によって西岸に上井・中井・舟入の3水路が開かれているが、中井・舟入の2水路が市域内を南西に流れ、さらに分流が網の目のように派生し、耕地の灌漑用水として重要な役割を果たしている。以上のように南国市は北部には山地を含むが、中央部から南部にかけての平野部は、物部川の古期及び新期扇状地と、その西部に連なる段丘及び国分川流域の平野部に分けられる。また、太平洋に面した沿海部は砂浜の連なる浜堤が形成されており、その内側には後背湿地が存在する。

平野部は県下有数の穀倉地帯であり、水田の90%を裏作可能な二毛作田が占め、かつては米の二期作地帯として有名であったが、昨今の減反政策を反映して現在は見られなくなっている。この他、野菜の促成栽培等が盛んであり、田園風景を保っている。また市街地である後免を中心として、JR土讃本線や電車・バスが発着し、市域の中央部を国道55号・同195号が横切り、それぞれ安芸市と香美郡香北町方面に向かっている。北部には国道32号と高速道路も開通しており、四国島内本州方面との交通の動脈となっている。また、後免の南東5 kmには高知空港が位置しており、高知県の空の玄関口となっている。

2．歴史的環境

南国市では、これまで旧石器時代の遺跡は確認されていなかったが、高速道路建設に伴う奥谷南遺跡の調査において旧石器が発見され注目されている。奥谷南遺跡からはナイフ形石器と細石核と細石刃が層位的に確認され、特に細石核と細石刃は多量に出土しており、旧石器時代の空白地帯であった南四国の状況を知るための貴重な資料となっている。また、奥谷南遺跡では縄文草創期～前期の遺物も出土している。縄文時代中期の遺跡はほとんど発見されていないが、後期になると遺跡数も増加し、平野部においても遺跡の立地が見られる。山麓部では岡豊地区の栄エ田遺跡、平野部では田村遺跡群において後期の良好な資料が検出されている。縄文時代晩期の遺跡は発見されていないが、断片的ではあるが遺物が確認されているので、田村遺跡群周辺を含め、晩期の遺跡が存在

する可能性は十分考えられ、今後の調査が期待される。

弥生時代に入ると遺跡数が激増するが、なかでも田村遺跡群は高知県を代表する弥生時代の遺跡であり、前回及び今回の2回の空港拡張工事に伴う調査により、弥生前期初頭から後期前半にかけての集落跡や水田跡が発見されている。竪穴住居跡約400棟の存在から前期～後期にわたる拠点集落と位置付けられ、中期末から後期初頭に集落の盛行が見られる。しかし後期後半になると田村遺跡群は急速に衰退し、北方の長岡台地に立地する東崎遺跡や土佐山田町のひびのき遺跡等を中心とする新たな遺跡が形成される。

古墳時代になると南国市北部の岡豊、国分、さらに長岡方面に集落跡が分布する。前方後円墳は現在のところ発見されていないが、後期古墳は平野部背後の山丘及び山麓部に集中しており、舟岩古墳群や蒲原山古墳群等の群集墳が形成される。

古代においては、国分川流域の比江地区に土佐国府跡や白鳳期の古代寺院である比江廃寺跡、土佐国分寺跡が存在しており、土佐国府や土佐国分寺が整備され律令時代には比江・国分地区が政治、文化の中心地となっている。

中世に入ると鎌倉幕府による封建的武家支配の守護・地頭が設置され、それまでの律令体制に基づく国府とによる二元的政治支配が行われるようになり、このような情勢を背景として、香長平野の東部では香宗我部氏、西部では長宗我部氏等の国人が有力者として徐々に勢力を浸透させていた。

南北朝期から室町時代にかけて、四国においては足利氏一門の細川氏の支配が及ぶようになり、土佐においても細川氏による守護領国制が展開されるようになる。細川氏は一族を守護代として土佐に派遣し、田村庄に田村城館を構え、香宗我部氏、長宗我部氏等の地頭や土豪を支配下に置くようになる。田村城館はその拠点として栄え、城館の東から南にかけては市町も発達したとされる。しかし、守護代4代細川勝益の時代には勢力が次第に衰え、応仁元年(1467)に始まった応仁、文明の大乱を契機に、その支配力は大きく後退した。勝益は、文亀元年(1501)、城館内に桂昌寺(後の細勝寺)を建立する等、伝統の力を誇示しようとしたが、その翌年に死去した。そして、永正4年には、彼の一族も細川本宗の政元謀殺事件を機に土佐を離れ上京し、土佐も戦国時代へと突入していく。

戦国時代になると地頭以下各地の土豪は領地拡張を目指して相争うようになり、田村周辺では入交、千屋の両氏が国人化を遂げ、周辺では、蚊居田氏、下田氏、十市細川氏らが有力であった。一方、江村郷岡豊を本拠とする長宗我部氏は、19代兼序の代に一時没落したものの、次代国親によって再興され、21代元親は天正3年(1575)に土佐統一を成し遂げた。この過程で、土佐の政治の中心は岡豊に移り、田村地域一帯も長宗我部氏の領国経営下に組み込まれて行った。その後、長宗我部元親は天正13年春に四国制覇を成し遂げたものの、同年夏には強力な豊臣秀吉軍の征伐を受け、本来の土佐一国を領有することになり、天正16年に居城を大高坂に移し、3年後には浦戸に再移転している。そして、22代盛親の代には、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで西軍に組したこと等により、長宗我部氏は衰亡し、代わって山内一豊が国主に任じられ、翌慶長6年に浦戸に入城した。一豊は慶長8年に大高坂城(後の高知城)に移城し、近世城郭を中心にした城下町を形成する。以後260年に及ぶ山内藩政は、高知城下町を中心に展開されていった。



名称	時代	時代	名称	時代	時代	名称	時代	時代	名称	時代	時代
1 田村遺跡群	集落跡	縄文～近世	24 門田遺跡	散布地	古墳～中世	47 原遺跡	散布地	弥生～近世	70 西久保遺跡	散布地	弥生～平安
2 里改田土居城跡	城館跡	中世	25 大篠遺跡	散布地	弥生	48 稲荷前遺跡	集落跡	弥生～近世	71 新城城跡	城館跡	中世
3 ツツ城跡	城館跡	中世	26 北泉遺跡	散布地	弥生～平安	49 楠目遺跡	集落跡	弥生～近世	72 ハザマダ遺跡	散布地	古墳～平安
4 蛸の森城跡	城館跡	中世	27 北野寄遺跡	散布地	弥生～平安	50 前ノ芝遺跡	散布地	弥生～平安	73 改田神母遺跡	散布地	古墳～平安
5 下田土居城跡	城館跡	中世	28 若宮ノ東遺跡	散布地	弥生～中世	51 ひびのき遺跡	集落跡	弥生・古墳	74 須江北段遺跡	散布地	古墳～近世
6 大北遺跡	散布地	弥生～平安	29 竹ノ後遺跡	散布地	弥生・古墳	52 伏原遺跡	散布地	弥生～平安	75 須江北遺跡	散布地	古墳～平安
7 遅倉遺跡	散布地	弥生	30 小籠遺跡	散布地	弥生～近世	53 山田三ツ又遺跡	散布地	古墳～平安	76 八坂神社遺跡	散布地	縄文～古墳
8 上栗山遺跡	散布地	弥生	31 野中庵寺跡	寺院跡	平安	54 三島遺跡	散布地	弥生～平安	77 林田遺跡	集落跡	弥生～中世
9 浜田遺跡	散布地	弥生	32 東崎遺跡	集落跡	弥生～中世	55 水通遺跡	散布地	弥生～平安	78 町田堰東遺跡	散布地	縄文～中世
10 岩坂遺跡	散布地	弥生	33 シロイ島遺跡	散布地	古墳～中世	56 潤ノ上遺跡	散布地	弥生～平安	79 西佐古遺跡	散布地	平安～中世
11 中屋敷遺跡	散布地	弥生	34 横落遺跡	散布地	弥生～平安	57 三添遺跡	散布地	弥生～近世	80 深湖北遺跡	散布地	弥生～中世
12 司例田遺跡	散布地	古墳～近世	35 古流曾遺跡	散布地	古墳～平安	58 土佐国府跡	官衛跡	弥生～中世	81 深湖遺跡	集落跡	縄文～近世
13 委重遺跡	散布地	古墳～近世	36 高添遺跡	散布地	弥生～平安	59 比江廃寺跡	寺院跡	白鳳・奈良	82 西野遺跡群	集落跡	縄文～近世
14 公家ノ前遺跡	散布地	古墳～近世	37 寺ノ前遺跡	散布地	弥生～中世	60 国分寺遺跡群	散布地	古墳～近世	83 下ノ坪遺跡	建物跡他	平安
15 里改田遺跡	散布地	弥生～中世	38 芝田遺跡	散布地	古墳～中世	61 後藤丸遺跡	散布地	弥生～近世	84 北地遺跡	散布地	弥生
16 蚊居田土居城跡	城館跡	中世	39 金地垣添遺跡	散布地	古墳～平安	62 土島田遺跡	散布地	古墳～近世	85 高田遺跡	散布地	平安
17 城ノ後遺跡	散布地	古墳	40 姥ヶコタ遺跡	散布地	古墳～平安	63 岡豊城跡	城館跡	中世	86 野口遺跡	散布地	弥生～中世
18 中組遺跡	散布地	弥生～中世	41 包末井ノ内遺跡	散布地	縄文・古墳～平安	64 栄工田遺跡	散布地	縄文～近世	87 野土居遺跡	散布地	古墳～平安
19 西ノ芝遺跡	散布地	弥生～中世	42 野村丸遺跡	散布地	弥生～平安	65 奥谷南遺跡	岩陰遺跡他	旧石器～近世	88 曾我遺跡	集落跡	弥生～中世
20 岡の上組遺跡	散布地	弥生～中世	43 松原丸遺跡	散布地	奈良・平安	66 奥谷北遺跡	散布地	縄文	89 下分遠崎遺跡	集落跡	弥生
21 鹿枝遺跡	散布地	弥生～平安	44 下ノ野遺跡	散布地	古墳～中世	67 舟岩1号墳	古墳	古墳	90 十万遺跡	集落跡	弥生～中世
22 修理田遺跡	散布地	弥生～平安	45 大領遺跡	散布地	古墳～中世	68 西村遺跡	散布地	弥生～平安	91 本村遺跡	集落跡	弥生・平安
23 カントワリ遺跡	散布地	縄文・古墳～平安	46 高柳遺跡	散布地	弥生～中世	69 金地遺跡	散布地	弥生・平安・中世	92 竜河洞穴遺跡	洞穴遺跡	弥生

Fig.2 周辺遺跡分布図 S = 1/100,000



Fig.3 遺跡周辺地形図 S = 1/10,000

Ⅲ. 調査の概要

調査区はコミュニティ広場建設予定地水路部分をA区とし、市道西側部分をB区とした。調査の方法としては、水路工事に伴う掘削部分が対象のため幅が狭く、トレンチにより調査を実施した。A区におけるトレンチは、水路部分建設予定地の測量基準杭を中心として北方向に1.2m、南方向に1.8mの合計3mの幅とし、東西方向には72mの長さを対象とした。実際に現地で設定された調査区は未買収地及び水路等により3ヶ所に分断されており、東からA①、A②、A③区と呼称した。

B区においてもA区同様、測量基準杭から南側に幅3mとし、東西方向に128mの長さを対象とした。実際の現地調査区はA区と同じく水路等によりやはり3ヶ所に分断され、東からB①、B②Ⅰ、B②Ⅱ区と分けて呼称した。

調査は8月30日から重機により表土剥ぎに着手し、A区を山田、B区を堅田が担当して、遺構の検出、掘削を人力で行った。なお、A区では部分的に攪乱が激しく、遺構も多く検出されたので調査期間がやや長くかかったが、B区で遺構が検出されたのはB①区のみであり、B②Ⅰ・Ⅱ区では遺構は検出されず、若干の遺物が出土したのみであった。また、調査区・遺構の測量及び遺物取り上げには、公共座標第Ⅳ系を基準とした田村遺跡群本調査のグリッドを用いた。

調査は10月4日に終了し、調査面積はA①区41.89m²、A②区135.35m²、A③区71.14m²であり、A区合計248.38m²、B区はB①区166.16m²、B②Ⅰ区67.84m²、B②Ⅱ区158.0m²でありB区合計392m²、全体の調査面積は640.38m²であった。



Fig.4 調査区設定図 S=1/2,000

IV. 基本層序

1. A区

A区における層序は、屋地跡等もあり攪乱のためかなり不良であったが、A②区において基本的な層序をとらえることができた。各調査区における個別の層序は以下に述べるとおりであるが、基本的には表土、耕作土下に古代の包含層である明褐色から黄褐色のシルトが存在しており、A区とB区との間の市道部分の調査区であるI 4区では古代包含層下に茶褐色シルトの弥生時代の遺物包含層がみられる。なお、A③区では大部分が攪乱を受けていたのでセクション図は残さなかったが、基本層序としてはA②区のII層がST3の周辺部に残されていた。

A①区基本層序

- I層：灰色砂質シルト（床土）
- II層：明灰色粘土質シルト（無遺物層）

SD2

- ①層：暗灰褐色粘土

SD1

- ①層：明灰褐色粘土質シルト
- ①'層：明灰褐色粘土質シルト（灰色が強い）
- ②層：灰黄色粘土質シルト
- ②'層：灰黄色粘土質シルト（砂質が強い）
- ③層：褐灰色砂質土（部分的に暗褐色シルト混入）
- ④層：灰色シルト（褐色及び黄色シルトブロック混入）

SD3

- ①層：灰色砂質土（黄褐色シルト混入）
- ②層：暗黄褐色砂質シルト
- ③層：褐灰色砂利
- ④層：黄褐色粘土質シルト

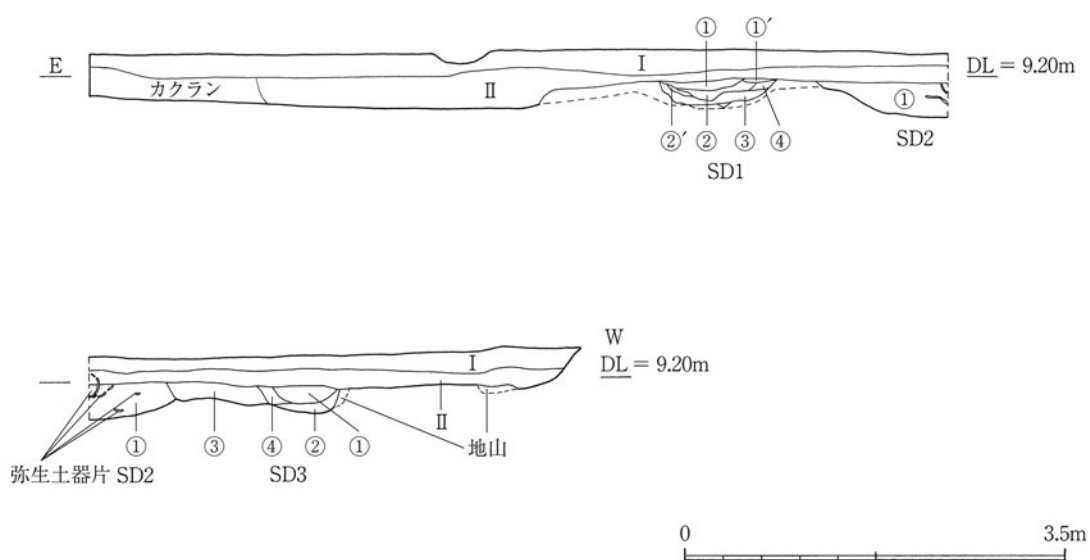


Fig.5 A①区南壁セクション図 S=1/70

A②区基本層序

- I-①層：瓦礫（宅地整地土）
- I-②層：黄灰褐色粘土（宅地整地土）
- I-③層：黄褐色シルト（宅地整地土）
- I-④層：灰色シルト（旧耕作土）
- II層：明褐色シルト（粘性有り、古代遺物包含層）
- III層：黄褐色シルト（粘性有り、古代遺物包含層）
- IV層：灰褐色シルト
- V層：灰色細砂（地山）
- VI層：灰色砂礫（地山）

SR1

- ①層：黒褐色シルト
- ②層：暗褐色シルト
- ③層：黒褐色粘土
- ④層：明黄褐色シルト
- ⑤-1層：礫（2~5cmの礫）
- ⑤-2層：砂礫（2~5cmの礫、粗砂）
- ⑤-3層：灰色粗砂
- ⑥層：暗灰褐色シルト
- ⑦層：黄灰色シルト
- ⑧層：黄灰色粗砂

ST2

- ①層：暗灰褐色シルト
- ②層：黄黒褐色シルト
- ③層：褐色粘土質シルト

SD4

- ①層：灰色シルト
- ②層：褐黄灰色シルト
- ③層：黒褐色シルト

SD5

- ①層：暗褐色シルト

P47

- ①層：暗褐色シルト

SK12 (ST-2中央ピット)

- ①層：暗黄褐色シルト
- ②層：暗褐色シルト（黄褐色ブロック多い）
- ③層：暗褐色粘土質シルト（黄褐色ブロック少々混入）
- ④層：暗褐色粘土（粘性強い）

P46

- ①層：暗黄灰褐色シルト（柱痕）
- ②層：暗黄灰褐色粘土
- ③層：黄褐色シルト
- ④層：暗褐色シルト

SK10

- ①層：黄灰褐色砂質シルト（やや粘性あり）
- ②層：暗褐灰色砂質シルト
- ③層：明褐灰色砂質シルト

P48

- ①層：黄褐色シルト
- ②層：黄褐色シルト（砂混る）

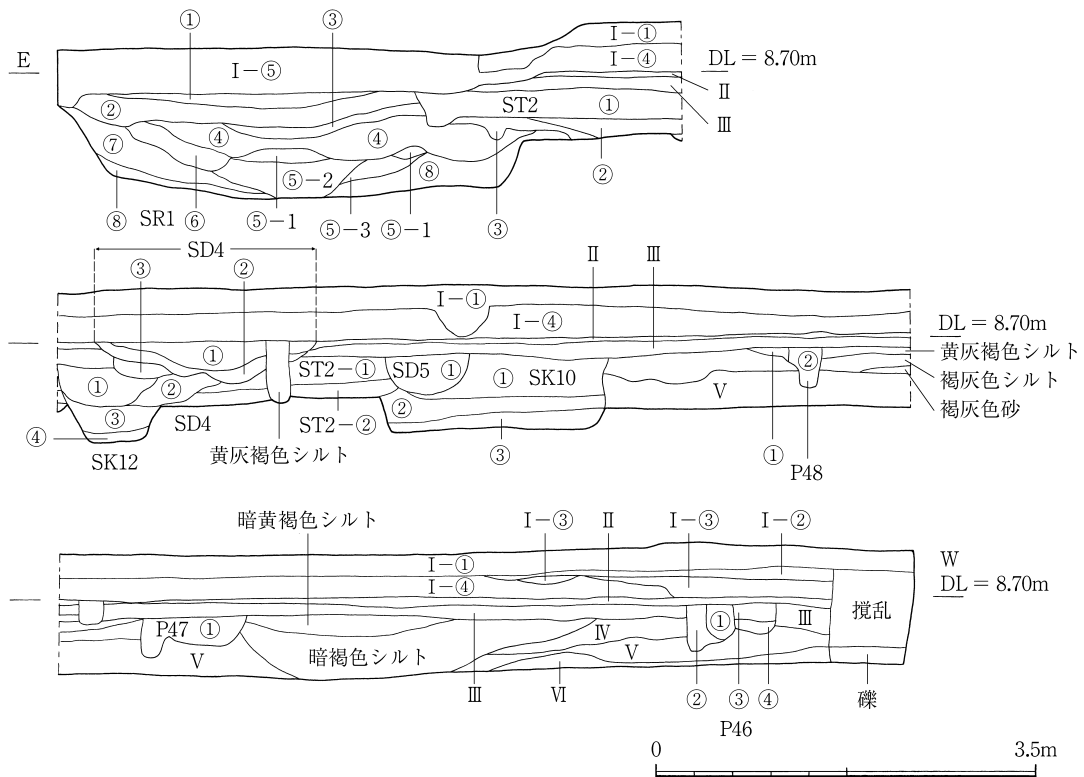


Fig.6 A②区南壁セクション図 S=1/70

2. B区

B区の基本層序はほぼ水平堆積であり、ほとんど乱れは見られない。B①区の西半部では基部の礫層が見られる。また、B②I区西端からB②II区東端部では黒褐色土が落ち込んでおり、部分的に若干の起伏が微地形として見られる。

B区基本層序

- I層：褐灰色土(水田床土)
- II層：灰黄褐色シルト
- III層：黒褐色シルト
- IV層：暗褐色シルト
- V層：暗褐色シルト(礫混じり)

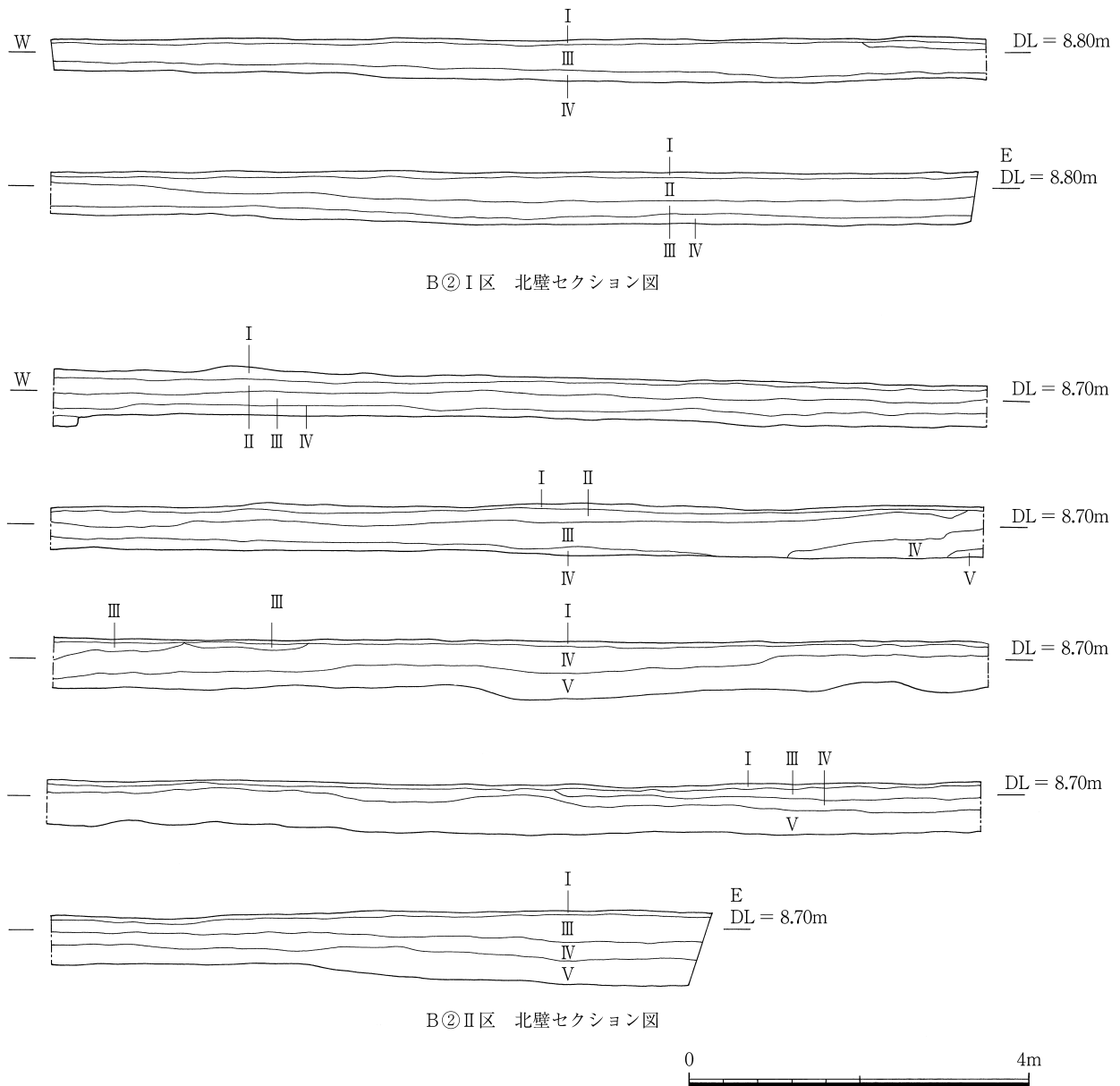


Fig7. B②I・II区北壁セクション図 S=1/80

V. 遺構と遺物

1. A区

(1) 遺構についての概要

A区の遺構検出面としては、A①区は1面だけであったが、A②区及びA③区は上面検出遺構と下面検出遺構の2面が検出された。

A区の南側にあたる空港本体調査区であるD1区及び西側のI4区においては、古代面と弥生面の2面の遺構が検出されており、A②区及びA③区において検出された2面の遺構も、上面検出遺構が古代、下面検出遺構については弥生の遺構面と考えられ、基本的には2面の遺構面が存在している。なお、A①区については家屋跡地の関係から上面の古代の遺構面はほとんど攪乱されており、弥生遺構面1面のみが検出されている。

遺構の中で特に注目されるものとしては、古代の掘立柱建物跡の方形柱穴が11個、弥生面においては、竪穴住居跡6棟と自然流路が1条検出されている。また、その他の遺構についても各調査区の項で遺物とともに述べる。

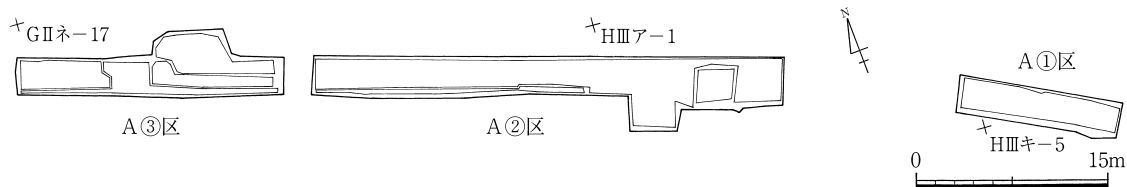


Fig8. A区調査区設定図 S=1/600

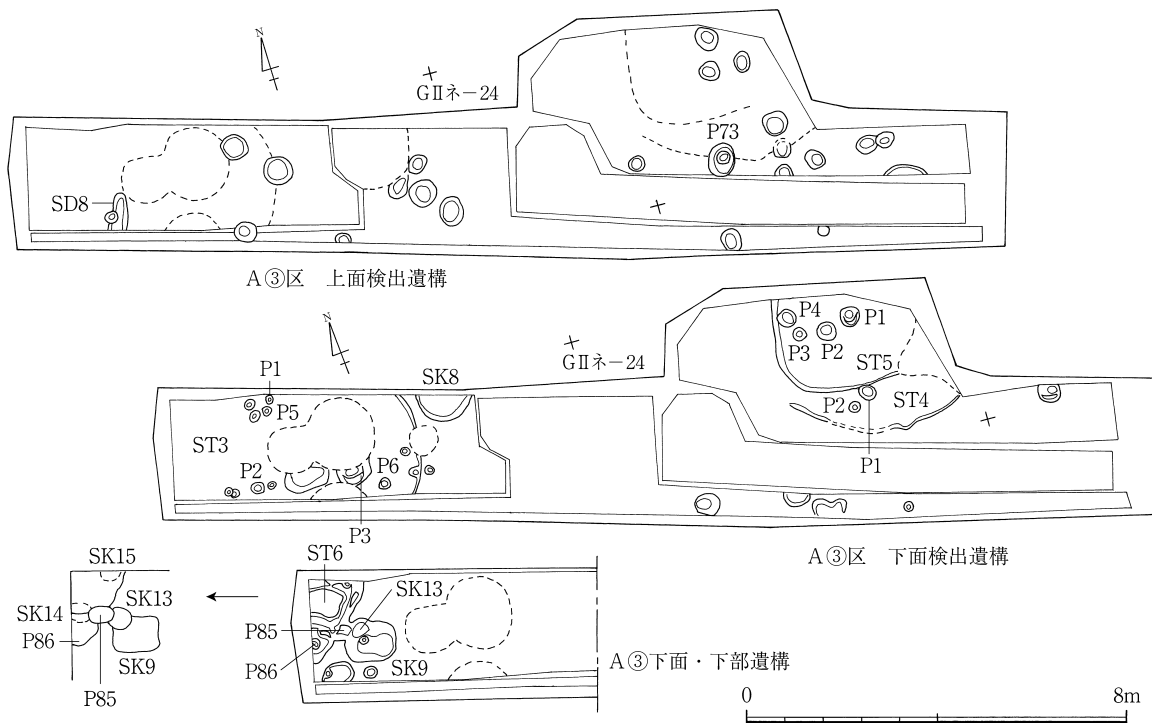


Fig9 A③区遺構全体図 S=1/160

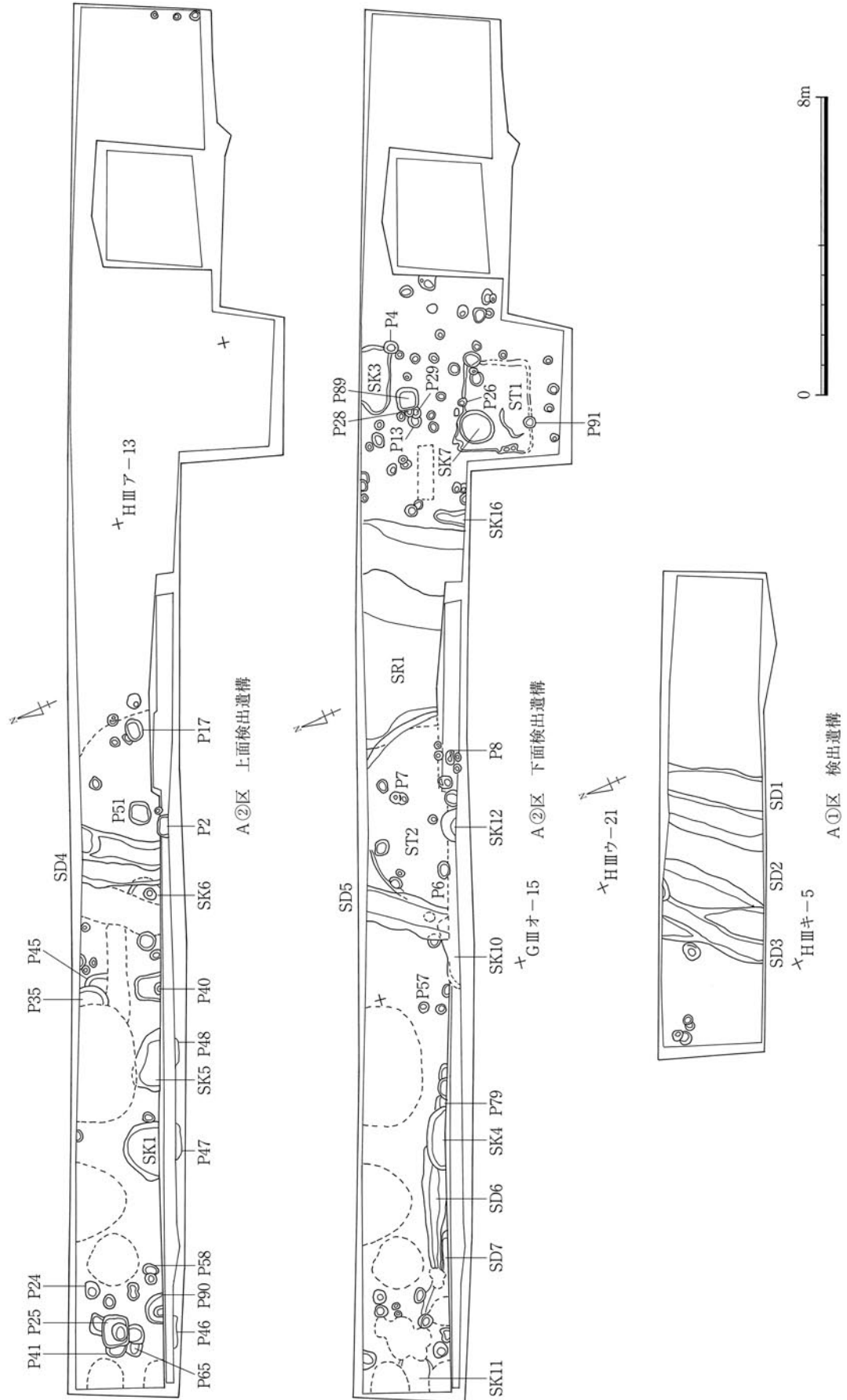


Fig.10 A①区・②区遺構全体図 S=1/160

(2) A①区検出遺構と遺物

A①区において検出された遺構は、3条の溝跡と小数のピットであった。調査前の水田の状況からみてもA②・A③区に比べA①区は標高も低く、遺構面も1面であり、すべて弥生時代の遺構と考えられる。

SD1

南北方向の溝であり、軸方向はN-34°-Eを示す。規模は検出長が2.65m、全幅1.15m、深さ17.3cm、断面形はU字形である。埋土は基本的に粘土質シルトであるが①~④層に細分される。

出土遺物は、弥生土器口縁部11点、底部1点、土器片344点、土師器口縁部1点であり、1は口縁部であり、口縁端部を下方に拡張し端面に刻目を施す。

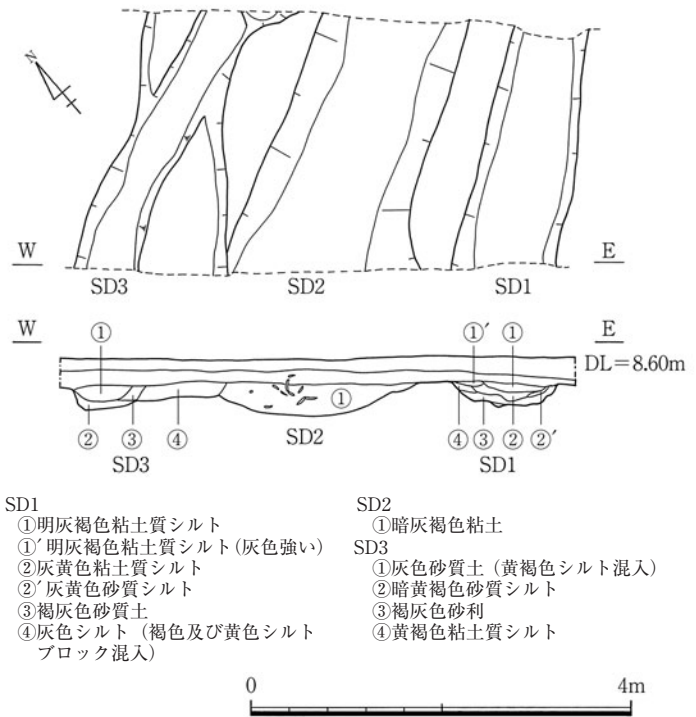
SD2

SD1の西側に並行する溝であり、軸方向はN-42°-Eを示す。規模は検出長が2.85m、全幅1.75m、深さ28.3cm、断面形はU字形である。埋土は暗灰褐色土の単一層であるが、多量の土器が出土している。中でも溝の中央部には、数個体の壺が一括廃棄状態で検出されている。出土遺物は弥生土器口縁部80点、底部53点、土器片1,230点、打製石斧1点、太型蛤刃石斧1点、扁平片刃石斧1点、サヌカイト剥片1点、焼石等であり、土器と石器12~29・31~39を図示した。12~17は貼付口縁の壺であり、櫛

描文、貼付文、口縁部に短沈線、刻目等を施す。18~24は無紋の貼付口縁壺であり、25・26は口縁下外面及び頸部に微隆起状の貼付と上胴部に小さな貼付が施される。27は口縁部下端に刻目、28は頸部櫛描文の貼付口縁である。29は細頸壺の口縁である。これらの土器は出土状況からみても弥生時代中期中葉の一括遺物と考えられる。

SD3

SD2の西に接する溝であり、軸方向はN-48°-Eであり、規模は検出長3.05m、全幅0.65m、深さ17.9cm、断面形はU字形である。出土遺物は弥生土器片が275点であり、30の弥生土器底部を図示した。



- | | |
|---------------------------|--------------------|
| SD1 | SD2 |
| ① 明灰褐色粘土質シルト | ① 暗灰褐色粘土 |
| ①' 明灰褐色粘土質シルト (灰色強い) | SD3 |
| ② 灰黄色粘土質シルト | ① 灰色砂質土 (黄褐色シルト混入) |
| ②' 灰黄色砂質シルト | ② 暗黄褐色砂質シルト |
| ③ 褐灰色砂質土 | ③ 褐灰色砂利 |
| ④ 灰色シルト (褐色及び黄色シルトブロック混入) | ④ 黄褐色粘土質シルト |

Fig.11 SD1・SD2・SD3 S=1/80

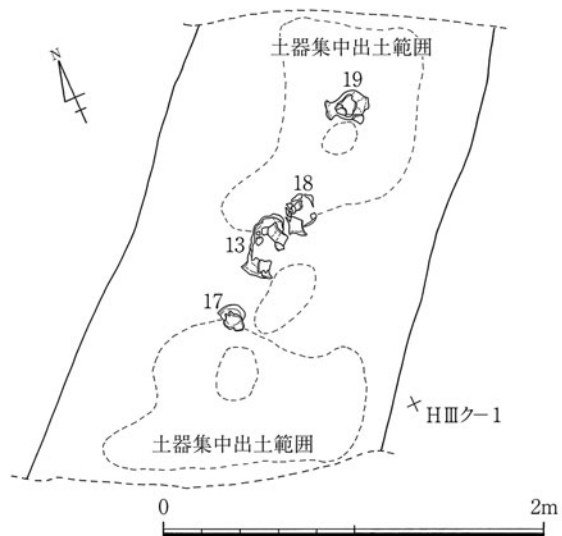


Fig.12 SD2遺物出土状況図 S=1/40

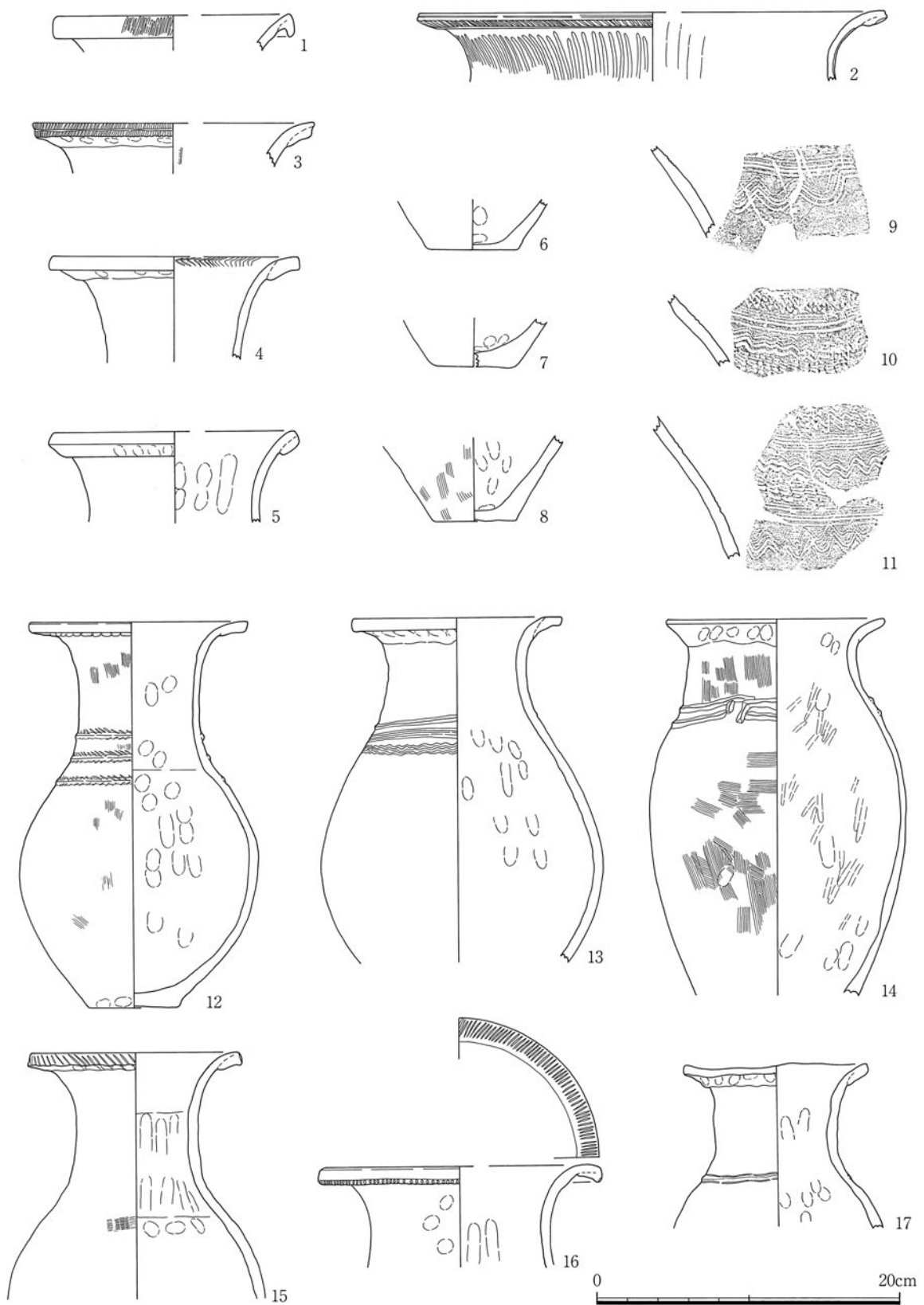


Fig.13 SD1(1) ・SD1~3(2~11) ・SD2(12~17) 出土遺物

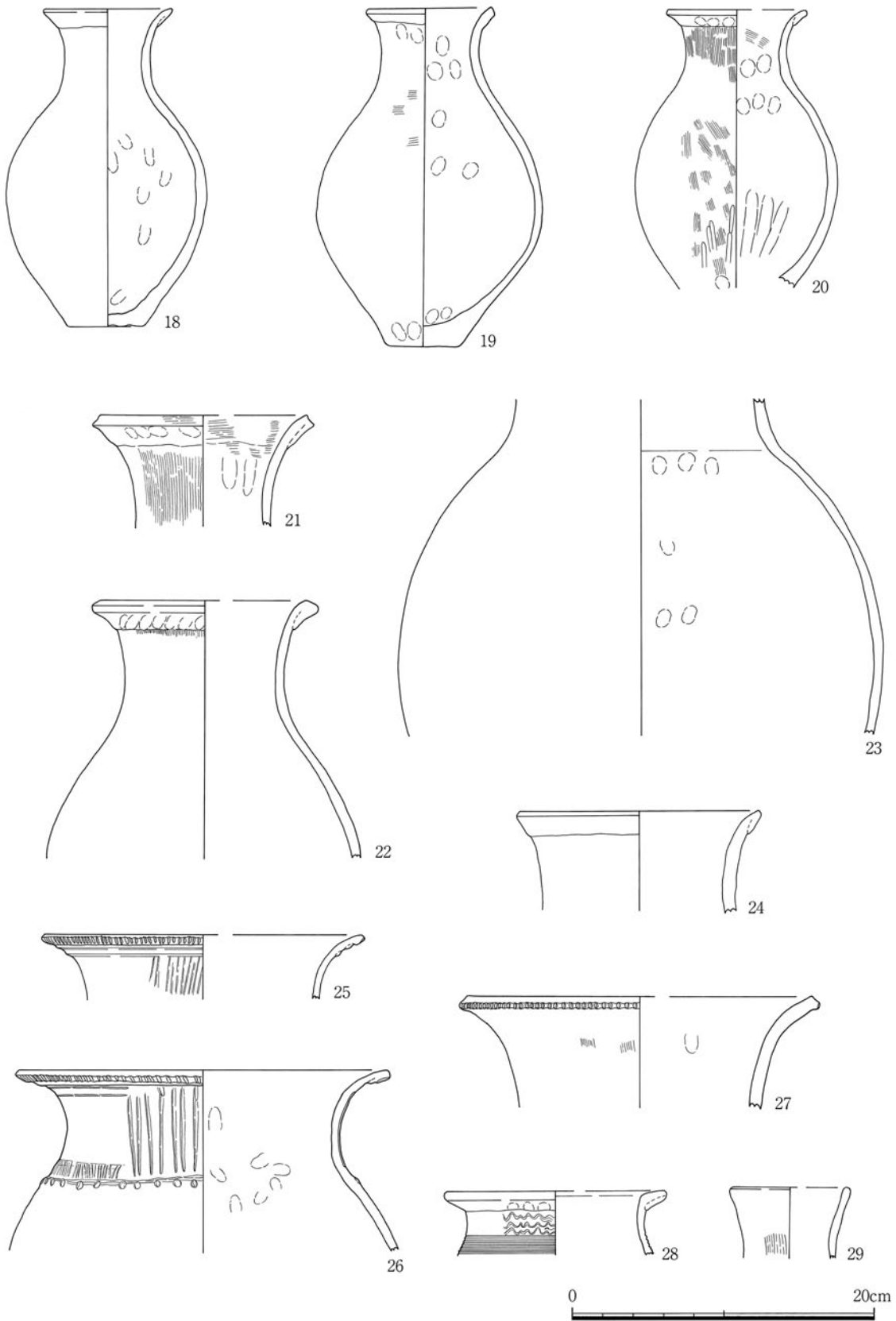


Fig.14 SD2(18~29) 出土遺物

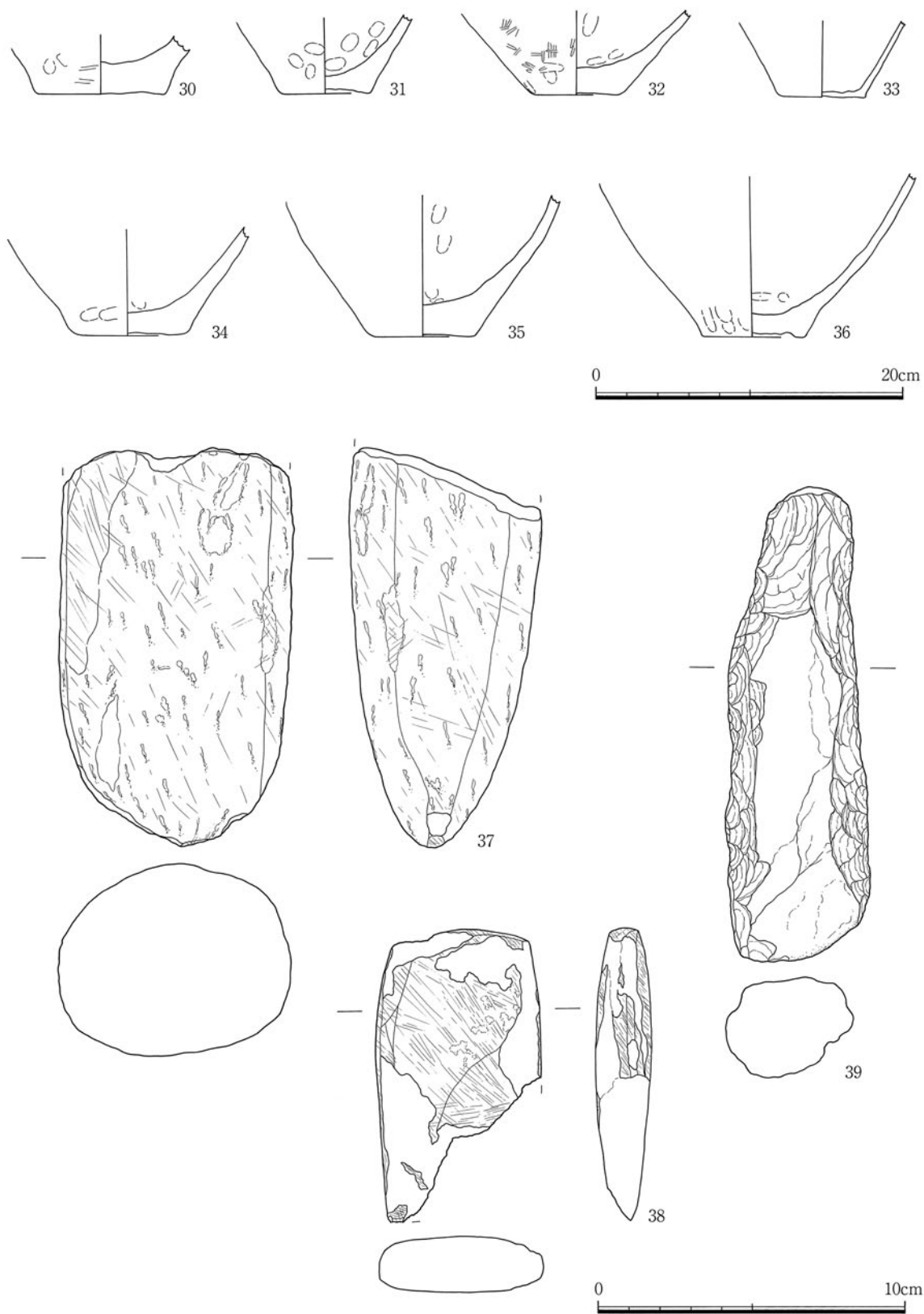


Fig.15 SD2(31~39)・SD3(30)出土遺物

(3) A②区上面検出遺構と遺物

A②区では上面及び下面の2面の遺構面が確認されており、上面では調査区の西半部に古代の柱穴を中心とする遺構群が検出されている。東半部では上面の攪乱の影響で遺構はほとんど検出されなかった。

P 2

調査区中央部で南壁にかかり検出された方形の柱穴である。規模は検出部分からみて、一辺60cmと考えられる。埋土は灰褐色シルトであり、黒色及び黄色のブロックが混入する。遺物は、弥生土器口縁部1点、底部1点、土器片20点が出土している。

P 17

調査区中央部で検出された方形の柱穴であり、規模は54cm×42cm、深さ35.8cmである。埋土は灰褐色シルトであり、褐色が強い。遺物は、弥生土器口縁部2点、底部2点、土器片28点、須恵器底部1点が出土している。図示したものは土師器口縁部(40)であり、時期的には8世紀～9世紀と考えられる。

P 24

調査区西端部で検出された不整形の柱穴であり、規模は47.5cm×40cm、深さ23cmである。埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は、弥生土器口縁部1点、土器片20点、土師器片5点、須恵器片1点が出土しており、須恵器杯底部(41)を図示した。時期的には9世紀代と考えられる。

P 25

P24に隣接して検出された方形の柱穴であり、P41を切っている。規模は80cm×60cm、深さ36.3cmであり、埋土は灰褐色砂質シルトである。中央部南よりに直径約50cm前後の柱痕が検出されているが、非常に浅い。遺物は、弥生土器口縁部2点、底部2点、土器片60点が出土している。

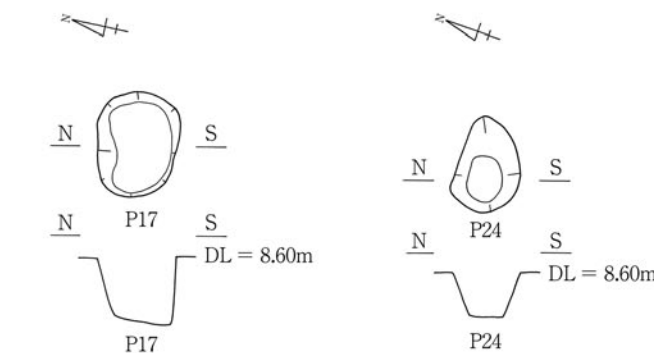
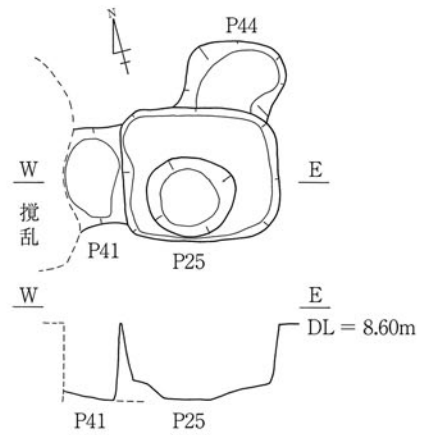
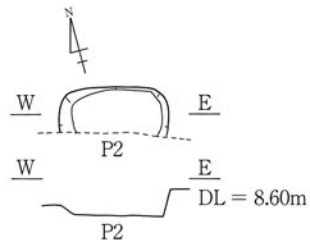
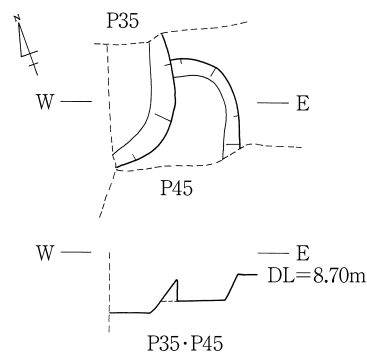


Fig.16 P2・17・24・25・41・44 S=1/40 P17(40)・P24(41)・P41(42) 出土遺物

P 35

調査区西部に検出された柱穴である。調査区北壁にかかっており、西側は攪乱によって壊されているため柱穴の平面形は不明であるが、検出部分からみると方形と考えられる。規模は検出部分で80cm×53cm、深さは24.9cmである。埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は、弥生土器口縁部1点、須恵器底部1点、須恵器片48点が出土しており、須恵器坏底部1点(43)を図示した。時期的にはやはり9世紀代と考えられる。



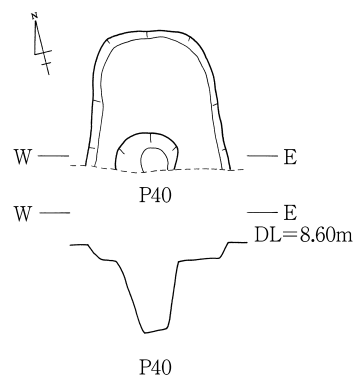
P 40

調査区西部中央で検出された柱穴であり、南壁にかかっている。柱穴形は方形であり、検出部分の規模は80cm×80cm、深さ11.8cmである。埋土は灰褐色砂質シルトであり、中央部に直径約30cmの柱痕が検出されている。遺物は、弥生土器片10点、土師器口縁部1点、須恵器片1点が出土している。



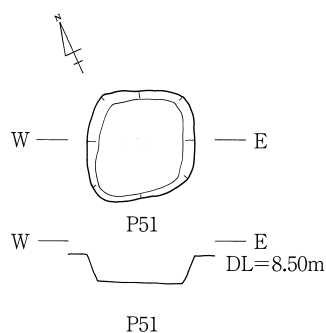
P 41

調査区の西端部で検出された方形の柱穴でありP25に切られている。検出部分の規模は50cm×30cm、深さ43cmであり、埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は、弥生土器口縁部2点、底部1点、土器片23点、須恵器口縁部2点、須恵器片6点、土師器片1点が出土しており、須恵器壺上胴部片(42)を図示した。



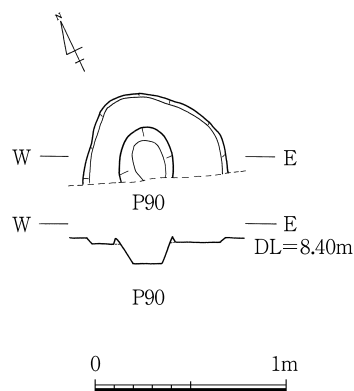
P 45

調査区中央部西寄りで検出されており、P35に切られている。検出部分からは方形の柱穴とみられ、規模は径が検出されている部分だけで60cm×55cm、深さ15.3cmである。埋土は灰褐色砂質シルトであり、遺物は弥生土器片2点が出土したのみである。



P 51

調査区の中央部、ST2に重複して検出されたほぼ正方形の柱穴である。規模は60cm×60cm、深さは16.3cmであり、柱痕は確認されていない。埋土は灰褐色砂質シルトであり、色調は褐色が強い。遺物は、弥生土器片が11点、須恵器片1点が出土している。



P 90

調査区西端部、南壁にかかり検出されており、P46に近接する。検出状況からみると方形の柱穴と考えられ、残存部位の規模は74cm×44cm、深さ13.5cmである。埋土は灰褐色砂質シルトであり、他の古代の掘立柱建物と同様であるが、遺物は出土していない。

Fig.17 P35・45・40・51・90 S=1/40
P35(43)出土遺物

SK 1

調査区西部中央で南壁にかかり検出された円形の土坑であり、断面形はU字形である。規模は長径が1.60m、短径は検出長1.00m、深さ24cmであり、埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は、弥生土器口縁部10点、底部2点、土器片67点、土師器口縁部6点が出土しており、弥生土器底部3点(45~47)、須恵器杯口縁部1点(44)、叩石1点(48)を図示した。

SK 5

調査区西部中央、SK1の東に検出されており、やはり南壁にかかっている。平面形は不整形であり、断面形はU字形である。規模は長径が1.75m、短径は検出長0.55m、深さは29.5cm、埋土は灰褐色砂質シルトであり、少量の炭化物が混入している。遺物は、弥生土器口縁部1点、土器片8点のみであり、遺物の出土量は少量である。

SK 6

調査区の中央部で検出されたが、他の遺構との切り合いにより部分的にしか確認されなかった。平面形は隅丸方形とみられ、検出長は0.60m×0.60m、深さは24cmである。床面には直径30cm、深さ30cmの円形ピット1個が検出されている。切り合い関係としては、SD4・5に切られている。遺物は、弥生土器口縁部1点、土器片40点が出土している。

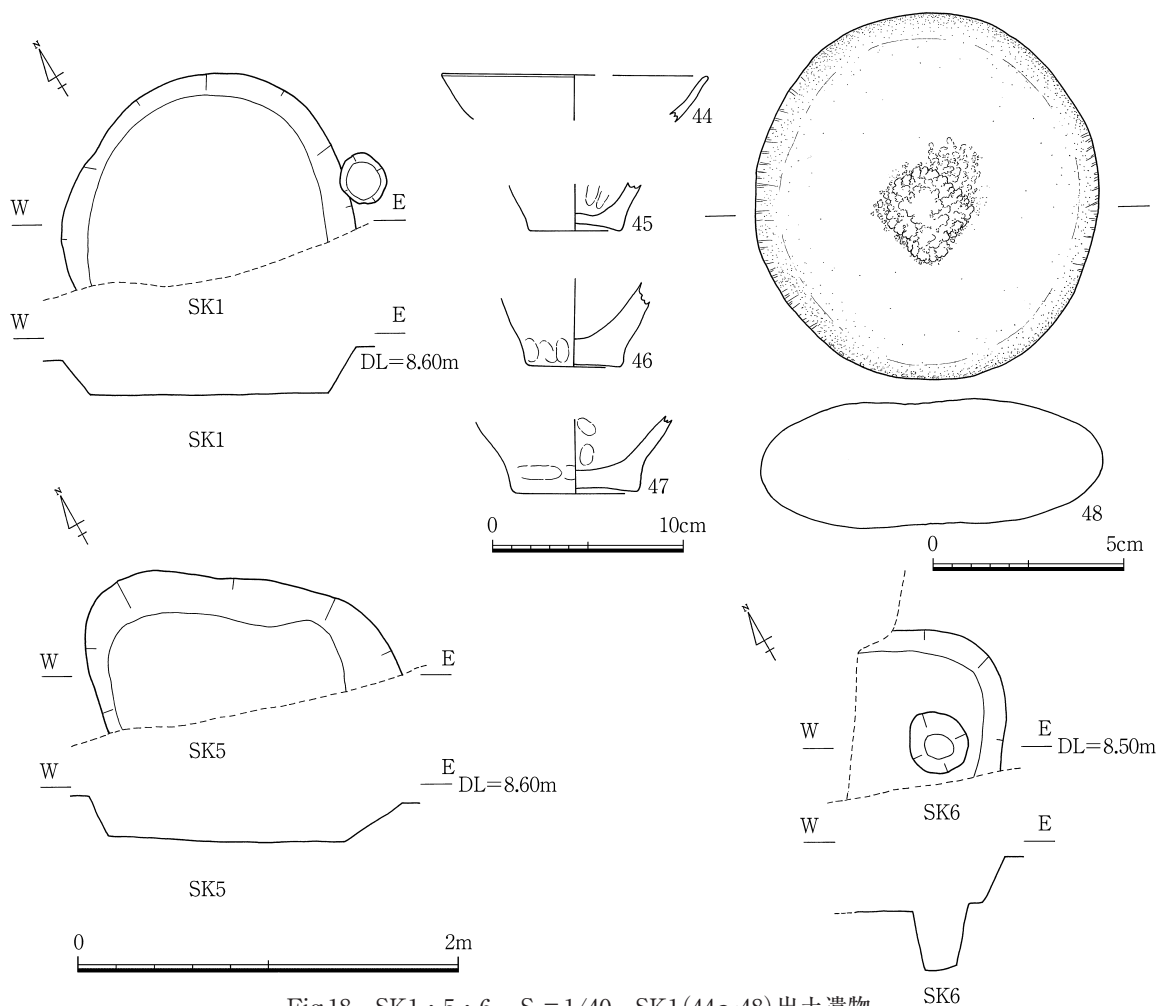
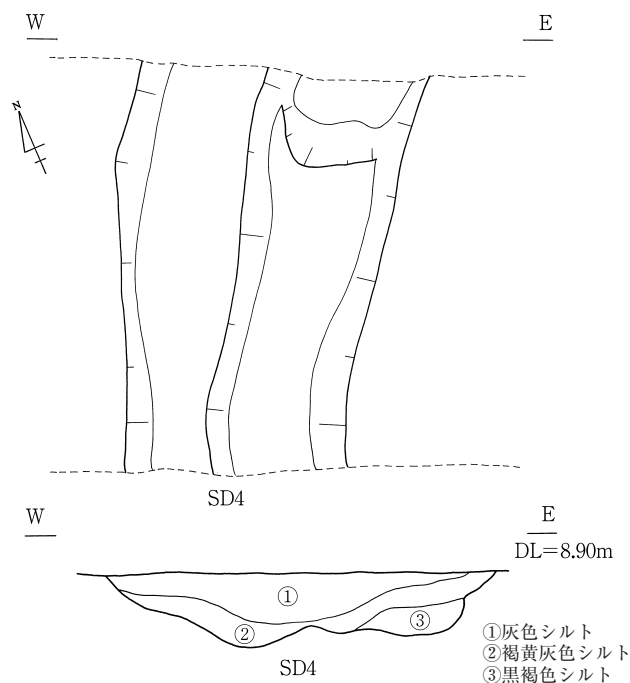


Fig.18 SK1・5・6 S=1/40 SK1(44~48)出土遺物

SD 4

調査区の中央部において検出された南北方向の溝であり、軸方向はN-25°-Eと東にやや振っている。規模は検出長2.30m、全幅1.50m、深さ27.5cmであり、断面形はU字形である。埋土は灰色シルト、褐黄灰色シルト、黒褐色シルトであり、切り合い関係ではSK6を切っている。遺物は、弥生土器口縁部5点、土器片23点、須恵器口縁部5点、須恵器片20点、土師器片6点、サヌカイト剥片1点が出土しているが少量であり、遺物の中で図示できたものは須恵器底部(49)1点である。



(4) A②区下面検出遺構と遺物

A②区の下面検出遺構には、竪穴住居跡、土坑、溝とともに自然流路1条が検出されているが、上面において攪乱により遺構が検出されなかった東半部においても竪穴住居跡、土坑、ピットが確認されている。

ST 1

調査区の東半部において検出された方形の竪穴住居跡であり、検出時には南壁にかかっていたため調査区を一部拡張し、全体を確認した。規模は、長径2.45m、短径1.85m、深さ10.7cm、面積は4.53m²である。軸方向はN-78°-Wであり、埋土は暗褐色シルトであるが2層に分けられ、上層下部には焼土、炭化物を含む。柱穴数は4個であるが、中央ピット及び壁溝等は確認されなかった。他の遺構との切り合い関係では、P26ともう1個のピットに切られているが、P91との切り合い関係は不明である。遺物は、住居跡埋土から弥生土器口縁部22点、底部4点、土器片288点、柱穴P1から土器片3点が出土しており、石器は石包丁

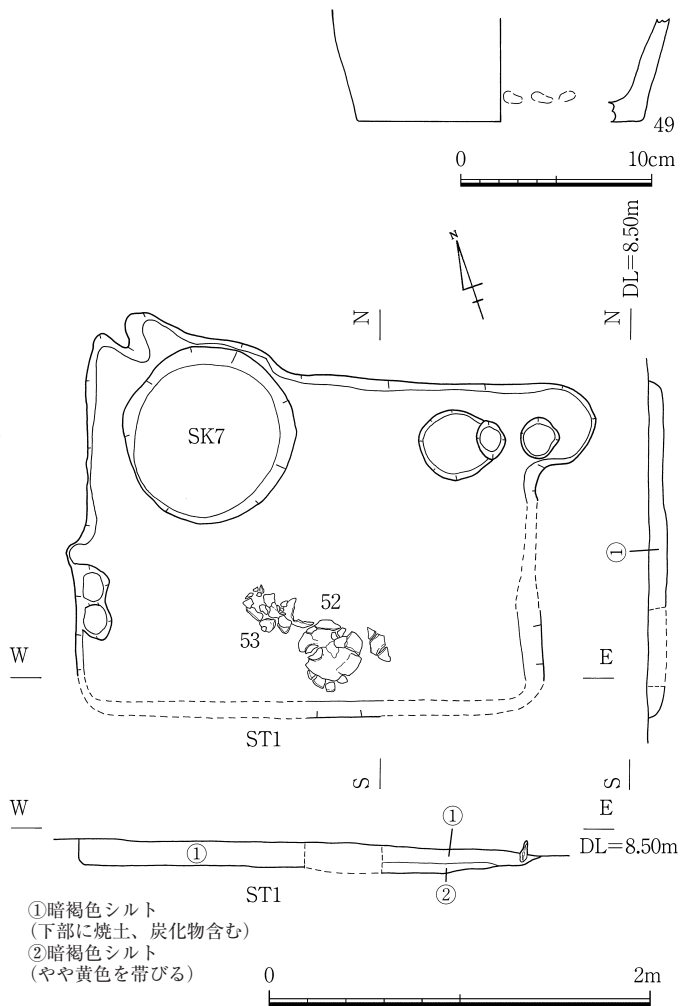


Fig.19 SD4・ST1 S=1/40 SD4(49)出土遺物

1点、叩石1点とチャート原石1点が出土している。遺物の中で図示したのは、貼付口縁で頸部貼付文の壺(50)、口縁外面及び頸部に微隆起状の突帯と円形浮文を持つ壺(51)、球形の壺下胴部(52)、底部2点(53・54)と黒色頁岩製磨製石包丁(55)である。住居跡の平面形は方形であるが、出土遺物からみて時期的には、やはり弥生時代中期中葉と考えられる。

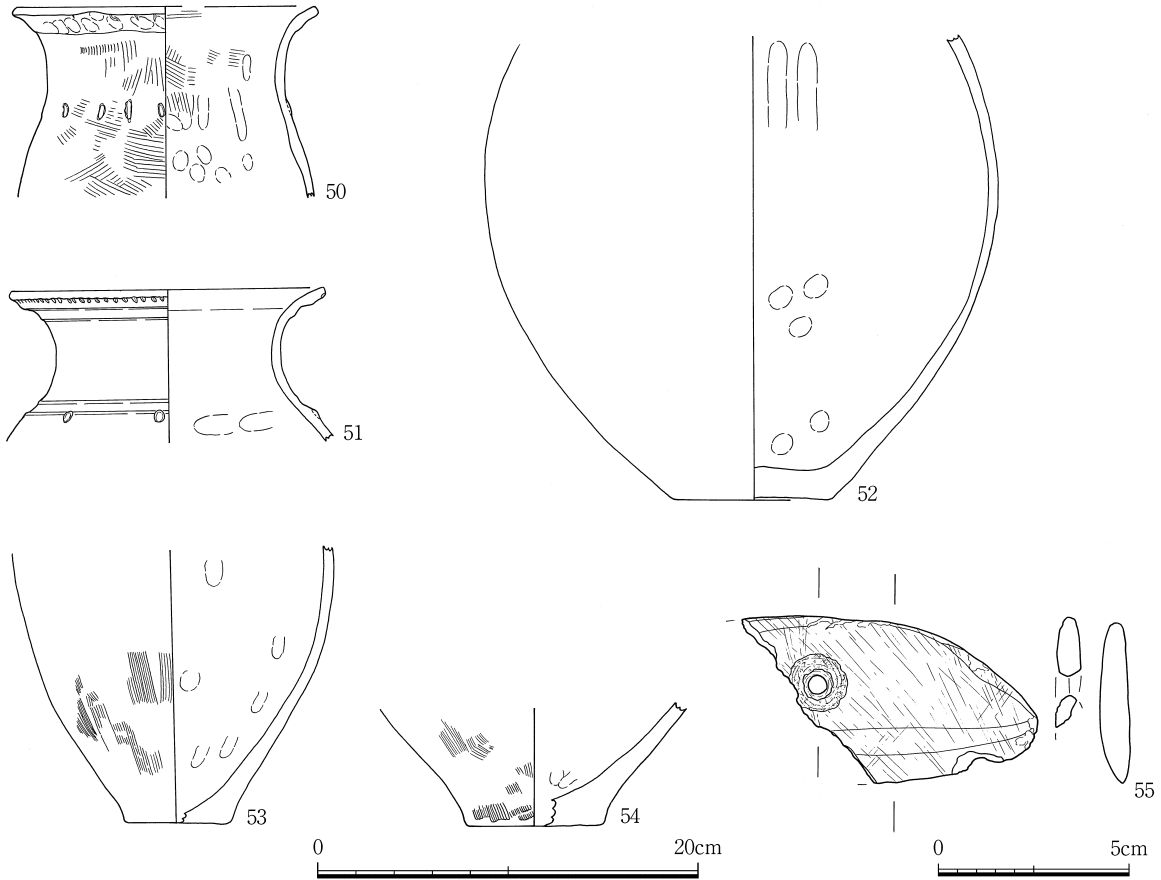


Fig.20 ST1(50~55)出土遺物

ST 2

調査区中央部において検出された円形堅穴住居跡であり、住居跡の北半部が調査区にかかっている。規模は、長径5.70m、短径の検出長2.40m、深さ41.7cmであり、面積は11.84m²である。調査の状況と南北バンクセクション及び南トレンチセクションの状況からみると、2面の床面が存在していたと考えられる。上面の床面を形成する②層黄黒褐色シルトはほぼ住居跡全面にみられ、地山同様に良く締っており、貼床状の床面と考えられるが、上面の床面では中央部に集中してピット群が検出されており周辺部には確認されず、②層も15cm前後と厚いことからすれば、上面は2次的な床面状の埋土堆積面と考えられる。また上面の貼床状床面において検出された遺構は柱穴が12個であり、この中でP3・P4は深さもあり、主要な柱穴と思われる。ただ主柱穴間の距離があまりに近いことからすれば、どちらが主柱穴として利用されていたかは不明である。主柱穴と思われる2個の柱穴の規模はP3は直径25cm×25cm、深さ17.5cm、P4は直径26cm×24cm、深さ18.1cmであり、ともに円形である。下面の床面において検出された遺構は、中央ピット1個と柱穴15個であり、柱穴の中で3個が主柱穴とみられる。中央ピットは円形であり、長軸95cm、短軸40cm、深さ47.7cmとかなりしっ

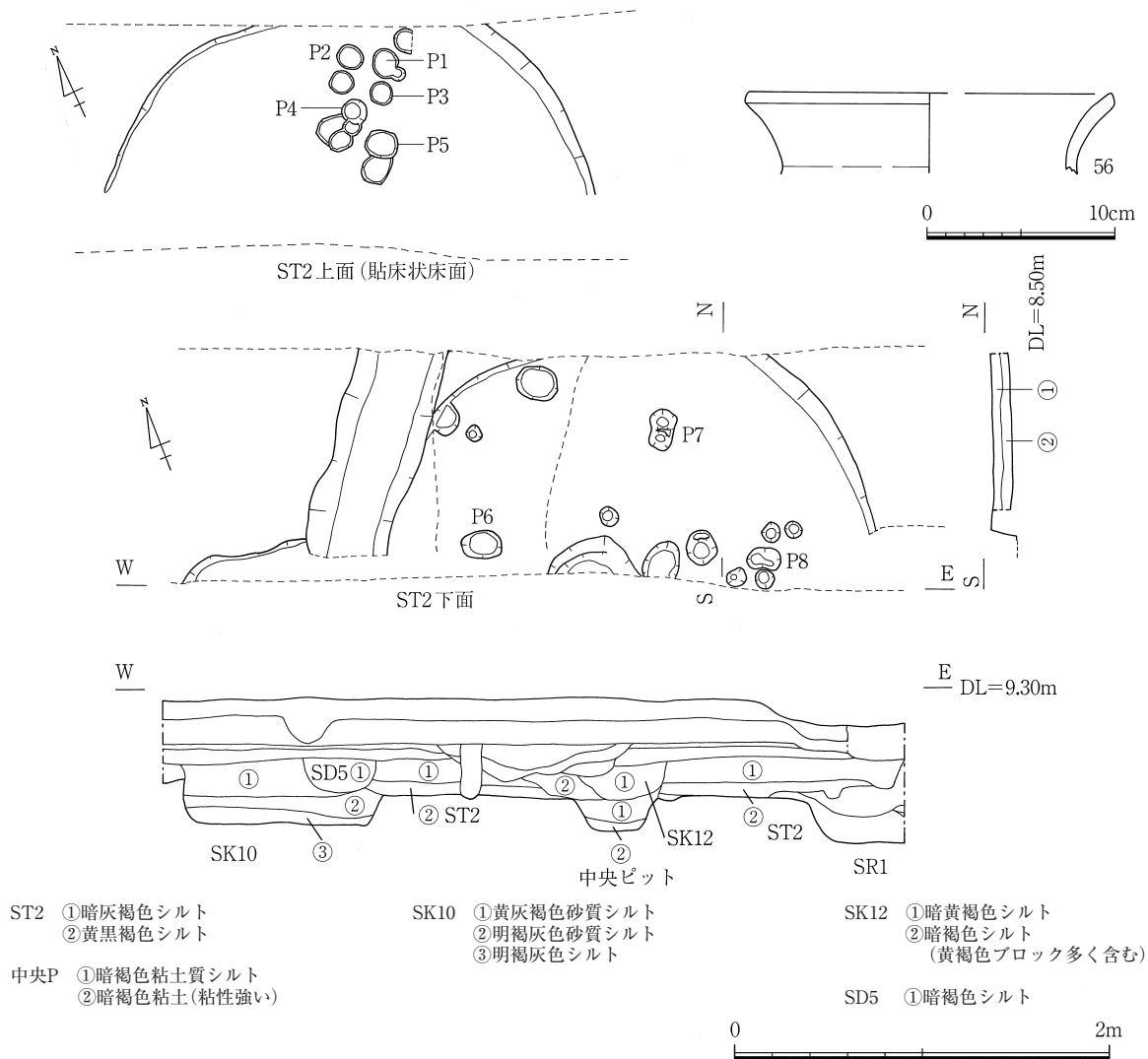
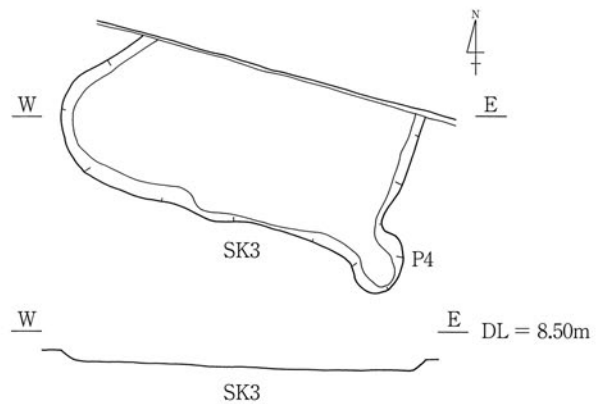


Fig.21 ST2 S=1/40・ST2(56)出土遺物

かりとした掘り込みを持っているが、SK12と重複している。埋土からみればSK12が上面床面を切り込んでおり、その下部に中央ピットが確認された状況である。主柱穴はP6～P8であり、P6は直径46cm×30cm、深さ26.6cmの楕円形、P7は直径24cm×22cm、深さ18.9cmの円形であり、2個の柱穴が切り合っている。P8は直径36cm×20cm、深さ16.5cmの楕円形であり、2個の柱穴の切り合いの可能性はある。主柱穴間の距離は、P6～P7の間は2.2m、P7～P8の間は1.7mとなっており、この間隔で全体を推定すれば4本柱の主柱穴が考えられる。また付属施設として壁溝は検出されなかった。他の遺構との切り合い関係では、SD5に切られているが、SK10とSR1を切っていることがあげられ、ST2の存続時期を考える資料となっている。遺物は、埋土中から弥生土器口縁部11点、底部1点、土器片86点、P2からは弥生土器片2点、底部1点、P3からは弥生土器片3点、P4からは弥生土器片2点、P5からは弥生土器口縁部1点、土器片8点、P6からは弥生土器片6点、中央ピットからは弥生土器口縁部が1点出土している。遺物の中で図示したのは中央ピットから出土した甕(56)である。出土量からするとST2の遺物は少なく、存続時期を決めがたいが、SD5及びSR1との切り合い関係からすれば弥生時代中期中葉ではないかと考えられる。

SK3

調査区の東半部で北壁にかかり検出された不整形の土坑であり、規模は長径1.95m、短径の検出長0.85m、深さ10cmである。断面はU字形で、主軸方向はN-75°-Wである。埋土は黄色・灰色ブロックが混じる褐色シルトであり、切り合い関係では、P4に切られている。遺物は、弥生土器片7点であり、遺構検出面及び遺物から判断して弥生時代の土坑と考えられる。



SK4

調査区の西半部、南壁にかかり検出された楕円形の土坑であり、長径1.75m、短径の検出長0.65m、深さ32.7cmである。断面形は床面が平坦に近いU字形であり、主軸方向はN-75°-Wである。埋土は褐色シルトであり、切り合い関係では、SD6・P79を切っており、上層部はSK1に切られている。遺物は、弥生土器口縁部2点、底部1点、土器片19点、石器加工途中と思われる泥岩1点が出土している。図示した遺物は、弥生土器底部(57)、大形高杯と考えられる杯部(58)、扁平片刃石斧(59)、太型蛤刃石斧(60)であり、時期としては埋土及び遺物からみて弥生時代中期末と考えられる。

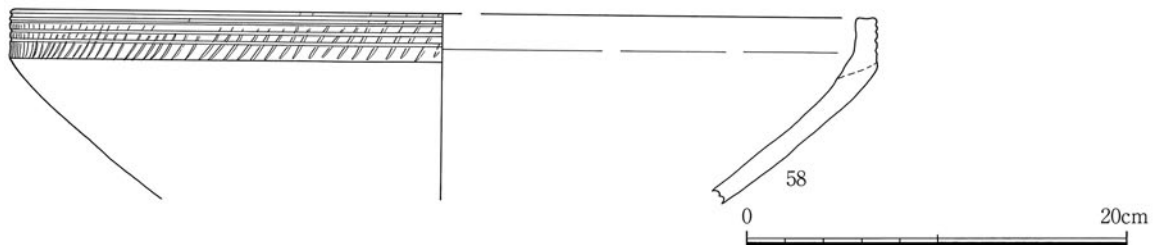
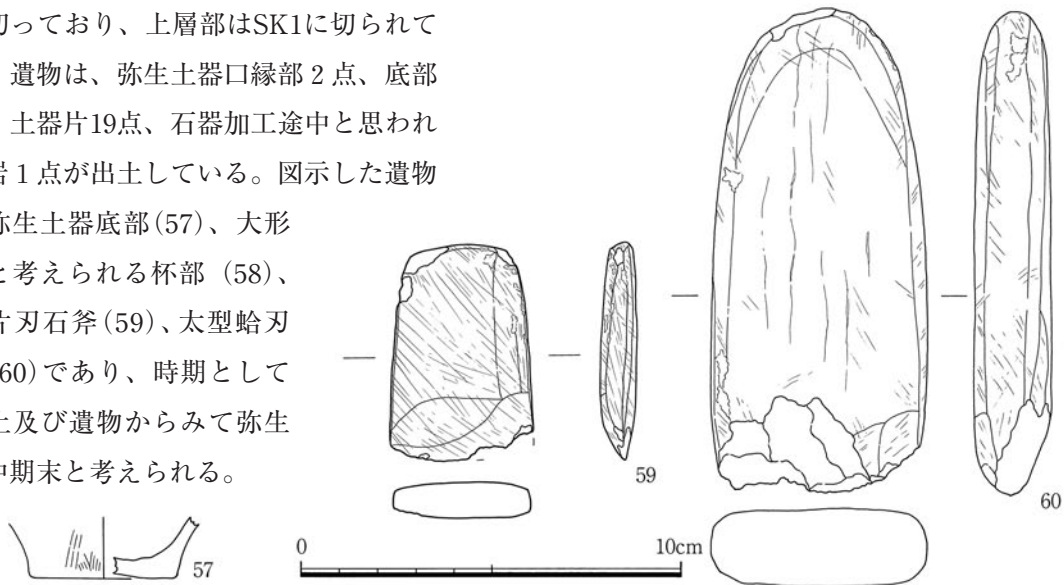
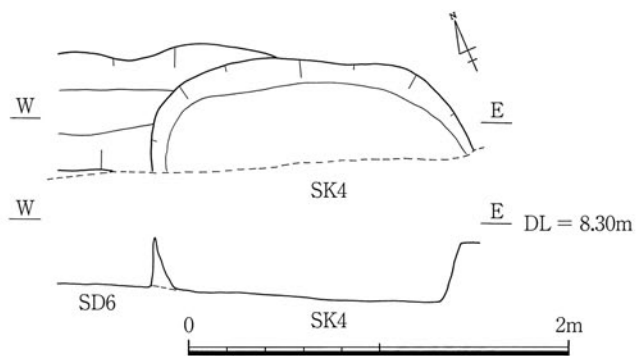


Fig.22 SK3・4 S=1/40 SK3・4(57~60)出土遺物

S K 7

調査区東半部のST1床面上で検出された円形の土坑であり、規模は、長径0.95m、短径0.90m、深さ12.7cmである。断面形は皿状であり、埋土は褐色シルトである。ST1の埋土上面では検出されず、床面で確認された状況からみてST1に伴う土坑とも言えようが、大きさ、配置等からすれば切り合い関係があったのではないかと考えられる。遺物は、弥生土器口縁部3点、土器片28点が出土している。時期としては、ST1に伴うとすれば弥生時代中期中葉と考えられる。

S K 10

調査区西半部、SD5の西に接して検出された土坑であり、南壁にかかっている。南トレンチのセクションから判断するとSD5及びST2に切られているために平面形は不明であるが、断面形は箱形であり、深さ70cmである。遺物は出土しなかったが、SD5及びST2との切り合い関係からすると、弥生時代中期中葉と考えられる。

S K 11

調査区西端部で確認された土坑であるが、攪乱が激しく、僅かしか検出できなかったため、全容は不明である。埋土は暗褐色シルトであり、切り合い関係は、上面検出遺構のP41・65に切られている。遺物は、弥生土器口縁部2点、底部1点、土器片50点が出土しており、弥生時代の遺構と考えられる。

S K 16

調査区東半部で南壁にかかり検出されている。規模は、長径0.88m、短径0.50m、深さ3.7cmと浅い溝状の土坑である。主軸方向はN-20°-Eであり、埋土は灰色の強い灰黄色シルトである。SK16から東側は現代住居により上面が削られており、埋土及び深さ等からみて上層からの掘り込みの可能性があるため、出土遺物もないため時期は不明である。

S D 5

調査区の西半部、ST2の西に接して検出された南北方向の溝跡である。軸方向はN-31°-Eであり、規模は検出長2.35m、全幅1.00m、深さ42.4cm、断面形はU字形である。埋土は暗褐色シルトの単一層であり、切り合い関係では、SK10及びST2を切っている。遺物は、弥生土器口縁部18点、底部10点、土器片228点であり、図示した遺物は、無頸壺口縁部(62)、甕口縁部(61)、底部(63・65)手づくね土器の底部(64)、砂岩製叩石(66)である。時期としては、遺物からみると弥生時代中期と考えられる。

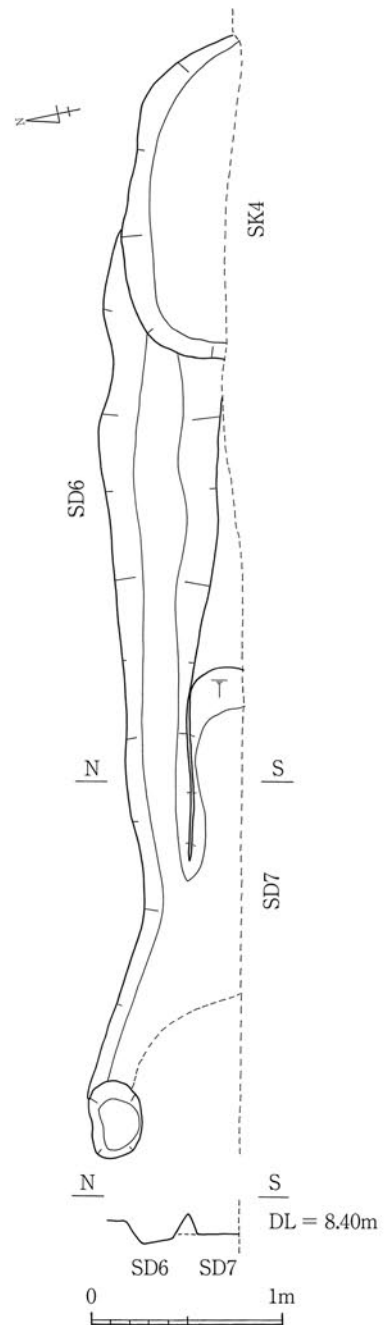
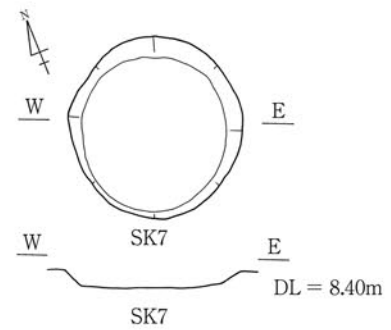


Fig.23 SK7・SD6・SD7 S = 1/40

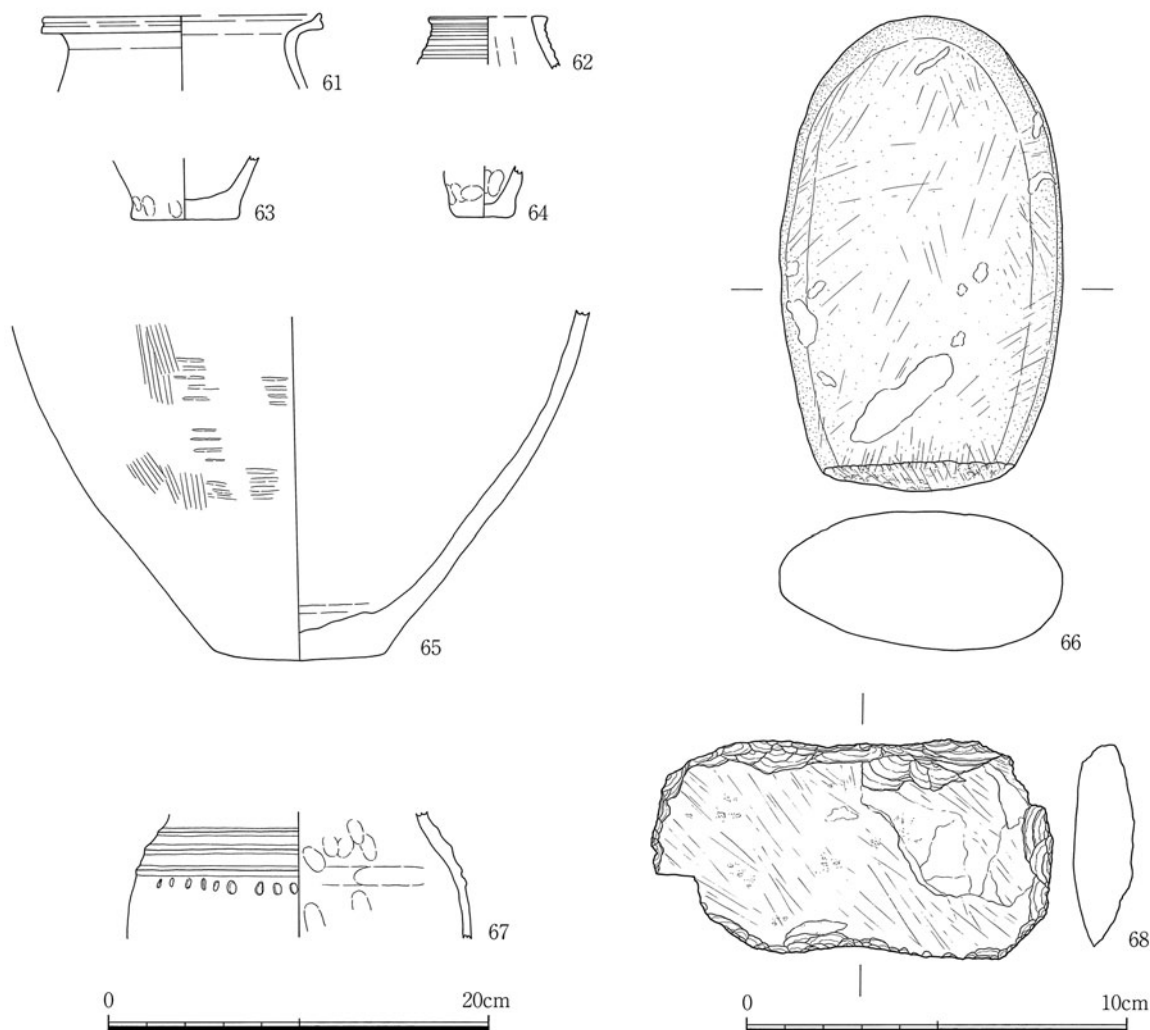


Fig.24 SD5(61~66)・SD6(68)・SD7(67)出土遺物

SD 6

調査区の西半部で南壁に沿った東西方向の溝跡である。軸方向はN-75°-W、規模は、検出長が3.25m、全幅0.65m、深さ26.9cmであり、断面形はU字形である。切り合い関係では、SD7を切っているが、SK4には切られており、埋土は暗褐色シルトである。遺物は、弥生土器口縁部1点、土器片32点が出土しており、図示したものは、粘板岩の石包丁未製品(68)である。時期としては、SK4及びSD7との切り合い関係からすると、弥生時代中期中葉と考えられる。

SD 7

SD6と同様に調査区の西部、南壁にかかり検出された東西方向の溝跡である。軸方向はN-55°-W、規模は検出長2.40m、全幅0.28m、深さ5.8cmと浅く、断面形はU字形である。埋土は暗褐色シルトであり、SD6に切られている。遺物は、弥生土器片4点が出土しており、壺胴部(67)を図示した。時期としては弥生時代中期中葉と考えられる。

SR 1

調査区の中央部、ST2の東に接して検出された南北方向の流路であり、軸方向はN-14°-Eである。規模は検出長3.10m、全幅5.40m、深さ63cm、断面形はU字形であるが床面はほぼ平坦である。底面の標高は北東が7.854m、南西が7.734mであり、切り合い関係では、西側肩部をST2に切られている。

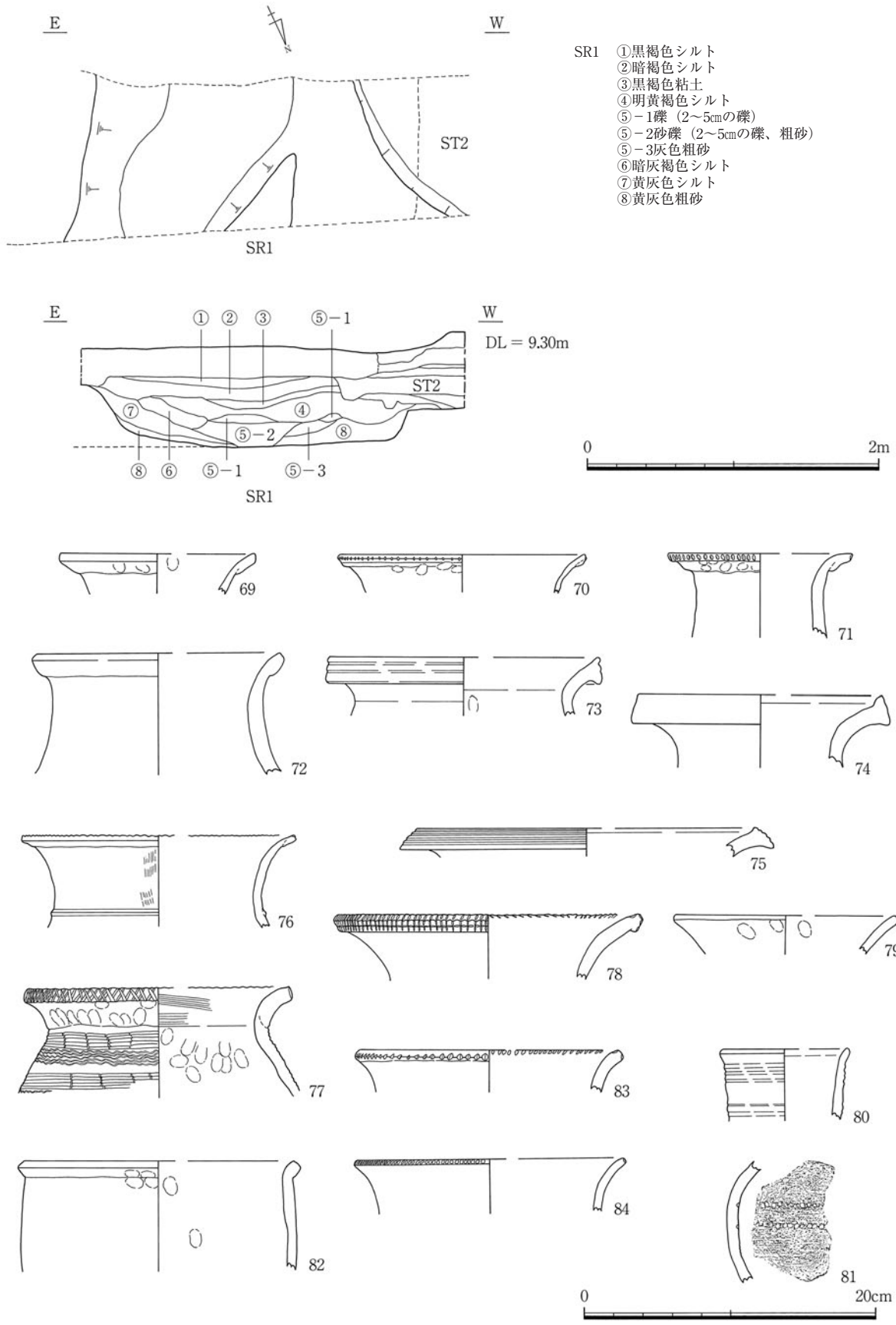


Fig.25 SR1 S=1/40・SR1(69~84)出土遺物

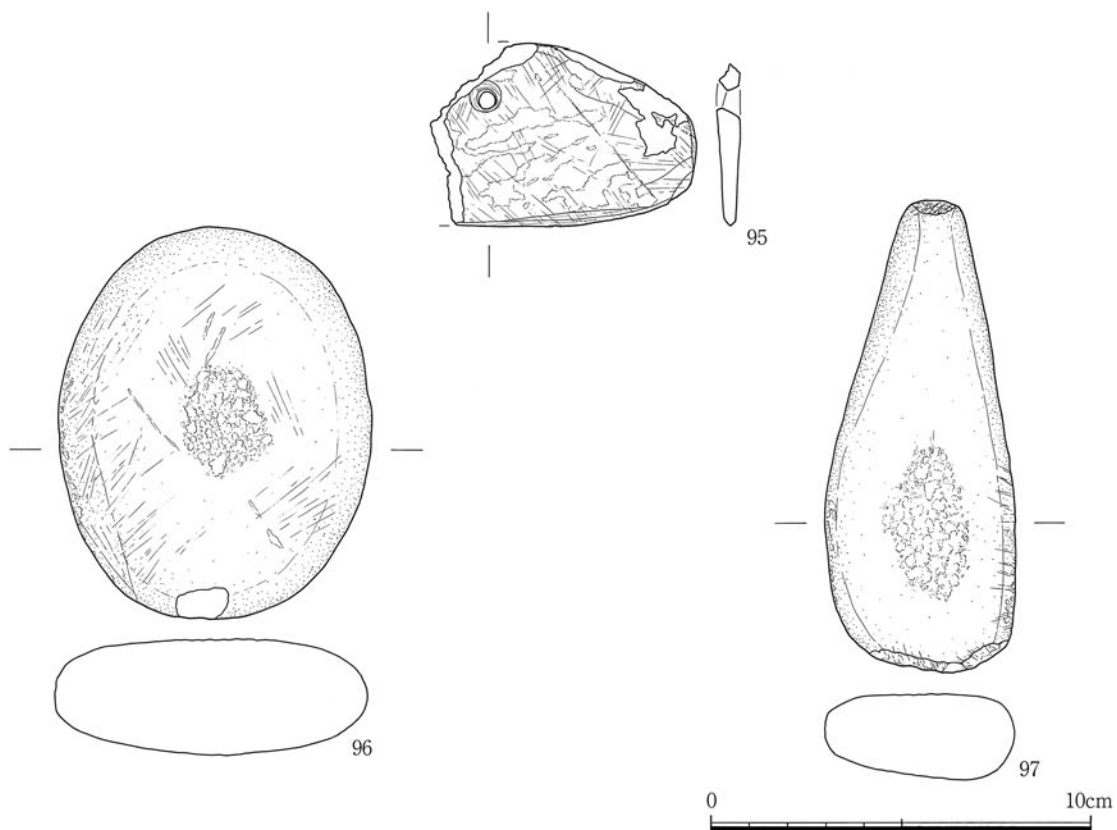
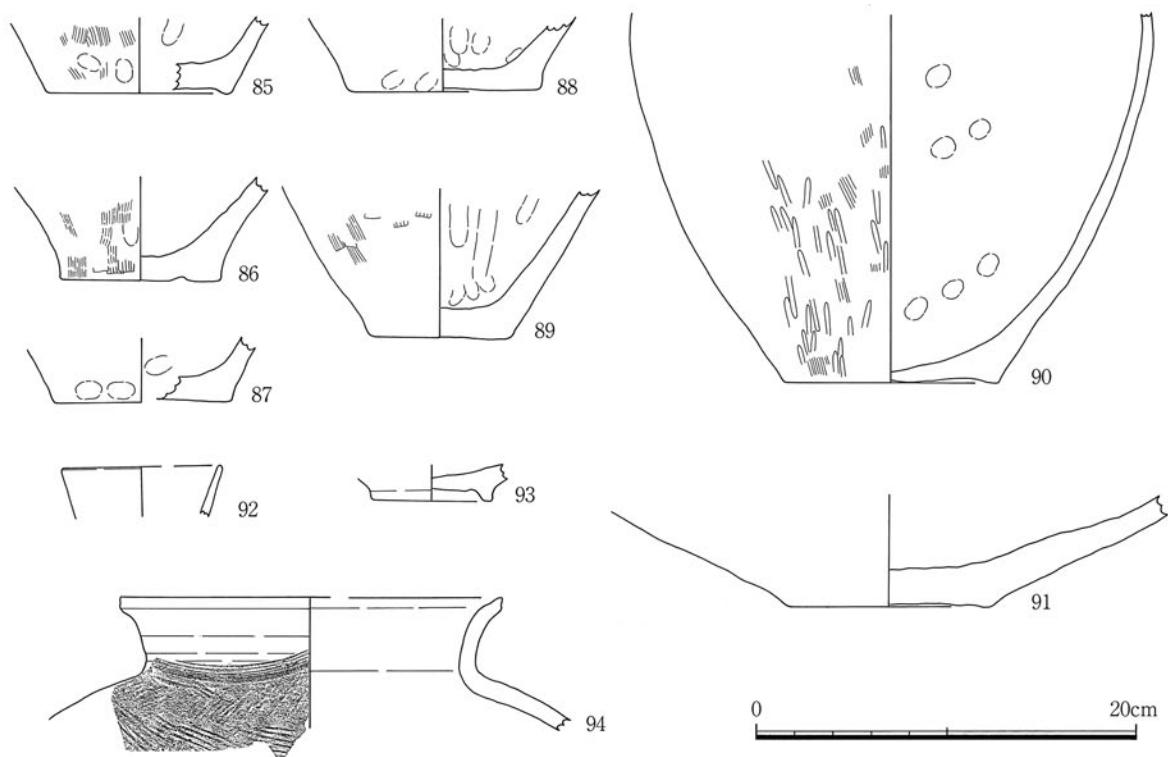


Fig.26 SR1 (85~97) 出土遺物

SR1は、埋土の状況からみれば大きく上層部と下層部に二分される。上層部の①～④層中からは弥生土器が出土するが、下層部の⑤～⑧層ではほとんど遺物の出土はみられない。流路としては弥生時代中期以前に存在しているが、出土遺物がないためにその時期は不明である。堆積状況からすれば下層部に砂及びシルトが堆積し、中央部には砂・シルトを削り砂利層の堆積がみられる。上層部では弥生時代中期を中心とする遺物を含む安定したシルトが堆積する。埋土中から出土した遺物は、弥生土器口縁部84点、底部41点、土器片888点、須恵器口縁部3点、土師器底部1点であり、サヌカイト、チャート、頁岩等の剥片も出土している。図示した遺物は、壺の口縁部として、無文の貼付口縁(69・72)、貼付口縁の端部に刻目(70・71)、口縁端部を拡張し凹線文(73・75)、口縁端部を上下に拡張し口唇を横ナデ(74)、小さな貼付口縁に刻目と頸部に突帯紋(76)、広口壺の口縁部に格子目文と上胴部に櫛描簾状文と波状文(77)、口縁端部の1条沈線に刻目(78) 無文の口縁部(79)、細頸壺の口縁部(80)、櫛描直線文に小さな刺突文(81)等であり、他に無文及び口縁部刻目の甕口縁部(82～84)、壺底部(85～91)がみられる。石器としては頁岩製磨製石包丁(95)、砂岩製叩石(96・97)、須恵器では、杯口縁部(92)、底部(93)、甕口縁部(94)等である。

P 13

調査区の東半部において検出された円形のピットであり、他のピットに切られている。規模は、直径34cm×32cm、深さ21.9cm、埋土は灰褐色砂質シルトである。遺物は弥生土器片7点が出土し、底部(98)を図示した。時期としては、遺構検出面及び遺物から弥生時代と考えられる。

P 57

調査区西半部、中央で検出された円形のピットであり、規模は直径28cm×28cm、深さ26.6cm、埋土は暗褐色シルトである。遺物は弥生土器片3点とピットに埋納されたような状態で壺の下胴部(99)が出土している。時期としては、遺構検出面及び遺物から弥生時代と考えられる。

P 89

調査区の東半部において検出された方形の柱穴であり、長径65cm、短径60cm、深さ21.2cm、断面形は箱形で軸方向はN-82°-Wである。切り合い関係はP28とP29を切っており、東半部上面が現代住居により削平されていることからみて、この柱穴の実際の掘り込み面は古代の柱穴が検出された上面遺構検出面であると考えられる。遺物は、弥生土器口縁2点、底部2点、土器片21点、とともに須恵器底部1点、土師器片7点が出土しており、時期としては古代の柱穴と考えられる。

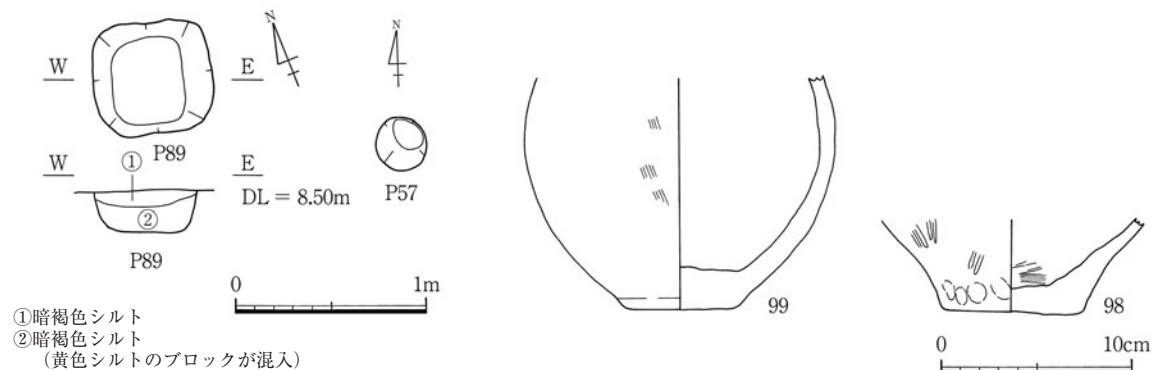


Fig.27 P57・89 S=1/40 P13(98)・P57(99)出土遺物

(5) A③区上面検出遺構と遺物

P 73

調査区東半部で検出された楕円形の柱穴であり、規模は直径72cm×56cmと大きく、深さは10.1cmである。埋土は暗褐色粘土質シルトであり、底面に直径30cmの柱痕がみられる。遺物は弥生土器口縁部1点と土器片8点が出土しており、上面検出遺構ではあるが時期的には弥生時代の柱穴の可能性はある。

S D 8

調査区の西端部で検出された南北方向の溝跡であるが、現代住居により削平されており、一部しか残されていない。残存部の規模は、長さ80cm、幅30cm、深さ5.6cm、軸方向はN-20°-Eである。断面径はU字形で埋土は灰色粘土質シルトであり、出土遺物はなかったが、埋土等からみて中世以降の溝と考えられる。

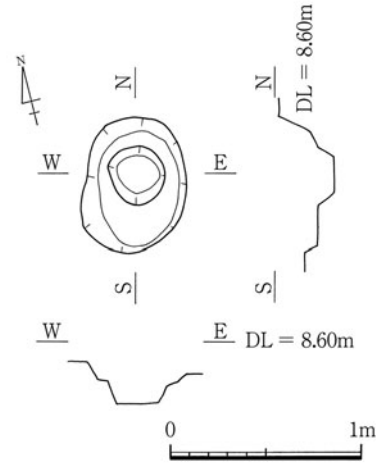


Fig.28 P73 S=1/40

(6) A③区下面検出遺構と遺物

S T 3

調査区西部で検出された円形の竪穴住居跡であり、東壁の一部と中央部が確認されるが、西壁は削平を受け確認できなかった。また中央部も現代住居により壊されており、竪穴住居跡としての確認は難しかった。規模は、推定直径は4.73m、深さ16.7cmであり、床面は1面で貼床はなく、柱穴11個が検出されたが壁溝はみられなかった。支柱穴と考えられる柱穴はP2・P5・P6の3個であり、いずれも円形である。P2は直径25.2cm×21.6cm、深さ20.7cm、P5は直径18cm、深さ10.7cm、P6は直径25.2cm、深さ10cmであり、支柱穴間の距離は、P2-P5間では1.12m、P2-P6間は2.70mとなっている。中央ピットは一部攪乱により壊されているが楕円形であり、長軸99.2cm、短軸43.2cm、深さ30.4cmとかなりしっかりとした掘り込みを持っている。住居跡自体浅いが埋土は黄褐色粘土質シルトと暗黄褐色粘土質シルトに分けられ、その間に褐灰色シルトが入っている。また中央ピットの埋土は暗褐色粘土と灰褐色粘土質シルトであり、下部に土器が含まれていた。遺物は、弥生土器口縁部20点、底部10点、土器片420点が出土しており、P1からは弥生土器片2点、P3からは弥生土器口縁部1点、土器片33点が出土している。遺物の中で図示したものは、壺貼付口縁部(100)、凹線文の甕口縁部(101)、山形文と直線文施文の胴部(104)、底部(102・103)、扁平片刃石斧(105)、磨製石斧(106)である。時期としては、出土遺物からみて弥生時代中期中葉と考えられる。

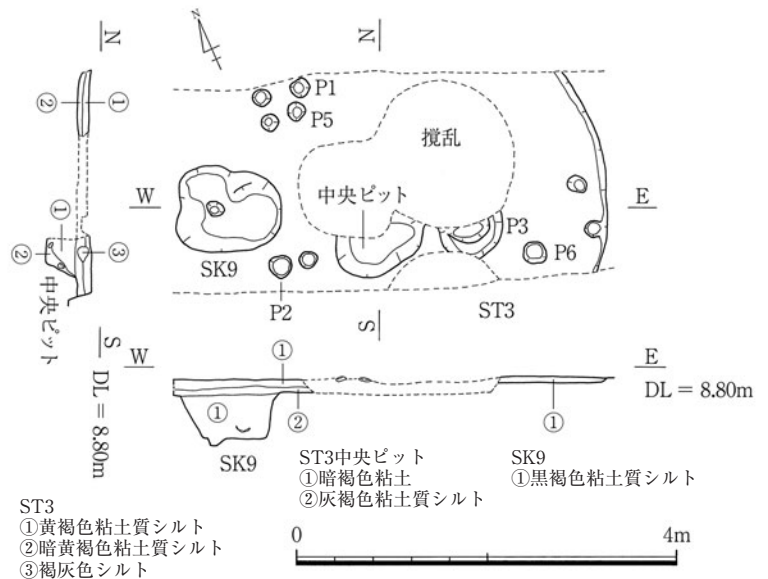


Fig.29 ST3・SK9 S=1/80

ST3
 ①黄褐色粘土質シルト
 ②暗黄褐色粘土質シルト
 ③褐灰色シルト

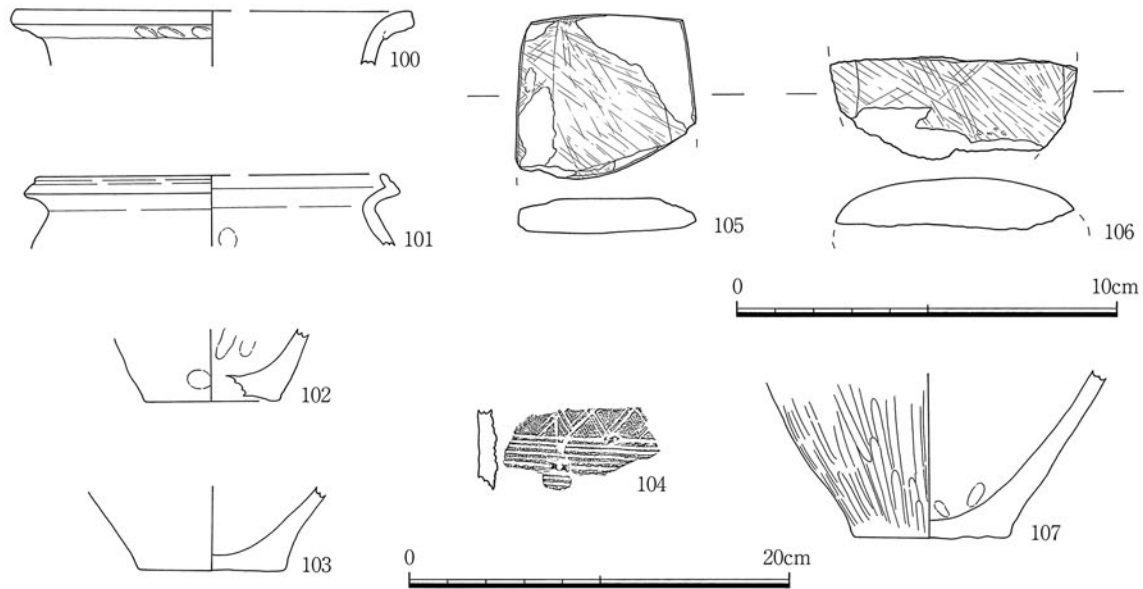


Fig.30 ST3(100~106)・SK9(107)出土遺物

ST 4

調査区の東半部において、ST5及び攪乱に切られ、検出されている。確認された部分が少なかったため、竪穴住居と判断するのは難しいが、残存部でみると、直径の検出長が1.25m、深さ14.1cmの円形の竪穴住居跡である可能性が高い。床面は1面であり貼床はみられない。柱穴は2個検出されており、P1は直径36cm×33cm、深さ21.3cm、P2は直径27cm×21cm、深さ10.7cmである。埋土は暗褐色粘土質シルトの単一層であり、遺物は、弥生土器口縁部4点、底部1点、土器片9点が出土している。時期的にはやはり弥生時代中期と考えられる。

ST 5

調査区の東半部、ST4の北に重なるように検出され、一部拡張したが全体は確認されなかった。検出部の規模は、長径2.60m、短径2.35m、深さ22.6cm、面積2.52m²であり、円形の竪穴住居とみられる。検出された柱穴は4個であり、P1は直径52.5cm×51cm、深さ24cm、P2は直径33cm、深さが11.7cm、P3は直径24cm×21cm、深さ16cm、P4は直径36cm、深さ23cmである。検出部分が少なく、中央ピットも確認されていないため、4個の柱穴が支柱穴であるか否か不明である。床面は1面であり、貼床は確認されていない。また壁溝はなく、切り合い関係ではST4を切っている。遺物は、弥生土器口縁部21点、底部6点、土器片163点が出土しており、時期的には弥生時代中期と考えられる。

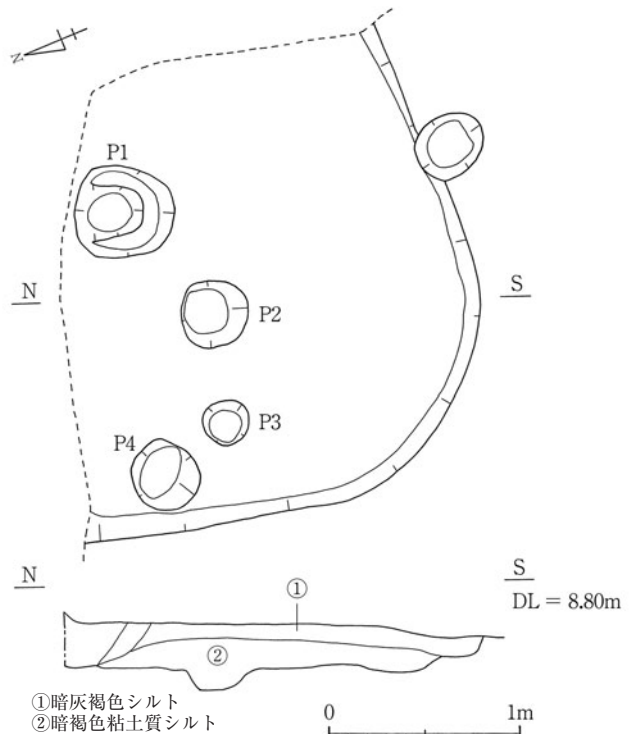


Fig.31 ST5 S=1/40

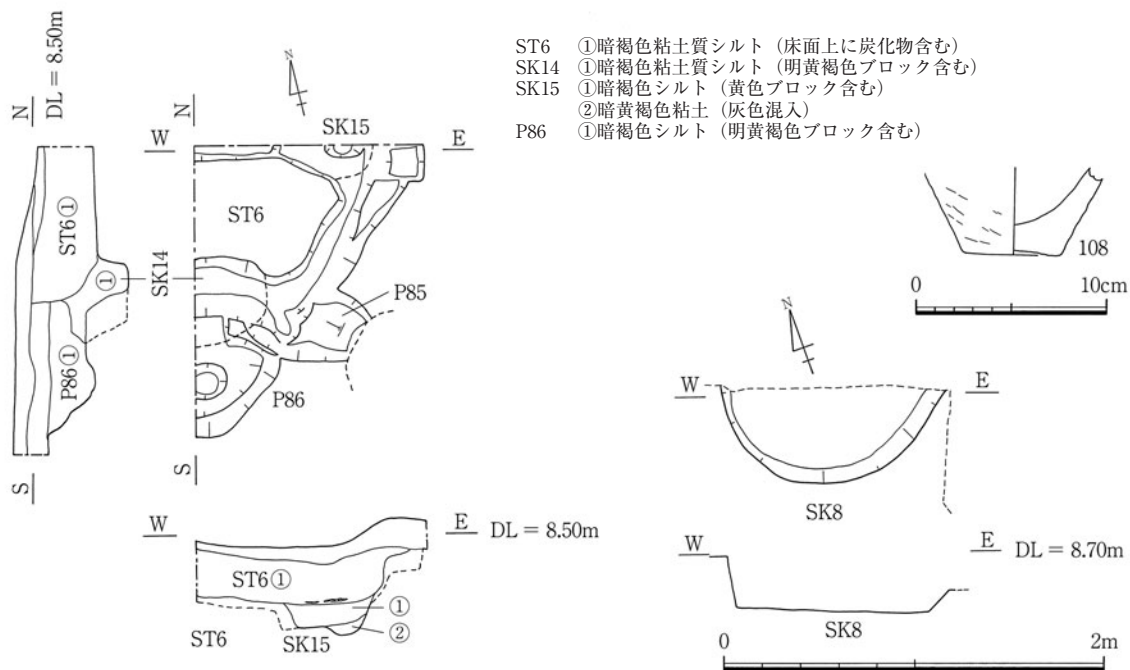


Fig.32 ST6・SK8 S=1/40 SK8(108)出土遺物

ST6

調査区の西端部にかかり検出された竪穴住居跡であるが、検出部が少なく、形態が円形であることしか確認されなかった。深さは26.9cmであり、埋土は暗褐色粘土質シルトである。切り合い関係では、SK14・P86を切っており、P85に切られている。遺物は、弥生土器口縁部12点、底部2点、土器片161点が出土している。時期的には弥生時代中期と考えられる。

SK8

調査区の西半部、北壁にかかり検出された円形の土坑である。規模は長径が1.25m、短径は北側が調査区外のため検出長は0.68m、深さ31.6cmである。断面形はU字形、軸方向はN-76°-Wであり、埋土は暗褐色粘土質シルトである。遺物は、弥生土器口縁部3点、土器片33点が出土しており、弥生土器底部(108)を図示した。時期的には弥生時代中期と考えられる。

SK9

調査区の西端部で検出された方形の土坑であり、ST6に隣接している。規模は、長径1.13m、短径0.90m、深さ40.9cm、断面形はU字形であり、南側はテラス状となっている。主軸方向はN-75°-W、埋土は暗褐色シルトであり、弥生土器片を散発的に含んでいる。切り合い関係では、SK13に切られている。遺物は、弥生土器口縁部4点、底部1点、土器片123点が出土しており、図示したものは弥生土器底部(107)である。時期的には弥生時代中期と考えられる。

SK13

調査区の西端部において検出された楕円形の土坑であり、規模は、長径0.60m、短径0.35m、深さ31.3cmである。断面形はU字形、主軸方向はN-74°-Eであり、埋土は暗褐色シルトである。付属遺構として底面にピット1個が確認されている。切り合い関係では、SK9を切っているがP85に切られている。遺物は、弥生土器の口縁部1点、土器片34点が出土している。時期としては、SK9との切り合い関係及び埋土からみて弥生時代中期と考えられる。

S K 14

調査区西端部において検出された楕円形の土坑であり、形態は、長径0.40m、短径0.34mであり、深さは、上面からST6とP86に切られているので不正確ではあるが、残存部として32cmである。断面形は逆台形、主軸方向はN-13°-Eであり、埋土は暗褐色粘土質シルト中に5~10cmの明黄褐色ブロックを多く含む。遺物は出土しなかったが、切り合い関係ではST6とP85・86に切られており、弥生時代中期と考えられる。

S K 15

調査区の西端部において検出された隅丸方形の土坑であり、北壁にかかっている。規模は、長径0.52m、短径は北側が調査区外になるので検出長0.28m、深さ13.7cmである。断面形は逆台形であるが、底部がU字形に掘り込まれているので、別遺構の可能性も考えられる。主軸方向はN-62°-Wであり、埋土は上層部が黄色ブロックを多く含む暗褐色シルト、下層部は暗黄褐色粘土である。遺物は出土しなかったが、埋土等からみて弥生時代中期と考えられる。

(7) A①・A②区南トレンチ・包含層出土遺物及びその他の出土遺物

A①・A②区南トレンチ

今回の調査区は南北方向に幅が狭く、東西方向に長いため、基本的にトレンチ調査を実施したことになるが、調査の方法としてA①区及びA②区の南壁側にトレンチを掘り込み、土層確認を行いながら調査区の基本層序の確認及び断面での遺構確認を行った。A①区のトレンチは幅約40cmで延長13m、A②区のトレンチも幅約40cm、延長24mであり、SR1の東肩部まで掘り込んだ。トレンチの土層断面では「IV基本層序」の章の挿図で示したように、調査区内の遺構の延長や調査区の南に広がるであろう古代の柱穴群等が明確に確認された。A②区におけるトレンチ調査の出土遺物としては、弥生土器底部(118)、磨製石包丁(122)、叩石(125)を図示した。

遺物包含層出土遺物

遺物包含層は基本層序のⅡ~Ⅲ層であり、「IV基本層序」の章で述べたようにⅡ層は古代の遺物包含層、Ⅲ層は古代の遺物包含層に弥生遺物が混在している。本来、存在すべき弥生の遺物包含層はおそらく古代以降の整地等により削平を受け、古代の遺物包含層と混ざり合ってⅢ層を形成したものと考えられる。包含層出土遺物の中で図示したものは、口縁端部を拡張する甕口縁(111)、凹線文甕口縁(112・113)、無文貼付口縁壺(114)、底部(119)、須恵器底部(121)である。

その他の出土遺物

尚その他の出土遺物として、A②区遺構検出面からは、無文広口壺口縁(109)、叩石(126)を、A②区Ⅳ層からは無文広口壺口縁(110)、櫛描・列点文胴部(116)を、A②区Ⅴ層からは、凹線文鉢口縁(115)、底部(117)、磨製石包丁(124)を図示し、攪乱からの表採遺物として、高杯口縁(120)、磨製石包丁(123)を図示した。

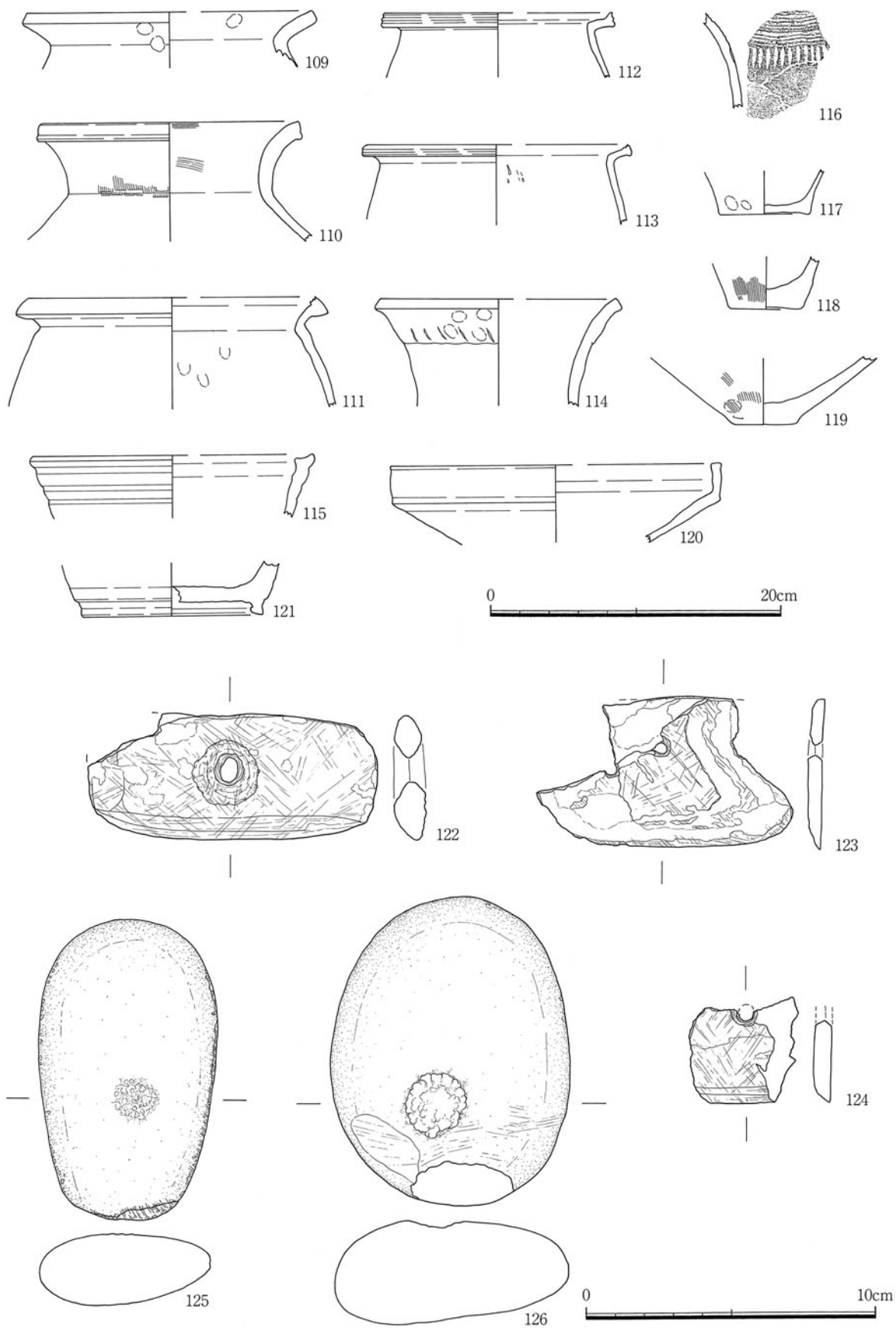


Fig.33 A②区南トレンチ(118・122・125)・遺物包含層(111~114・119・121)・表採(120・123)
 A②区遺構検出面(109・126)・A②区IV層(110・116)・A②区V層(115・117・124)出土遺物

2. B区

(1) 遺構についての概要

B区は南北市道の西側に位置する調査区であるが、空港拡張本体部分の発掘調査の結果によれば、弥生集落の西端部の北側にあたる。調査区は東よりB①区とB②区としたが、B②区は水田の畦畔等によりB②Ⅰ区とB②Ⅱ区の二つの調査区となった。調査の結果、遺構が検出されたのはB①区のみであり、B②Ⅰ区及びB②Ⅱ区では遺構、遺物は検出されなかった。B①区では、古代の溝跡、柵列と弥生時代の住居跡が検出されたが、古代が中心となるようである。

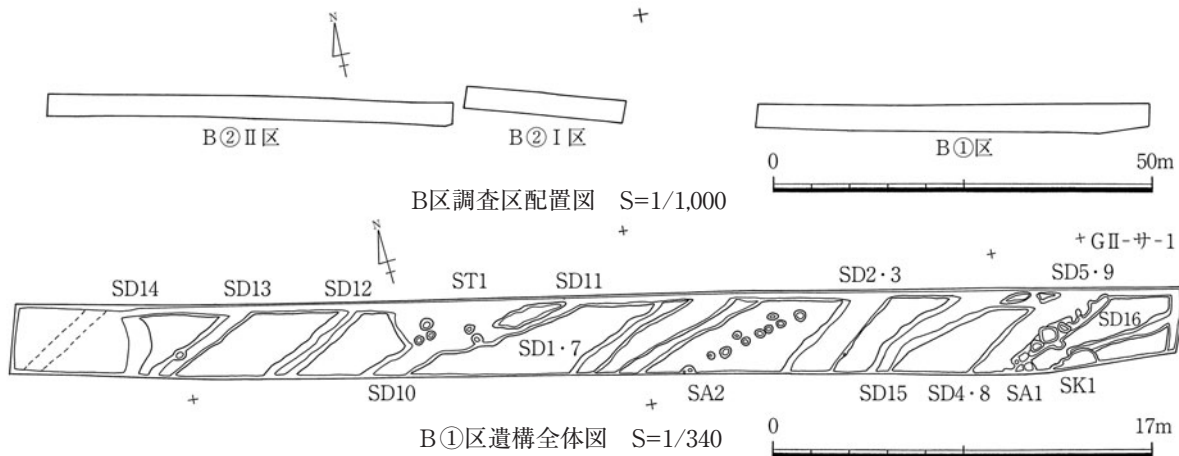


Fig.34 B区調査区配置・B①区遺構全体図

(2) B①区検出遺構と遺物

ST1

調査区の中央部、北壁に一部がかかり検出された円形と考えられる竪穴住居跡である。半分以上は調査区外であり、検出部分長は約6m、深さは3cmである。埋土は、①層褐色粘性シルト、②層暗褐色粘性シルト、③層黒褐色粘性シルトの3層に细分される。切り合関係では、SD10とSD11に切られている。出土遺物は少なく、図示できたものは弥生土器底部(127)1点であり、時期判定は難しいが、周辺部の遺構の状況からみれば弥生時代中期と考えられる。

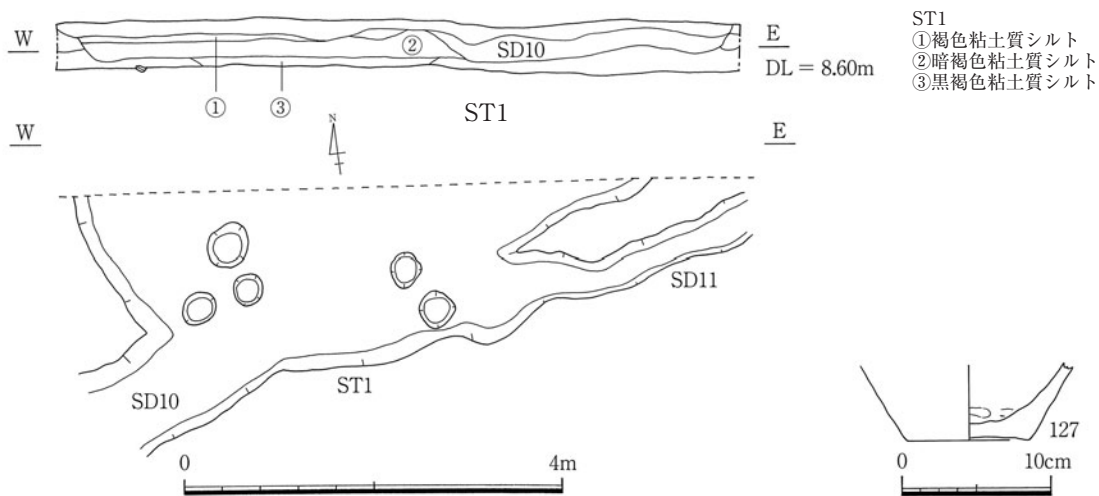


Fig.35 ST1 S=1/80 ST1(127)出土遺物

SD1

調査区の中央部で検出されており、検出長5m、幅2.2m、深さ37.5cmである。断面形は皿状であり、主軸方向はN-65°-E、底面標高は8.305mである。埋土は3層に細分され、中央部にはSD7が重複している。出土遺物は、弥生土器底部8点、口縁部9点、高杯脚部1点、須恵器1点、土師器1点、細片427点、碎片28点であり、図示した遺物は、弥生土器貼付口縁(128)、口縁部刻目に頸部櫛描文と列点文の甕(129)、大型壺底部(130)、底部(131)、土製支脚(132)、須恵器口縁部(133)、砂岩製叩石(134・135)である。時期的には弥生土器も混在するが古代と考えられる。

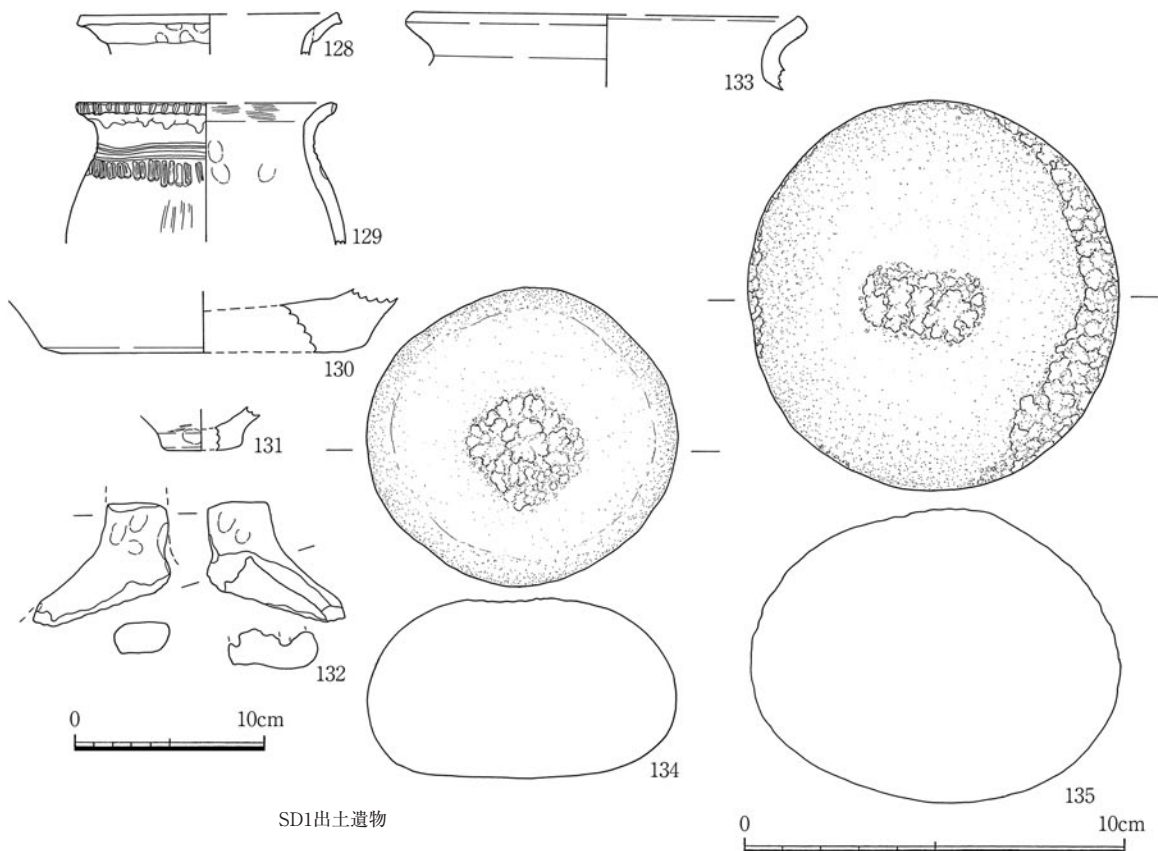
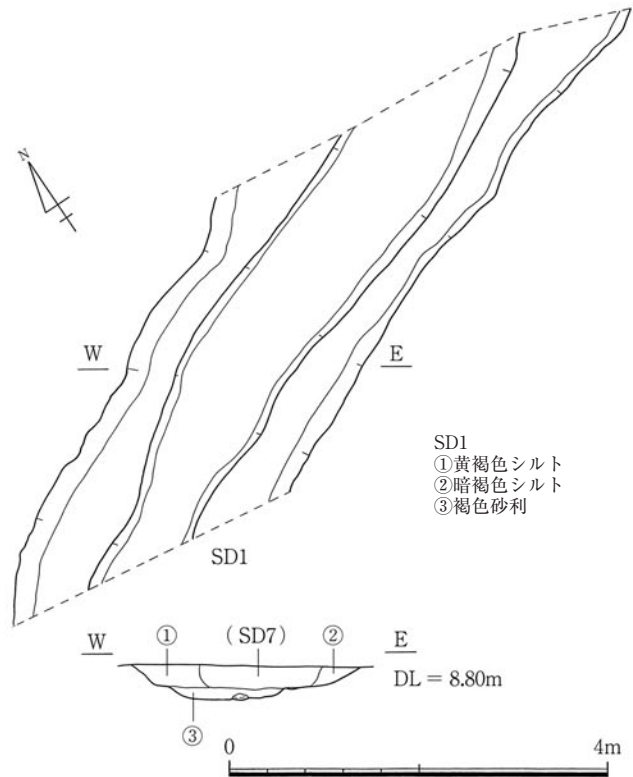


Fig.36 SD1 S=1/80 SD1(128~135)出土遺物

SD 2

調査区東半部においてSD3と重複して検出されており、検出長4.4m、幅0.7~1.1m、深さ28cmである。断面形は皿状であり、主軸方向はN-58°-E、底面標高は8.410mである。埋土は3層に細分され、SD3を切っている。出土遺物は、弥生土器底部3点、細片35点であり、図示した遺物は高杯脚部(136)である。

SD 3

SD2と重複して検出されており、SD2に切られている。検出長は4.4m、幅1.6m、深さ36cmである。断面形は皿状であり、主軸方向はN-48°-E、底面標高は8.330mである。埋土は2層に細分され、弥生土器細片12点と須恵器片1点が出土している。

SD 4

調査区の東半部でSD8と重複して検出されており、SD8を切っている。検出長は5.2m、幅1~1.2m、深さ19.5cmであり、断面形は皿状、主軸方向はN-76°-E、底面標高は8.460mである。埋土は2層に細分され、遺物は弥生土器口縁部5点、底部1点、細片19点が出土しており、弥生土器底部(137)を図示した。

SD 5

調査区東半部で検出されており、SD9と重複する。検出長は4.4m、幅0.2~0.8m、深さ22cmであり、断面形は皿状、主軸方向はN-61°-E、底面標高は8.460mである。埋土は3層に細分され、遺物は高杯脚片1点、弥生土器細片16点が出土している。

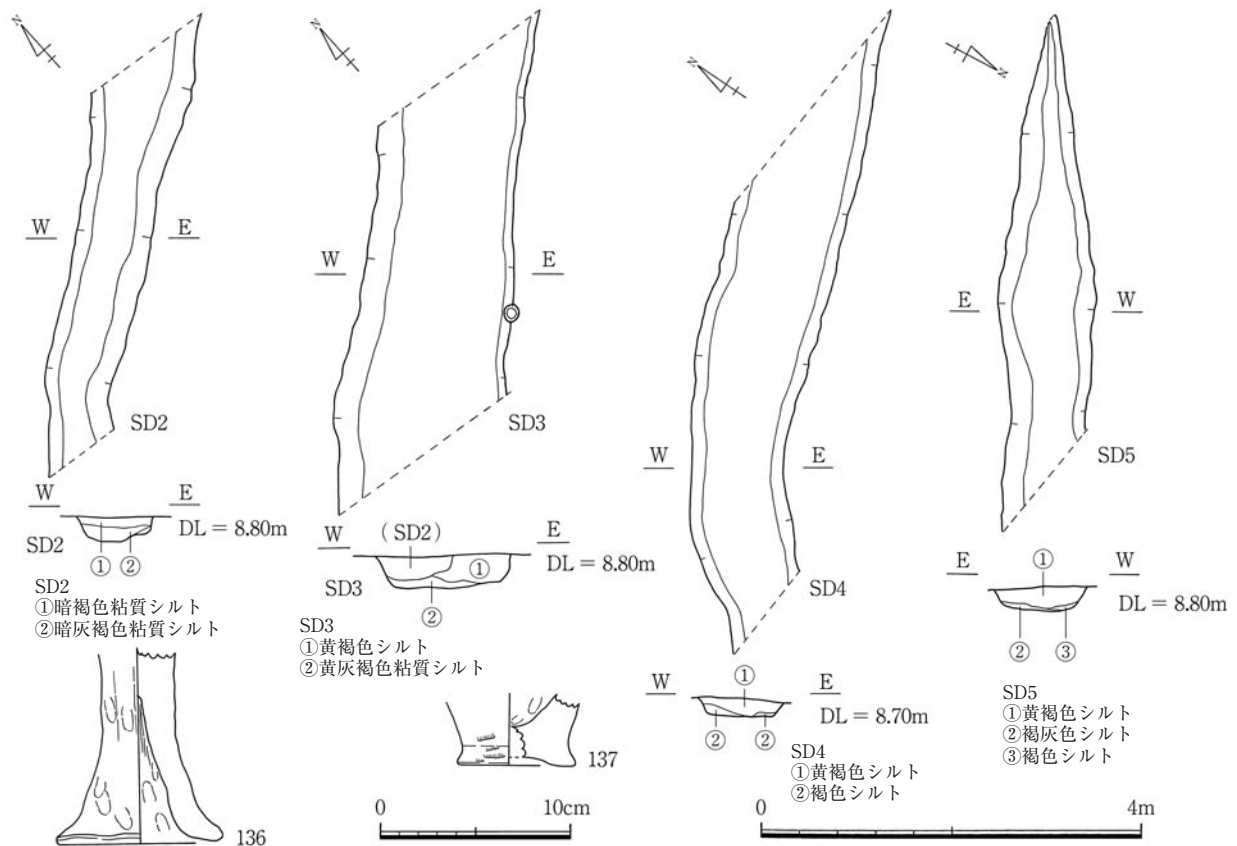


Fig.37 SD2~5 S=1/80 SD2(136)・SD4(137)出土遺物

SD 6

調査区東半部で検出された小規模な溝跡であり、SD4と重複している。検出長は2.8m、幅0.3m、深さ20cmである。断面形はSD4に切られており不明。主軸方向はN-78°-E、底面標高は8.459~8.540mである。埋土は1層であり、須恵器底部1点と弥生土器細片8点が出土している。

SD 7

調査区中央部のSD1と重複して検出されており、SD1を切っている。検出長は5m、幅0.5~1.0m、深さ27cm、断面形は皿状であり、主軸方向はN-65°-E、底面標高は8.410mである。埋土は2層に細分され、弥生土器口縁部4点、高杯脚部片2点、土師器細片89点が出土しており、弥生甕口縁部(138)を図示した。

SD 8

調査区東半部においてSD4の底部に重複し、検出された細い溝跡であり、検出長は7m、幅0.3m、深さ22.5cm、断面形は箱形、主軸方向はN-72°~90°-E、底面標高は8.425mである。埋土は黒褐

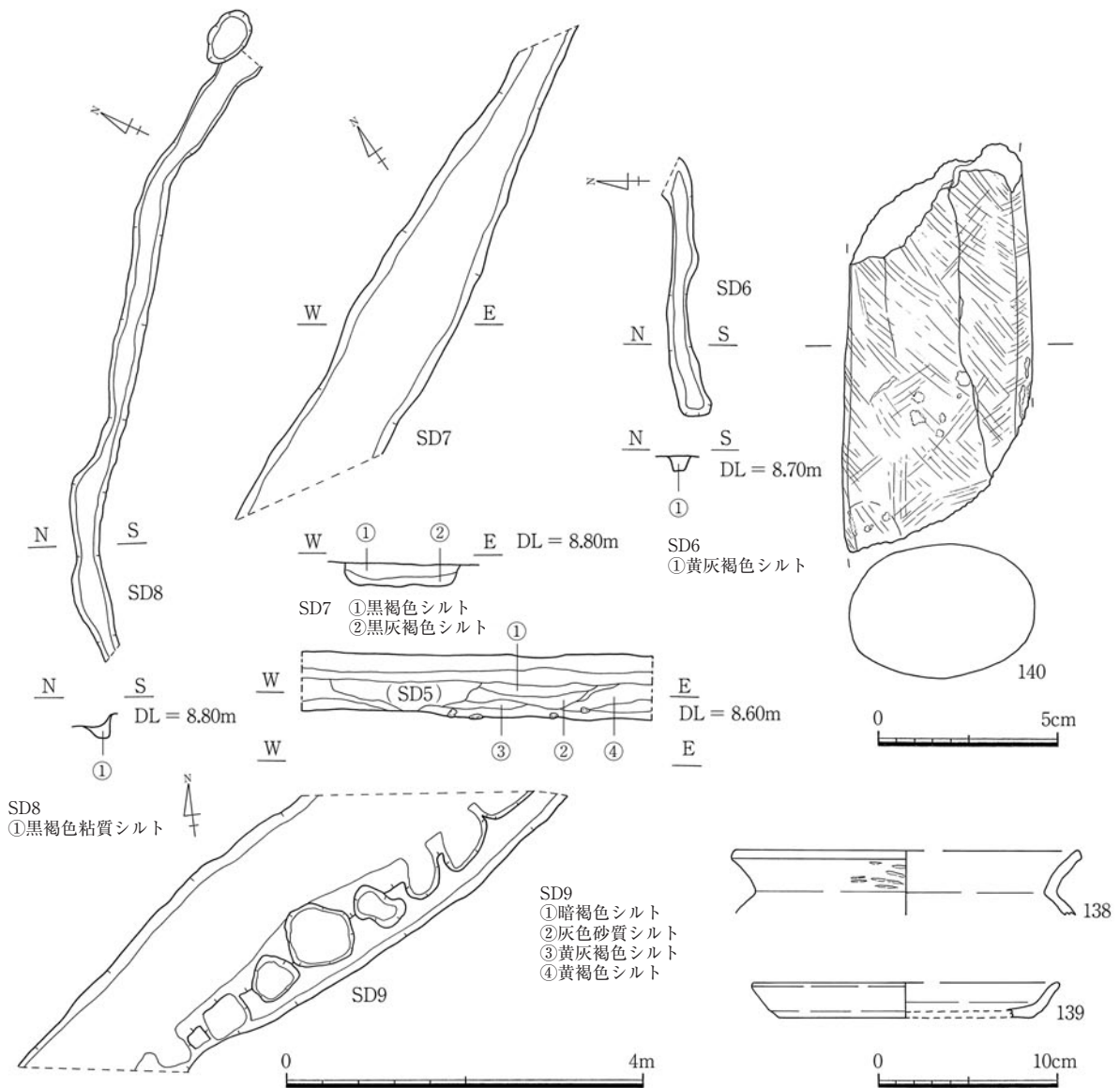


Fig.38 SD6~9 S=1/80 SD7(138)・SD8(139)・SD9(140)出土遺物

色粘性シルト単一層であり、出土遺物は、弥生土器底部1点、破片2点、細片40点、須恵器口縁1点、土師器2点である。遺物の中で図示できたのは須恵器皿口縁部(139)のみである。

SD 9

調査区東端部で検出されており、東肩部にSA1が接している。検出長は5m、幅1.4~2.0m、深さ21.5cm、断面形は浅い皿状であり、主軸方向はN-65°-E、底面標高は8.415mである。埋土は4層であり、約18cm掘り下げるとSA1が検出され、SD5に切られている。出土遺物には緑色岩製磨製石斧(140)が出土している。

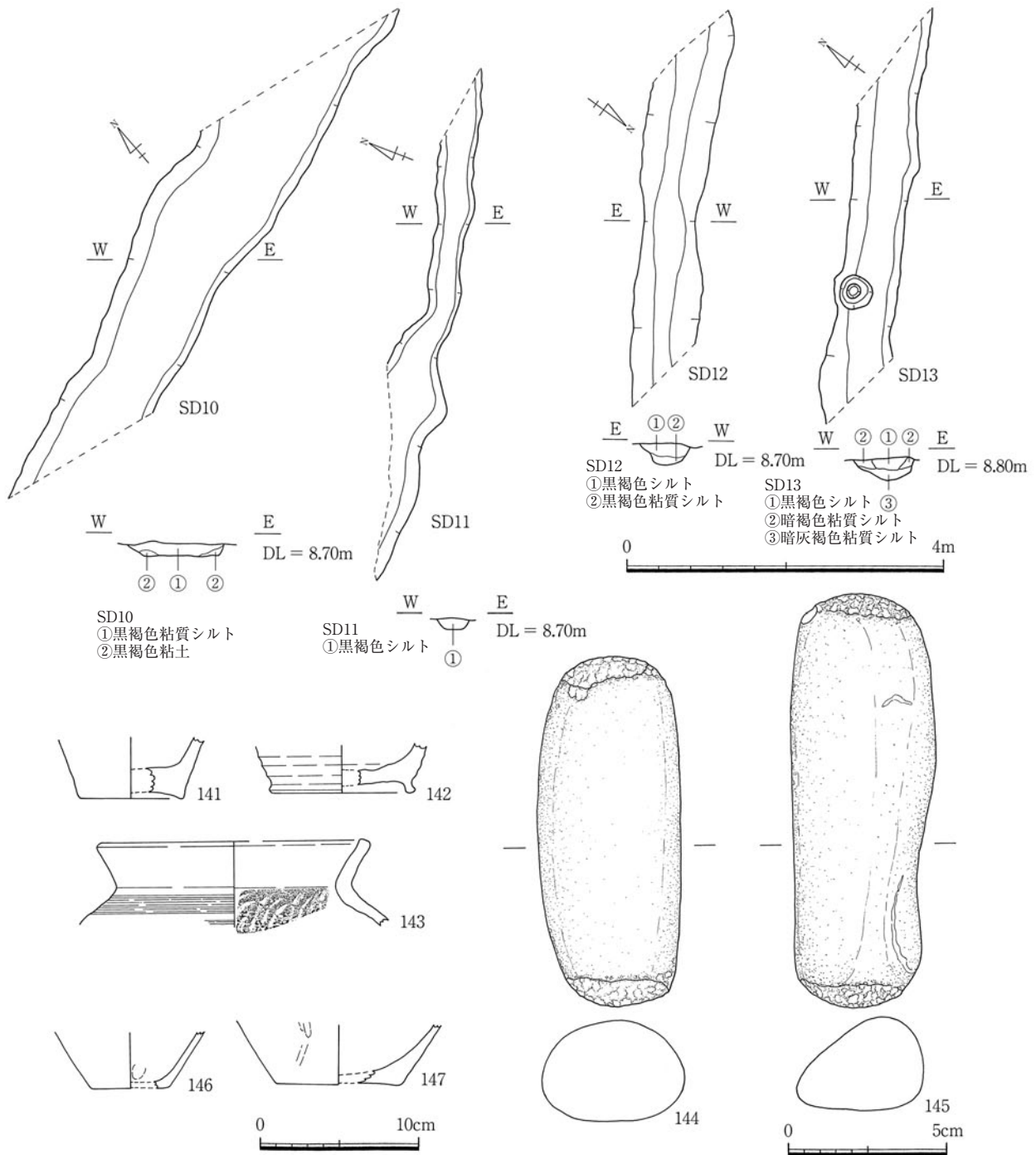


Fig.39 SD10~13 S=1/80 SD10(141~145)・SD11(146・147)出土遺物

S D 10

調査区の中央部でST1を切って検出されている。検出長は5m、幅1.4m、深さ14cmであり、断面形は皿状、主軸方向はN-69°-E、底面標高は8.420mである。埋土は2層に細分され、出土遺物は弥生土器口縁部5点、底部4点、高杯脚部1点、須恵器蓋1点、細片252点であり、図示した遺物は、弥生土器底部(141)、須恵器底部(142)、甕口縁部(143)、叩石(144・145)である。

S D 11

調査区中央部でST1を切って検出されているが、SD10に切られている。検出長は5.6m、幅0.4~0.7m、深さ12cmであり、断面形は皿状、主軸方向はN-76°-E、底面標高は8.500mである。埋土は黒褐色シルト一層であり、出土遺物は弥生土器口縁部1点、細片13点、須恵器1点であるが図示したのは弥生土器底部(146・147)2点である。

S D 12

調査区西半部で検出されており、検出長は4.4m、幅0.8m、深さ26cm、断面形は皿状、主軸方向はN-57°-E、底面標高は8.380mである。埋土は2層に細分され、出土遺物は弥生土器細片6点のみであった。

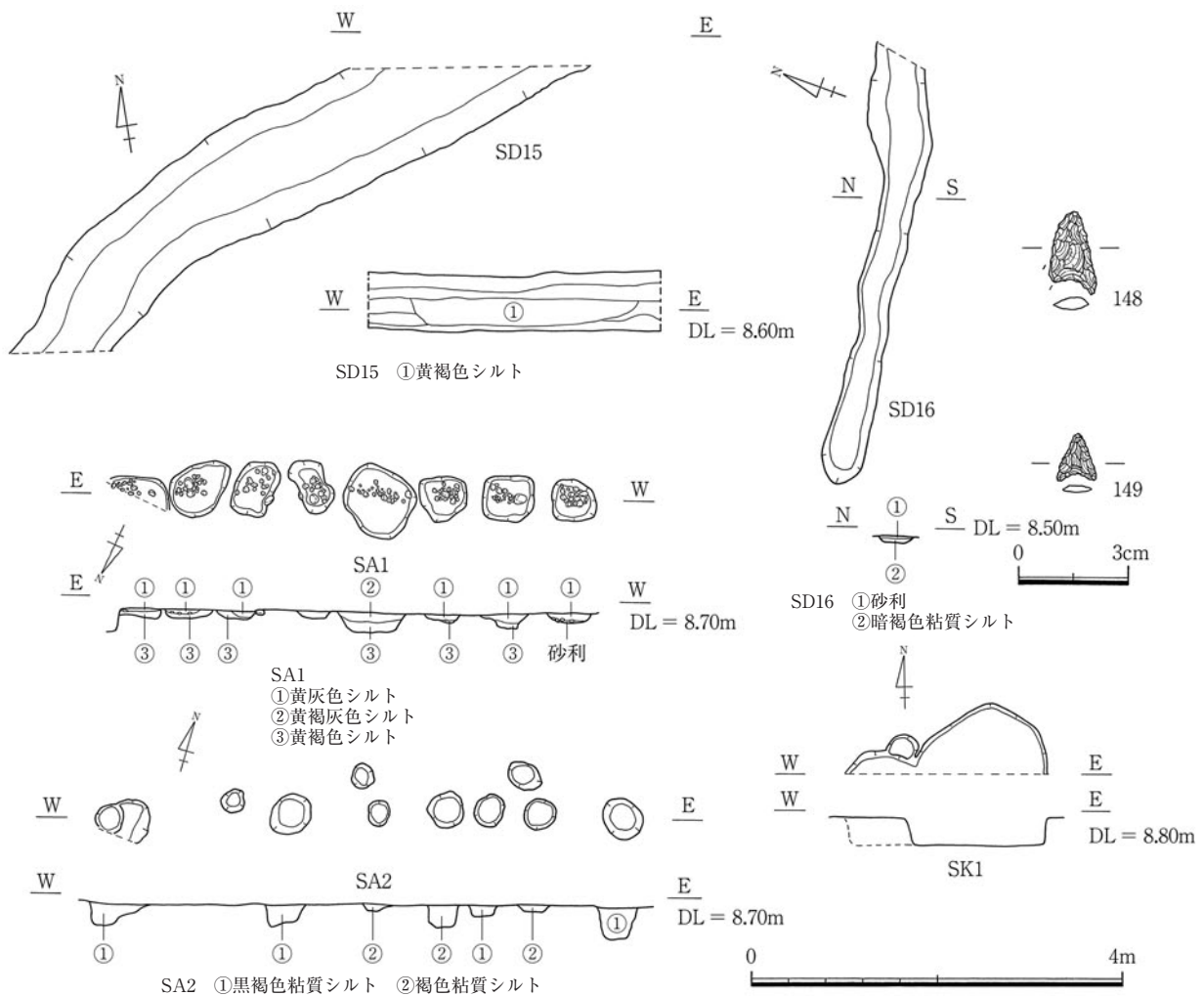


Fig.40 SD15・16・SA1・2・SK1 S=1/80 SD16(148)・SK1(149)出土遺物

S D 13

調査区西端部近くで検出されており、検出長は4.4m、幅0.7m、深さ29.5cm、断面形は皿状、主軸方向はN-63°-E、底面標高は8.385mである。埋土は3層に細分され、出土遺物は弥生土器細片3点、土師器片1点のみであった。

S D 14

調査区の西端部で検出されており、遺構確認に際して掘り下げたために消滅したが、北壁のセクションで確認した。断面形は箱形であり、埋土は3層に細分される。出土遺物は須恵器片1点のみであった。

S D 15

調査区東半部で検出されており、検出長は5.4m、幅0.9~1.2m、深さ30cm、断面形は皿状、主軸方向はN-74°-E、底面標高は8.420mである。埋土は黄褐色シルトの単一層であり、褐色シルトが混入している。出土遺物は土師器片1点のみであった。

S D 16

調査区の東端部で検出されており、検出長は4.8m、幅0.8m、深さ5.5cm、断面形は皿状、主軸方向はN-84°-E、底面標高は8.345mである。埋土は暗褐色粘性シルトの単一層であり、床面に小石が敷かれたような状態で確認されている。出土遺物は、弥生土器細片4点と少ないが、サヌカイト製の打製石鏃(148)1点が出土しており、図示した。

S A 1

SD9を約18cm掘り下げると、ほぼ床面近くに一直線状に並ぶ8個のピットが検出されており、柵列と考えられた。柵列方向はN-60°-Eであり、柱穴は、隅丸方形、楕円形、不正形と一様ではないが、すべての柱穴の底部には比較的小さな円礫が敷かれていた。規模は0.4~0.7m、深さは約20cm、柱間距離は10~20cmと非常に短い。埋土はほぼ1層であるが、底部ではSD9埋土との差はほとんどみられなかった。

S A 2

SD2とSD1の間に、北東から南西方向にかけて10個のピットを検出しており、柵列と考えられた。柵列方向はN-60°-E、検出面の標高は8.57m前後である。柱穴は直径20~42cmの円形であり、深さは10~35cm、柱間距離は0.2~1.3mと不揃いである。埋土は黒褐色粘性シルトの単一層である。

S K 1

調査区の東端部、南壁にかかり検出されており、半分以上は調査区外である。検出部分からみれば、楕円形と考えられ、長軸1.54m、短軸の検出長は0.77m、深さは31cmである。断面形は箱形でピットと切り合っており、埋土は黒褐色粘性シルトの単一層である。出土遺物は、弥生土器底部1点、細片24点であり、サヌカイト製の打製石鏃(149)が1点出土しており、図示した。

(3) 遺物包含層等の出土遺物

遺物包含層の遺物はすべてB①区からの出土であり、B②区の遺物はなかった。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器を中心に緑釉陶器や青磁等もみられる。また石器も石鏃が出土している。

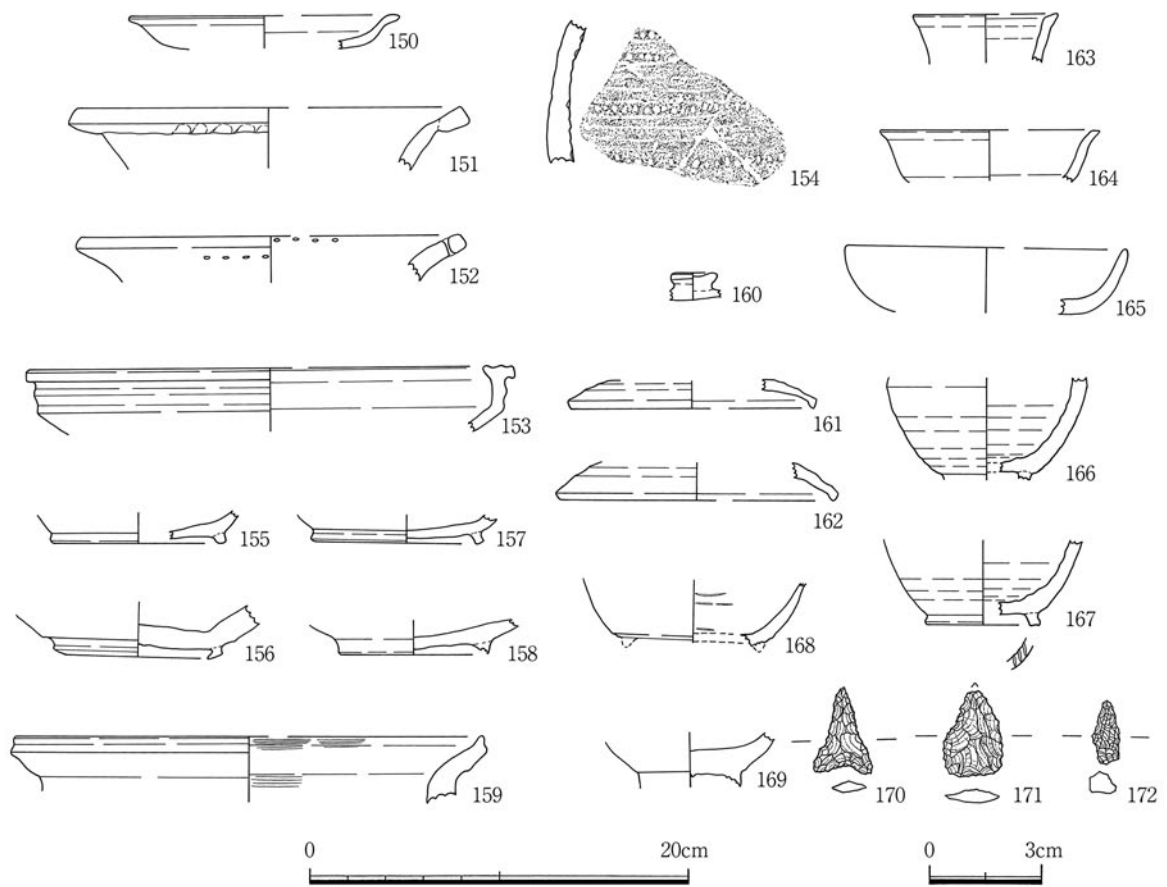


Fig.41 P10(150)・遺物包含層(151~172)出土遺物

150は土師器皿の口縁部でありピットより出土している。弥生土器としては151の貼付口縁、152の口縁端に小さな刺突孔を持つ口縁部、153は高杯の杯部であり、口縁部上端を水平に拡張し、凹線文が施される。154は胴部片であり、櫛描直線文の間に小さな刺突を施す。155から158は須恵器の杯及び壺の高台底部であり、159は土師器であり、甕の口縁部である。161・162は須恵器の蓋であり、160は扁平なつまみ部である。163～167も須恵器であり、163は長頸壺の口縁、164・165は小形の椀と杯の口縁、166・167は高台を持つ壺下胴部である。168は緑釉であり、169は青磁である。170・171はサヌカイト製の石鏃であり、172はチャート製の小形石錐で弥生時代前期の所産とみられる。

V. まとめ

1. A区

(1) 遺構について

今回の調査は、水路工事に伴うものであるために狭長なトレンチ状の調査区であり、特にA区は家屋の跡地が含まれていたために、遺構としては断片的な検出状況であった。A区の遺構検出状況ではA②区、A③区において上面検出遺構と下面検出遺構が確認されている。上面検出遺構は古代の遺構面として捉えられ、およそ8～9世紀を中心とする柱穴、土坑、溝が遺構の大半を占めている。方形の柱穴に関しては、A②区のみ集中しているが、調査区の南側トレンチ断面にP46～P48が検出されており、調査区を南側に拡張すれば検出された柱穴に対応する柱穴が想定され、掘立柱建物跡が存在するものと考えられる。但しP25とP46が対になる柱穴と考えれば、P47、P48に対応する柱穴も調査区内に存在していたが、攪乱や土坑ですでに壊されている可能性もある。いずれにしても、古代の方形柱穴に関しては、調査区が南北に狭いこともあり、掘立柱建物跡として確認することはできなかった。土坑、溝に関しては、出土遺物及び埋土等から古代の遺構と判断されたが、その性格については不明である。なお、上面における古代と考えられる遺構数は、A②区では柱穴35個、土坑3基、溝跡1条、A③区では柱穴23個、溝跡1条が検出されており、全体では柱穴58個、土坑3基、溝跡2条である。

弥生時代の遺構としては、A①区、A②区とA③区の下面検出遺構が該当する。時期的にはいずれも弥生時代中期の遺構と判断され、竪穴住居跡6棟、土坑12基、柱穴81個、溝跡6条、自然流路1条等が検出されている。竪穴住居跡に関しては、狭長な調査区であり、さらに家屋による攪乱等により住居跡全体が確認されたものはなく、すべて部分的な検出であった。形態的には円形住居跡が5棟であり、残り1棟は小型方形の住居跡である。竪穴住居跡からの出土遺物はあまり多くなく、時期決定に関しては十分とは言えないが、出土遺物からみて概ね中期中葉を中心とする時期と考えられる。土坑に関しては円形及び方形のものがみられるが、やはり出土遺物が少なく、形態や断面形から土坑の性格を判断できない。時期的には竪穴住居跡と切り合い関係もあるが、ほぼ同時期と考えることができる。溝跡に関しては、A①区の3条の溝跡が目される。3条の溝は北東から南西方向とほぼ同方向であり、空港拡張本体部分の調査で検出されている溝の延長部分と考えられる。この中でSD2からは数個体の壺が集中出土しており、一括廃棄されたものと考えられる。これらの壺からみて、溝の時期もやはり中期中葉であり、住居跡や土坑と同時期である。SR1も溝跡と同様に空港本体の調査区であるD1区に続く自然流路であり、堆積状況に関しては、遺構と遺物の項でも述べたように弥生時代中期を境にそれ以前と以後に分かれている。下層部は中期以前に流路の氾濫等による堆積であり遺物を含まないが、上層部は一度安定し土器等の堆積後、再び氾濫等により堆積したと思われる。なお、各調査区の遺構数は、A①区では溝跡3条、柱穴6個、A②区では竪穴住居跡2棟、土坑10基、溝跡4条、自然流路1条、柱穴97個、性格不明遺構1基、A③区では竪穴住居跡4棟、土坑5基、柱穴36個であった。

(2) 遺物について

出土した遺物は、弥生土器口縁部732点、底部262点、土器片8499点、須恵器口縁部36点、須恵器底部11点、須恵器片157点、土師器口縁部16点、土師器底部2点、土師器片41点、陶器口縁部3点、陶器底部1点、陶器片11点、瓦片3点である。石器は38点が出土しており、打製石斧1点、太型蛤刃石斧2点、磨製石斧2点、扁平片刃石斧1点、磨製石包丁7点、叩石6点を図示した。出土遺物としては弥生土器が中心であり、器形と時期により分類した。壺は中期前葉～後期前葉までのものが出土したが、その内訳はⅡ様式21.7%、Ⅲ様式63%、Ⅳ様式8.7%、Ⅴ様式6.5%であり、流路等の遺物もあることから時期幅を持つが、中期中葉の壺が多く出土したことになる。甕は中期中葉～末葉であり、その内訳はⅢ様式25%、Ⅳ様式75%と中期後半が中心となる。高杯は少なく、Ⅳ様式とみられる杯部口縁1点のみ実測することができた。鉢も少なく2点のみの実測であったが、時期的にはⅣ様式の中期後半に属すると考えられる。以上が出土土器の時期であるがやはり中期中葉から後半にかけてを中心としており、空港本体調査の中期遺構群の広がり的一端を確認することができた。

2. B区

(1) 遺構について

今回の調査区は田村遺跡群の北西端部に位置し、A区同様に水路工事に伴う狭長な調査区であった。遺構が検出されたのはB①区のみであり、竪穴住居跡1棟、土坑1基、柵列2列、溝跡16条、ピット15個が確認されている。これらの遺構の中でST1、SK1、SD11・16は出土遺物や埋土等から弥生時代の遺構と考えられるが、それ以外の溝跡と柵列は出土遺物から古代の遺構と判断される。弥生集落の範囲からみれば、B区は北西の縁辺部にあたり、遺構の密度も稀薄になっている。古代の溝及び柵列は東北から南西へのほぼ同じ軸方向を持っており、条里地割りを残すと考えられる現在の地割り方向との違いはあるが、空港本体の北西端の調査区であるN3区で部分的に確認された連続する古代の溝群の延長と考えられ、重複するものが多いが時期的に大きな差はないものとみられる。また、性格は不明であるが、柵列の中でSA1の柱穴底部には小礫または砂利が検出されており、特徴的である。古代の遺構群の範囲は、空港本体調査区であるI4区や今回のA区及びB区の調査結果からすれば、A区の北部を中心として広がっているようであり、弥生集落の北への広がりとも重複するものと考えられる。

(2) 遺物について

弥生土器、須恵器、土師器、緑釉陶器、青磁等が出土しているが、出土量としては少量であった。その中では弥生土器が大半を占めるが、細片が多くほとんど図示することができなかった。時期的にはやはり中期が中心であると考えられる。石器では包含層も含めサヌカイト製の石鏃4点とチャート製の小型石錐1点、磨製石斧1点、叩石4点が出土している。古代の遺物では包含層から緑釉陶器1点が出土しており、9世紀代の京都系の緑釉とみられ、他の須恵器、土師器も含め9世紀を中心とする遺構群であると考えられる。

A区土器観察表 1

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量(cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
13	1	A①区 SD1	弥生土器 壺	15.6	2.4	-	-	口縁端部を下方に拡張し、刻目状のヘラ沈線を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
13	2	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	31.0	4.6	-	-	貼付口縁で、口縁端部に刻目と1条の沈線、外面にも刻目を施す。頸部にもヘラによる連続沈線を施す。	1~2mm大の砂粒を含む黒褐色胎土。	黒色	黒色	薄手土器
13	3	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	18.8	3.4	-	-	緩やかに外反する頸部。貼付口縁で外面に指頭圧痕。口縁端部に刻目と1条の沈線を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	暗黄橙色	
13	4	A①区 SD1~3 南TR	長頸壺	16.4	7.0	-	-	緩やかに外反する頸部。貼付口縁で外面に指頭圧痕。口縁部内面に綾杉文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
13	5	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	16.2	6.1	-	-	緩やかに外反する頸部。貼付口縁で内面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、石英、長石、チャートを含む。	橙色	橙色	
13	6	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 底部	-	3.4	-	6.0	平底内面に指頭圧痕。	細砂粒を含む。	黒色	明黄橙色	
13	7	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 底部	-	3.3	-	5.2	平底内面に指頭圧痕。	2~3mm大の砂粒を含む。	灰白色	灰白色	
13	8	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 底部	-	5.6	-	5.6	平底、外面は刷毛調整で内面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	暗黄橙色	
13	9	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	-	6.1	-	-	上胴部に櫛描き直線文と波状文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	橙色	
13	10	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	-	4.7	-	-	上胴部に櫛描き簾状文、直線文、波状文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	橙色	
13	11	A①区 SD1~3 南TR	弥生土器 壺	-	9.4	-	-	上胴部に櫛描き直線文と波状文を交互に施し、その間に簾状文を施す。	1mm大の砂粒を含む。	灰白色	橙色	
13	12	A①区 SD2	弥生土器 壺	14.6	25.7	15.9	6.0	直線的に立上がる長い頸部から口縁部は強く外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕。頸部から上胴部に3条の微隆起体を貼付し、列点文を施す。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	灰白色	ほぼ完形
13	13	A①区 SD2	弥生土器 壺	14.0	23.0	18.8	-	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕。上胴部に櫛書き直線紋と波状文を施す。	0.5~1mm大の砂粒を含む。	黒色	淡橙色	
13	14	A①区 SD2	弥生土器 壺	14.5	25.0	16.5	-	短い頸部から口縁部は外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕。頸部に2条の突帯を貼付し、端部で閉じる。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	にぶい黄橙色	
13	15	A①区 SD2	弥生土器 壺	14.0	16.4	-	-	直立する頸部から口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕。端部にヘラによる斜め刻目を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	黒色	橙色	

A区土器観察表 2

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
13	16	A①区 SD2	弥生土器 壺	18.8	6.8	-	-	緩やかに外反する貼付口縁。口縁下端部と内面にヘラによる刻目を施す。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	灰黄色	
13	17	A①区 SD2	弥生土器 壺	12.2	11.0	-	-	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕。上胴部に1条の貼付突帯を施す。	細砂粒を多く含む。	橙色	橙色	
14	18	A①区 SD2	弥生土器 壺	8.6	21.3	13.4	5.2	頸部から口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕で無文。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	ほぼ完形
14	19	A①区 SD2	弥生土器 壺	8.3	22.7	15.0	5.0	頸部から口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕で無文。外面ハケ調整。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	暗橙色	橙色	ほぼ完形
14	20	A①区 SD2	弥生土器 壺	9.2	18.7	13.5	-	頸部から口縁部は緩やかに外反する。貼付口縁外面に指頭圧痕で無文。外面ハケ調整、内面下胴部に指ナデ。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	灰色	にぶい橙色	
14	21	A①区 SD2	弥生土器 長頸壺	13.8	7.5	-	-	緩やかに外反する貼付口縁で外面に指頭圧痕。頸部にハケ調整。	1~2mm大の砂粒を含む。	褐灰色	にぶい橙色	
14	22	A①区 SD2	弥生土器 壺	13.4	17.2	-	-	緩やかに外反する貼付口縁で外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	橙色	
14	23	A①区 SD2	弥生土器 壺	-	22.5	-	-	強く張る胴部。内面に指頭圧痕。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	黄褐色	
14	24	A①区 SD2	弥生土器 壺	16.0	6.7	-	-	直立気味の貼付口縁に弱い指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	橙色	
14	25	A①区 SD2	弥生土器 壺	21.2	4.4	-	-	強く外反する貼付口縁の端部に刻目と2条の微隆起帯貼付。頸部には10条前後の縦の連続沈線。	1~2mm大の砂粒を含む。	褐灰色	褐灰色	薄手土器
14	26	A①区 SD2	弥生土器 壺	24.8	12.2	-	-	強く外反する貼付口縁の外面に刻目と2条の微隆起帯貼付。頸部に7条の縦の連続沈線を3組施し、その間に単線押圧。その下に小円形浮文と2条の微粒起帯を貼付。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	薄手土器
14	27	A①区 SD2	弥生土器 甕	23.0	7.5	-	-	緩やかに外反する口縁部で口縁下端に刻目を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	灰白色	
14	28	A①区 SD2	弥生土器 壺	14.4	4.3	-	-	直立気味の頸部から口縁部は強く開く。貼付口縁で外面に指頭圧痕。頸部に3条の櫛書き波状文、その下に6条の直線文を施す。	1mm程度の砂粒を含む。	暗黄橙色	橙色	
14	29	A①区 SD2	弥生土器 細頸壺	7.6	4.8	-	-	口縁部はほぼ垂直に立上り、口唇部は面をなす。外面はハケ調整。	1mm程度の砂粒を含む。	橙色	橙色	

A区土器観察表 3

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
15	30	A①区 SD3	弥生土器 底部	-	4.0	-	8.4	平底で外面に指頭 圧痕。	2~3mm大の 小礫を含む。	暗黄橙色	灰白色	
15	31	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	5.2	-	5.9	やや上底で内外面 に指頭圧痕。	1~2mm大の 砂粒、チャート を含む。	褐灰色	橙色	
15	32	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	5.6	-	5.8	平底で外面はへら 磨きと指頭圧痕。 内面に指頭圧痕。	1~2mm大の 砂粒を含む。	褐灰色	橙色	
15	33	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	5.0	-	5.6	平底。	1mm程度の 砂粒を含む。	褐灰色	褐灰色	薄手土器
15	34	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	7.0	-	7.4	平底で内外面に指 頭圧痕。	1~2mm大の 砂粒を含む。	褐灰色	橙色	
15	35	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	9.2	-	7.2	平底で内面に指頭 圧痕。	0.5~1mm大 の砂粒を含む。	黒褐色	淡橙色	
15	36	A①区 SD2	弥生土器 底部	-	10.7	-	6.2	やや上底で内外面 に指頭圧痕。	1~2mmの砂粒、 チャートを含む。	黒褐色	淡黄橙色	
16	40	A②区上面 P17	土師器 杯	12.2	2.4	-	-	内湾する口縁部で 端部は若干外反する。 口縁部内外面に横 ナデ。	1mm程度の 砂粒、チャート を含む。	橙色	橙色	
16	41	A②区上面 P24	須恵器 杯	-	1.3	-	9.5	断面台形の高台付 き底部。内外面ナデ。	精選された胎土。	黄灰色	暗黄橙色	
16	42	A②区上面 P41	須恵器 壺	-	4.5	-	-	肩部に断面三角形 の突帯貼付。一部 に爪形の刺突圧痕。	精選された胎土。	灰色	灰色	
17	43	A②区上面 P35	須恵器 壺	-	2.1	-	8.0	外傾する高台付き 底部。内外面ナデ。	1mm程度の砂 粒を含む。	灰白色	灰白色	
18	44	A②区上面 SK1	須恵器 杯	14.0	2.4	-	-	直線的に開く体部 から口縁部は僅かに 外反。	精選された胎土。	灰色	灰色	
18	45	A②区上面 SK1	弥生土器 底部	-	2.5	-	4.8	上底で内面に指頭 圧痕。	1~2mm大の 砂粒を含む。	黒色	橙色	
18	46	A②区上面 SK1	弥生土器 底部	-	4.8	-	5.1	平底で外面に指頭 圧痕。	1~2mm大の 砂粒を含む。	黄灰色	暗黄橙色	
18	47	A②区上面 SK1	弥生土器 底部	-	4.0	-	6.6	やや上底で内外面 に指頭圧痕。	1~3mm大の 砂粒を含む。	灰黄褐色	浅黄橙色	
19	49	A②区上面 SD4	須恵器 底部	-	5.5	-	15.2	平底で内面に指頭 圧痕。	1mm程度の砂 粒を含む。	灰白色	灰色	
20	50	A②区下面 ST1	弥生土器 甕	15.8	10.2	-	-	緩やかに外反する 貼付口縁。外面に 指頭圧痕。頸部に 楕円形浮文貼付。 外面はハケ調整、 内面は頸部ハケ調 整に指頭圧痕。内 面頸部に黒色ター ル付着。	等粒状で均質。	暗褐色	暗橙色	内面頸部に 黒色タール 付着。
20	51	A②区下面 ST1	弥生土器 壺	16.8	8.2	-	-	強く外反する貼付 口縁。口唇部下端 に刻目。口縁外面 と頸部に2条の微 隆起帯貼付。その 下に楕円形浮文貼 付。内面に指頭圧痕。	1~2mm大の 砂粒、長石を 含む黒褐色の 胎土。	浅黄色	黄灰色	薄手土器
20	52	A②区下面 ST1	弥生土器 壺	-	24.6	27.2	8.4	平底で胴部は球形。 内外面に指頭圧痕。	0.5~2mm大 の砂粒を含む。	灰色	明橙色	
20	53	A②区下面 ST1	弥生土器 壺	-	14.6	16.8	5.6	平底で外面はハケ 調整。内面は指頭 圧痕。	1~2mm大の 砂粒を含む。	暗橙色	暗褐色	

A区土器観察表 4

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
20	54	A②区下面 STI	弥生土器 底部	-	6.3	-	7.4	平底で緩やかに開く。外面はヘラ磨きにハケ調整。内面は指頭圧痕にナデ調整。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	明赤褐色	
21	56	A②区下面 ST2 中央ピット	弥生土器 甕	19.6	4.4	-	-	緩やかに外反する口縁部で端部はナデにより面をなす。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	黄橙色	
22	57	A②区下面 SK4	弥生土器 底部	-	3.3	-	7.6	上げ底気味の平底で外面にハケ調整。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
22	58	A②区下面 SK4	高杯	46.0	10.0	-	-	口縁は垂直に立ち上がり、端部外面に4条の凹線文を施しそこから右あがりの圧痕文をほぼ等間隔に付ける。内外面共に横ナデ。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗橙色	暗黄橙色	大型高杯の杯部
24	61	A②区下面 SD5	弥生土器 甕	14.6	4.0	-	-	口縁部はくの字状に鋭く外反し、凹線文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰白色	浅黄橙色	
24	62	A②区下面 SD5	弥生土器 無頸壺	6.2	2.6	-	-	内傾する口縁部に5条の凹線文を施す。口唇部はナデにより面をなす。	1~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
24	63	A②区下面 SD5	弥生土器 底部	-	3.3	-	5.6	平底でややくびれを持つ。外面に指頭圧痕、内面は交差するヘラ削り。	1mm程度の砂粒を含む。	橙色	橙色	
24	64	A②区下面 SD5	手づくね 土器底部	-	2.8	-	3.0	平底の底部でややくびれを持ち立上がる。内外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒を含む。	灰黄褐色	明褐灰色	
24	65	A②区下面 SD5	弥生土器 底部	-	18.2	-	9.0	やや丸みを帯びた底部から緩やかに開く。外面は横方向のタタキ目にハケ調整。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	褐灰色	橙色	
24	67	A②区下面 SD7	弥生土器 壺	-	6.7	16.8	-	球形の上胴部に3条の微隆起帯と小楕円形の浮文を貼付。内面は指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	明黄褐色	
25	69	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	13.6	2.8	-	-	貼付口縁で外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	橙色	
25	70	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	17.0	2.7	-	-	口縁部は強く外反し、外面に微隆起帯を貼付。口唇部に刻目を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	褐灰色	褐灰色	薄手土器
25	71	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	12.8	5.9	-	-	直立する頸部から強く外反する貼付口縁。外面に指頭圧痕。口唇部に刻目を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗黄褐色	浅黄褐色	
25	72	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	17.0	8.4	-	-	口縁部は滑らかに外反する貼付口縁で口唇部は面をなす。	1~2mm大の砂粒を含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
25	73	A②区下面 SR1 I・II層	弥生土器 壺	18.6	4.1	-	-	口縁部は強く外反し、口縁端部を上下に拡張。口唇部に2条の凹線文を施す。内面には指頭圧痕。	0.5~1mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	橙色	
25	74	A②区下面 SR1 I・II層	弥生土器 壺	16.6	5.0	-	-	口縁部は強く外反し、口縁端部を上下に拡張。口唇部を横ナデし、外面はハケ調整。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗黄褐色	暗橙色	

A区土器観察表 5

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
25	75	A②区下面 SR1南TR	弥生土器 壺	23.2	1.9	-	-	口縁部は大きく外反し、口縁端部は上下に拡張。口唇部に4条の凹線文を施す。	1mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
25	76	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	19.0	6.3	-	-	大きく開く口縁部で、貼付口縁。口縁部上端に刻目を施す。頸部に1条の微隆起帯を貼付。外面はハケ調整。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	橙色	
25	77	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	18.2	7.6	-	-	くの字状に外反する口縁部で外面に指頭圧痕。口唇部は面をなし斜格子文、上胴部に櫛描き簾状文と波状文を施す。口縁部内面はハケ調整、体部は指頭圧痕。	1mm大の砂粒を含む。	暗黄橙色	暗黄橙色	
25	78	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	20.8	4.5	-	-	強く外反する口縁部でやや拡張する。上下端部と口唇部に刻目、口唇部に1条の沈線を施す。	0.5~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	暗橙色	
25	79	A②区下面 SR1	弥生土器 壺	15.2	2.7	-	-	大きく外反する口縁部で、内外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗黄橙色	暗黄橙色	
25	80	A②区下面 SR1	弥生土器 細頸壺	8.8	4.9	-	-	直立する口縁部で口唇部は丸く納める。頸部には7条以上の凹線文を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	暗橙色	
25	81	A②区下面 SR1 I・II層	弥生土器 壺	-	8.4	-	-	頸部に櫛描き直線文とその間に列点文を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗黄橙色	暗黄橙色	
25	82	A②区下面 SR1	弥生土器 甕	18.8	7.7	19.2	-	直立する胴部から口縁部は小さく外反する。口唇部はナデにより面をなす。内外面に指頭圧痕。	1~3mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	暗橙色	
25	83	A②区下面 SR1	弥生土器 甕	17.8	2.9	-	-	口縁部は鋭く外反し、口縁部上下端に刻目を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	
25	84	A②区下面 SR1南TR	弥生土器 甕	18.4	3.8	-	-	口縁部は緩やかに開き、口唇部に刻目を施す。	1mm程度の砂粒を含む。	暗橙色	橙色	
26	85	A②区下面 SR1	弥生土器 底部	-	4.1	-	9.8	やや上底気味の平底。外面はハケ調整とヘラ磨き、内面には指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	明黄褐色	明黄褐色	
26	86	A②区下面 SR1 I・II層	弥生土器 底部	-	5.6	-	8.6	平底で外面にハケ調整と指頭圧痕。	チャートと1~2mm大の砂粒を含む。	暗黄褐色	暗黄褐色	
26	87	A②区下面 SR1	弥生土器 底部	-	3.5	-	9.4	平底で内外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
26	88	A②区下面 SR1	弥生土器 底部	-	3.9	-	10.1	平底で内外面に指頭圧痕。	1mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
26	89	A②区下面 SR1 I層	弥生土器 底部	-	8.0	-	7.4	平底で外面にハケ調整と内面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	灰褐色	浅黄褐色	
26	90	A②区下面 SR1南TR	弥生土器 底部	-	14.6	-	11.4	やや上底気味の底部から胴部で、外面にハケ調整とヘラ磨き施す。内面には指頭圧痕。	0.5~2mm大の砂粒、チャートを含む。	灰色	暗橙色	

A区土器観察表 6

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
26	91	A②区下面 SR1南TR	弥生土器 壺底部	-	6.0	-	10.8	大きく開いており、大型壺の底部。	2~5mm大の砂粒、チャートを含む。	浅黄橙色	橙色	大型壺
26	92	A②区下面 SR1 I・II層	須恵器 杯	8.2	2.7	-	-	口縁部は直線的に立上り、端部は丸味を帯びる。内外面に横ナデ。	精選された胎土。	灰色	灰色	
26	93	A②区下面 SR1南TR	須恵器 碗	-	2.0	-	6.4	断面台形の貼付高台。	精選された胎土。	灰褐色	橙色	
26	94	A②区下面 SR1 I・II層	須恵器 甕	20.4	7.0	-	-	口縁部はくの字状に外反し、口唇部を横ナデ。外面に斜めのタタキ目を施す。	精選された胎土。	灰色	灰色	
27	98	A②区下面 P13	弥生土器 底部	-	5.0	-	7.5	平底の底部で外面にへら磨きと指頭圧痕。内面にハケ調整を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	灰白色	暗橙色	
27	99	A②区下面 P57	弥生土器 底部	-	12.3	16.4	6.0	やや厚めの平底から球形の胴部を持つ。外面にハケ調整。	1~3mm大の砂粒、チャート、長石を含む。	褐灰色	暗赤褐色	
30	100	A③区下面 ST3	弥生土器 壺	21.0	3.0	-	-	貼付口縁に外面指頭圧痕。口唇部は横ナデ。	1~3mm大の砂粒を含む。	褐灰色	橙色	
30	101	A③区下面 ST3	弥生土器 甕	18.2	3.8	-	-	口縁部はくの字状に鋭く屈曲し、上方に拡張。口唇部には1条の浅い凹線文を施す。内面に指頭圧痕。	1mm大の砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
30	102	A③区下面 ST3	弥生土器 底部	-	3.9	-	7.3	やや上底気味の平底。内外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒を含む。	褐灰色	浅黄橙色	
30	103	A③区下面 ST3	弥生土器 底部	-	4.5	-	7.8	平底である。	1~4mm大の砂粒を含む。	褐灰色	暗橙色	
30	104	A③区下面 ST3	弥生土器 壺	-	4.2	-	-	櫛描き沈線の間に刻目突帯を貼付し、その上に2条櫛描き山形文を施す。	1~4mm大の砂粒を含む。	浅黄橙色	暗黄橙色	
30	107	A③区下面 SK9	弥生土器 底部	-	8.8	-	8.2	平底であり、外面は縦のへら磨きを施し、内面には指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	浅黄橙色	橙色	
32	108	A③区下面 SK8	弥生土器 底部	-	4.7	-	5.0	やや上底気味の平底。外面はタタキ目をナデ消し。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	灰白色	灰黄色	
33	109	A②区下面 遺構検出面	弥生土器 壺	20.0	3.9	-	-	口縁部は強く外反し、口唇部は横ナデにより面をなす。内外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	灰黄橙色	
33	110	A②区 IV層	弥生土器 壺	18.0	8.4	-	-	口縁部は大きく外反し、口唇部は横ナデにより凹線状をなす。内外面はハケ調整とナデ。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
33	111	A②区 III・IV層	弥生土器 甕	21.8	7.5	-	-	口縁部はくの字状に屈曲し、端部を上方に拡張する。口唇部は横ナデにより面をなす。	1mm程度の砂粒、チャートを含む。	橙色	橙色	
33	112	A②区 III・IV層	弥生土器 甕	15.9	4.5	-	-	口縁部はくの字に屈曲し、端部を上方に拡張する。口唇部に2条の凹線文を施す。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗黄橙色	明赤褐色	

A区土器観察表 7

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴 (形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
33	113	A②区 包含層	弥生土器 甕	18.0	5.7	-	-	口縁部はくの字状に屈曲し、口唇部は横ナデにより、やや拡張。	0.5mm程度の砂粒を含む。	橙色	暗黄橙色	
33	114	A②区 Ⅲ層	弥生土器 壺	16.4	7.5	-	-	貼付口縁で外面に指頭圧痕。口縁部は緩やかに開き、口唇部は横ナデにより面をなす。	1~3mm大の砂粒、チャートを含む。	黒色	暗橙色	
33	115	A②区 V層	弥生土器 鉢	19.6	3.9	-	-	直線的に立上り、口縁端部を横ナデにより拡張。口唇部は横ナデに波状文、外面に3条の凹線文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
33	116	A②区 Ⅳ層	弥生土器 壺	-	6.4	-	-	外面に簡描き直線文と列点文を施す。	1~2mm大の砂粒を含む。	褐灰色	暗橙色	
33	117	A②区 V層	弥生土器 底部	-	3.2	-	6.3	上底気味の平底。外面に指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	橙色	
33	118	A②区 包含層 南TR	弥生土器 底部	-	3.7	-	5.1	上底気味の平底で厚い。外面はハケ調整。	1mm大の砂粒、チャートを含む。	橙色	暗橙色	
33	119	A②区 Ⅱ層	弥生土器 底部	-	4.6	-	4.4	緩やかに開く平底。外面はハケ調整と指頭圧痕。	1~2mm大の砂粒、チャートを含む。	暗橙色	黒色	
33	120	表採	高杯	22.8	5.4	-	-	口縁部は直立し、内外面横ナデにより口唇部は面をなす。	1~3mm大の砂粒、チャートを含む。	暗黄橙色	橙色	
33	121	A②区 包含層	須恵器 底部	-	3.6	-	12.6	直立する断面台形の高台付き底部。	1mm程度の砂粒を含む。	灰色	灰色	

A区石器観察表

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	計 測 値				石 質	調整・特徴	備 考
				全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)			
15	37	A①区 SD2	大型蛤刃石斧	13.1	7.8	6.3	967.7	緑色片岩	刃縁摩耗、基部欠損。	
15	38	A①区 SD2	扁平片刃石斧	9.6	5.4	1.9	126.7	頁岩	一部を残し刃部欠損。	
15	39	A①区 SD2	打製石斧	15.6	4.8	3.3	267.3	粘板岩	刃部摩耗。	
18	48	A②区上面 SK1	叩石	9.7	9.1	3.4	451.2	砂岩	円形で中央部に敲打痕。	
20	55	A②区下面 ST1	磨製石包丁	7.9	4.4	0.8	31.1	頁岩	1/2欠損。1孔と思われる。	
22	59	A②区下面 SK4	扁平片刃石斧	5.8	3.8	1.0	40.6	頁岩	刃部一部欠損。	
22	60	A②区下面 SK4	大型蛤刃石斧	12.9	5.8	2.1	305.0	緑色岩	刃部破損。全体に扁平で部分的に磨面有り。	
24	66	A②区下面 SD5	叩石	12.6	7.6	3.7	537.0	砂岩	楕円形で一端に強い敲打痕有り。	
24	68	A②区下面 SD6	石包丁未製品	10.7	5.9	1.7	120.6	粘板岩	縁辺部を剥離により整形。一部欠損。	
26	95	A②区下面 SR1	磨製石包丁	7.1	4.9	0.7	29.1	頁岩	1/2欠損。1孔と思われる。	
26	96	A②区下面 SR1	叩石	10.4	8.4	3.1	415.1	砂岩	楕円形で中央部と端部に敲打痕有り。	
26	97	A②区下面 SR1	叩石	12.6	5.1	2.3	209.0	砂岩	棒状で平坦部と端部に敲打痕有り。	
30	105	A③区下面 ST3	扁平片刃石斧	4.4	4.8	0.9	38.1	頁岩	刃部欠損、基部のみを残す。	
30	106	A③区下面 ST3	磨製石斧	2.7	6.5	1.5	36.5	頁岩	刃部の一部であり扁平石斧か。	
33	122	A②区 南TRVI層	磨製石包丁	10.1	4.4	1.1	74.5	頁岩	1孔の石包丁で一部欠損。被熱を受けている。	
33	123	A①区 表採	磨製石包丁	8.9	5.3	0.6	28.7	粘板岩	2孔であり、大きく欠損する。	
33	124	A②区 V層	磨製石包丁	3.8	3.7	0.7	11.8	頁岩	1孔と思われる欠損品。	
33	125	A②区 南TRV層	叩石	10.5	6.3	2.5	260.7	砂岩	長楕円形で平坦部と先端部に敲打痕有り。	
33	126	A②区 検出面	叩石	10.8	8.4	3.6	470.9	砂岩	楕円形で平坦部に敲打痕有り。	

B区土器観察表 1

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
35	127	B①区 ST1	弥生土器 底部	-	6.6	-	4.0	上底気味の底部から直線的に立上がる。	砂粒を多く含む。	黒褐色	褐色	
36	128	B①区 SD1	弥生土器 壺	13.6	2.1	-	-	緩やかに外反する貼付口縁。	砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
36	129	B①区 SD1	弥生土器 甕	13.8	7.5	-	-	緩やかに外反する薄い貼付口縁。口唇部に刻目。頸部に3条の櫛書き沈線と列点文を施す。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	浅黄褐色	浅黄褐色	
36	130	B①区 SD1	弥生土器 底部	-	3.8	-	17.2	大型の平底。	砂粒を含む。	淡黄色	淡黄色	大型壺
36	131	B①区 SD1	弥生土器 底部	-	2.2	-	4.4	突出する平底。	0.5~3mm大の砂粒を含む。	淡黄色	淡黄色	
36	132	B①区 SD1	土製支脚	全長 7.2	全高 6.4	全厚 1.8	-	指頭圧痕を多く残す。	砂粒を含む。	白灰色	白灰色	
36	133	B①区 SD1	須恵器 甕	20.4	3.8	-	-	口縁部は緩やかに外反し、端部は面をなす。内面横ナデ。	1mm程度の砂粒を含む。	灰白色	灰白色	
37	136	B①区 SD2	弥生土器 高杯脚	-	10.1	4.0	8.8	緩やかに外反して開く。内外面に指頭圧痕。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
37	137	B①区 SD4	弥生土器 底部	-	3.7	-	5.4	上底気味の底部。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	淡黄色	淡橙色	
38	138	B①区 SD7	弥生土器 甕	19.4	3.6	-	-	くの字状に屈曲する口縁部で口唇部は横ナデ。口縁外面にタタキ目痕。	細砂粒を含む。	橙色	橙色	
38	139	B①区 SD8	須恵器 皿	17.2	2.0	-	14.4	口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。	細砂粒を含む。	灰白色	灰白色	
39	141	B①区 SD10	弥生土器 底部	-	4.0	-	6.6	上底気味の底部。	0.5~3mm大の砂粒を含む。	橙色	暗橙色	
39	142	B①区 SD10	須恵器 底部	-	3.1	-	9.4	外傾する高台で端部は丸く納める。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
39	143	B①区 SD10	須恵器 甕	16.4	5.5	-	-	くの字状に屈曲する口縁部。外面にカキ目、内面に青海波文。	細砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
39	146	B①区 SD11	弥生土器 底部	-	3.6	-	5.0	平底。	砂粒を含む。	褐灰色	褐灰色	薄手土器
39	147	B①区 SD11	弥生土器 底部	-	3.9	-	8.0	平底から緩やかに開く。外面にヘラ磨き。	砂粒を含む。	灰赤色	暗赤褐色	
41	150	B①区 P10	土師器 皿	14.4	1.8	-	-	内湾する体部から口縁部は外反。口唇部はナデ。	精選された胎土。	橙色	橙色	
41	151	B①区 包含層	弥生土器 壺	20.3	3.3	-	-	緩やかに外反する貼付口縁部。外面に指頭圧痕。	0.5~2mm大の砂粒を多く含む。	淡黄色	淡黄色	
41	152	B①区 包含層	弥生土器 壺	20.2	2.5	-	-	強く外反する口縁部。端部に4個の穿孔。	0.5~4mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
41	153	B①区 包含層	弥生土器 高杯	23.0	3.4	-	-	直立する口縁部で端部を水平に拡張。口縁上端に太い2条の凹線文、外面にも凹線文施す。	0.5~2mm大の砂粒を含む。	橙色	橙色	
41	154	B①区 包含層	弥生土器 壺	-	7.6	-	-	櫛描直線文の間に小さな刺突。	砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
41	155	B①区 包含層	須恵器 底部	-	1.7	-	9.2	高台はハの字状を呈す。	砂粒を含む。	灰色	橙色	

B区土器観察表 2

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	法量 (cm)				特徴(形態・手法)	胎 土	色 調		備 考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
41	156	B①区 包含層	須恵器 底部	-	2.9	-	9.0	内傾する高台で端部は稜を持つ。	砂粒を含む。	灰白色	灰白色	
41	157	B①区 包含層	須恵器 底部	-	1.5	-	8.2	断面台形の外傾する高台を持つ。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	158	B①区 包含層	土師器 底部	-	1.8	-	8.0	平坦な底部に高台を持つ。	砂粒を含む。	暗橙色	暗橙色	
41	159	B①区 包含層	土師器 甕	25.0	3.5	22.0	-	強く外反する口縁部で端部は横ナデにより面をなす。内面にハケ目。	0.5~2mm大の砂粒を多く含む。	暗赤褐色	暗赤褐色	
41	160	B①区 包含層	須恵器 蓋	-	1.4	-	-	扁平なつまみ部。	砂粒を含む。	淡黄色	淡黄色	
41	161	B①区 包含層	須恵器 蓋	12.8	1.5	-	-	天井部からなだらかに下り、端部は下方に屈曲する。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	162	B①区 包含層	須恵器 蓋	14.4	2.0	-	-	天井部からなだらかに下り、端部は下方に屈曲する。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	163	B①区 包含層	須恵器 細首壺	7.6	2.6	-	-	直線的に開く口縁部。端部は内傾する面をなす。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	164	B①区 包含層	須恵器 杯	11.6	2.8	-	-	体部から口縁部へと緩やかに外反する。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	165	B①区 包含層	須恵器 杯	15.0	3.5	-	-	体部は内湾して立ち上がり、端部は丸く納める。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	166	B①区 包含層	須恵器 底部	-	5.5	-	-	ほぼ平らな底部に低い高台が付く。胴部は内湾気味に立上がる。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	167	B①区 包含層	須恵器 底部	-	4.5	-	6.0	ほぼ平らな底部にはハの字状の高台が付く。端部は面をなし、胴部は内湾気味に立上がる。	砂粒を含む。	灰色	灰色	
41	168	B①区 包含層	緑釉陶器 碗	-	3.6	-	7.6	体部は内湾気味に立ち上がり、高台を持つ。	精製された胎土。	薄緑色	薄緑色	
41	169	B①区 包含層	青磁 底部	-	2.8	-	5.6	かなり厚い底部。	精製された胎土。	灰オリーブ色	灰オリーブ色	

B区石器観察表

Fig. 番号	遺物 番号	出土地点 層 位	器 種	計 測 値				石 質	調整・特徴	備 考
				全長 (cm)	全幅 (cm)	全厚 (cm)	重量 (g)			
36	134	B①区 SD1	叩石	8.9	8.3	4.8	442.4	砂岩	円形で中央部に敲打痕有り。	
36	135	B①区 SD1	叩石	10.4	9.9	7.8	1003.3	砂岩	球形で中央部と縁辺部に敲打痕有り。	
38	140	B①区 SD9	磨製石斧	11.5	5.4	3.8	352.2	緑色岩	刃部、基部ともに欠損する。	
39	144	B①区 SD10	叩石	11.2	4.6	3.3	261.5	砂岩	棒状で上下端に敲打痕有り。	
39	145	B①区 SD10	叩石	13.2	4.7	3.0	280.7	砂岩	棒状で上下端に敲打痕有り。	
40	148	B①区 SD16	石鏃	2.2	1.3	0.4	0.8	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。一部欠損。	
40	149	B①区 SK1	石鏃	1.3	1.0	0.2	0.1	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。	
41	170	B①区 包含層	石鏃	2.3	1.5	0.3	0.5	サヌカイト	凹基式の打製石鏃。	
41	171	B①区 包含層	石鏃	2.3	1.6	0.4	1.2	サヌカイト	平基式の打製石鏃。	
41	172	B②区 表採	石錐	1.7	0.7	0.6	0.7	チャート	小形石錐であり、弥生前期に見られる。	

引用・参考文献

『南国市史』南国市教育委員会 1983年

『高知県の考古学』岡本健児 1966年

『高知県史考古編』岡本健児 1998年

『高知県中世城館跡』高知県教育委員会 1984年

『弥生土器の様式と編年・四国編』管原康夫・梅木謙一編 木耳社 2000年3月

『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、田村遺跡群』高知県教育委員会 1986年

写真図版



田村遺跡群周辺航空写真（1992年）

PL.2



田村遺跡群航空写真（1996年）



A区 調査前状況（南東より）



A①区 調査区完掘状況（西より）



A②区 上面検出遺構完掘状況（南東より）



A②区 下面検出遺構完掘状況（西より）



A③区 下面検出遺構完掘状況（西より）



A②区下面 ST1完掘状況（南より）

PL.6



A②区下面 ST1 遺物出土状況（西より）



A②区下面 ST1 石包丁出土状況（南西より）



A②区下面 ST 1 叩石出土状況（南西より）



A②区下面 ST 2 貼床状床面完掘状況（南より）



A②区下面 ST 2 完掘状況 (北より)



A③区下面 ST 3 床面検出状況 (南より)



A③区下面 ST 5 完掘状況（北より）



A③区下面 ST 6, SK 9・13~15, P 85・86完掘状況（北より）



A②区上面 SK 1 完掘状況（北より）



A②区上面 SK 1 叩石出土状況（北より）



A②区下面 SK 4 完掘状況（北より）



A②区下面 SK 4 扁平片刃石斧出土状況（北より）



A②区上面 SK 5 完掘状況 (南東より)



A②区上面 SK 6 完掘状況 (南より)



A①区 SD2 遺物出土状況（北東より）



A①区 SD2 遺物出土状況壺（東より）



A①区 SD2 遺物出土状況壺（東より）



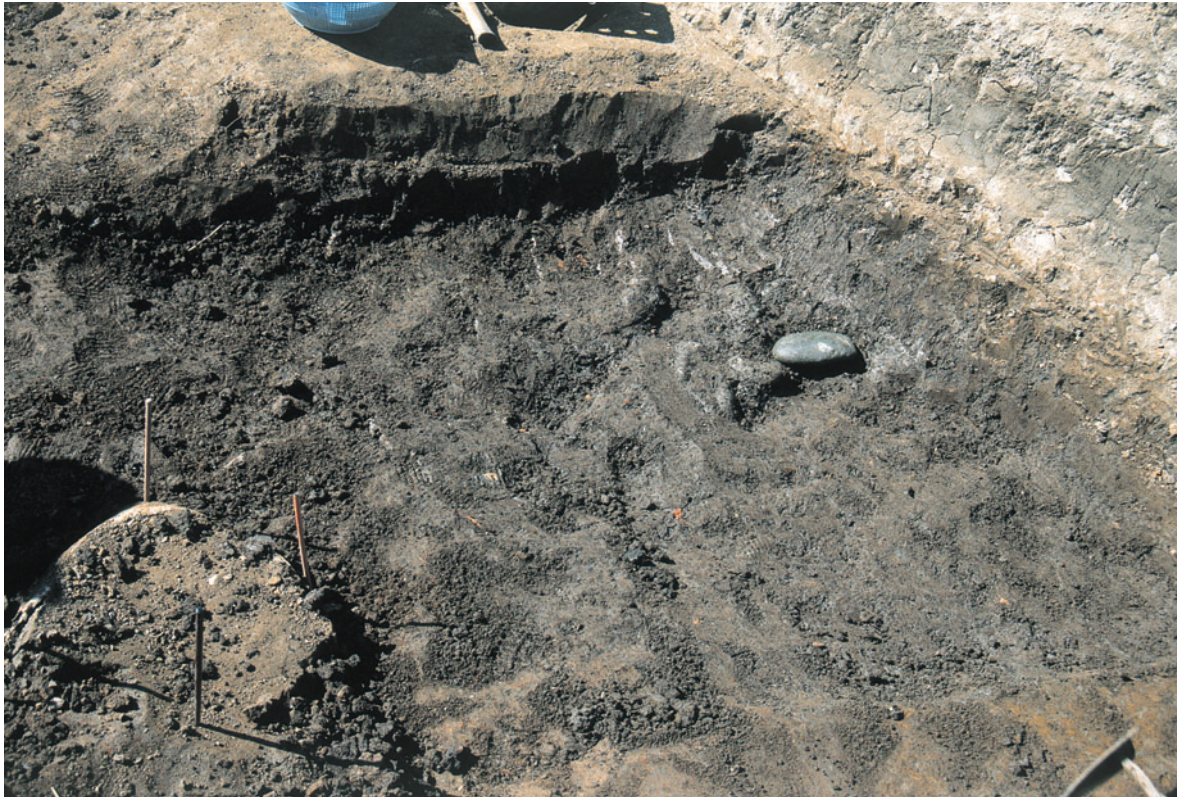
A①区 SD2 完掘状況（北東より）



A②区下面 SD5 完掘状況（南より）



A②区下面 SD5 壺出土状況（西より）



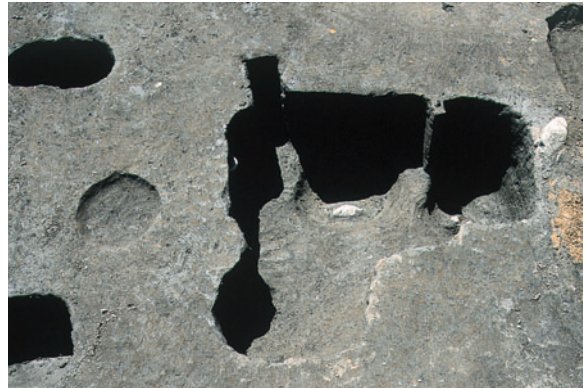
A②区下面 SD 5 叩石出土状況 (東より)



A②区下面 SR 1 ①～③層完掘・遺物出土状況 (南より)



A②区上面 P17完掘状況 (北より)



A②区上面 P25・41・44完掘状況 (北より)



A②区上面 P35・45完掘状況 (北より)



A②区上面 P40完掘状況 (北より)



A②区上面 P51完掘状況 (南より)



A②区下面 P57土器出土状況 (南東より)



A②区下面 P57完掘状況 (南より)



A②区下面 P89南壁セクション (南より)



B区① 調査前状況（東より）



B区② II 調査前状況 東B区② I 調査前状況（西より）



B区① 調査区設定状況（東より）



B区② I 調査区設定状況（東より）



B区② II 調査区設定状況（東より）



B区① 調査区北壁セクション（南より）



B区① 古代遺構検出状況（東より）



B区① 古代遺構完掘状況（東より）



B区① SA1遺構検出状況（南より）



B区① SA2遺構検出状況（南より）



B区① SA1柱穴・小石検出状況（南より）



B区① SA1完掘状況（南より）



B区① SD1遺物出土状況（上より）



B区① 包含層遺物出土状況（上より）



B区① 完掘状況 (東より)



B区① 完掘状況 (西より)



B区① 調査状況



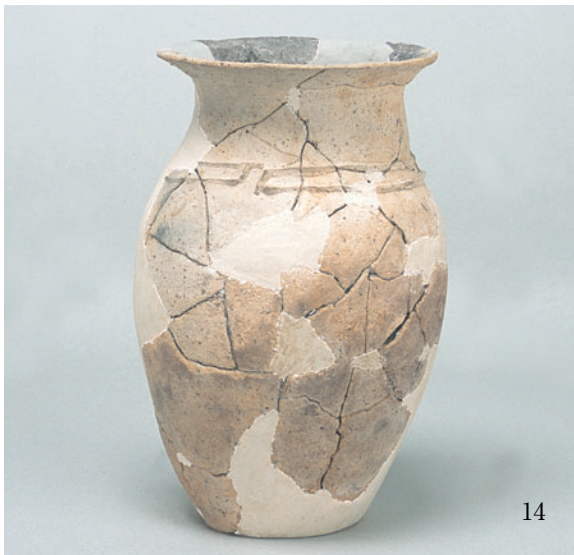
B区② I北壁セクション (南より)



B区②Ⅱ 完掘状況（西より）



B区②Ⅱ 北壁セクション（南より）



A①区 SD2(12~15・17・18)



A①区 SD2 (19 · 20 · 26) A②区下面 ST1 (51) SD5 (65) SR1 (90)



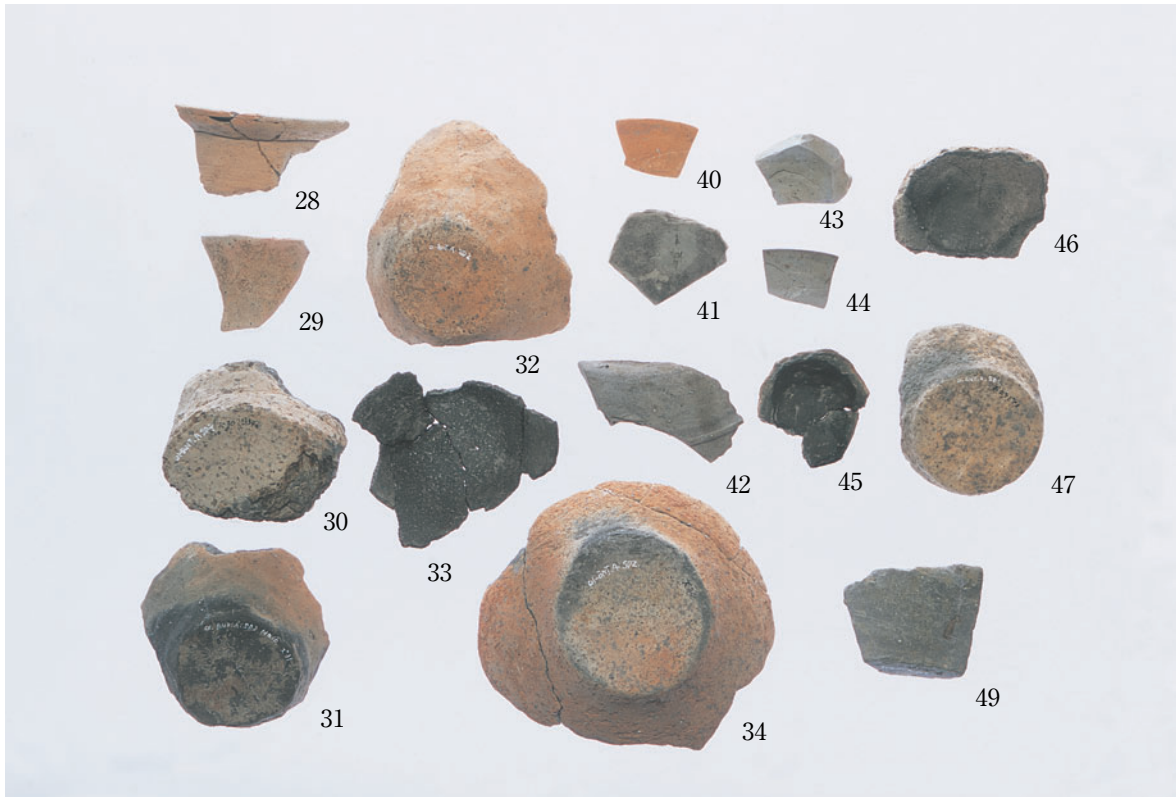
A①区 SD2(35·36) A②区下面 ST1(50·53) SK4(58) SR1(89)
P57(99) A③区下面 SK9(107)



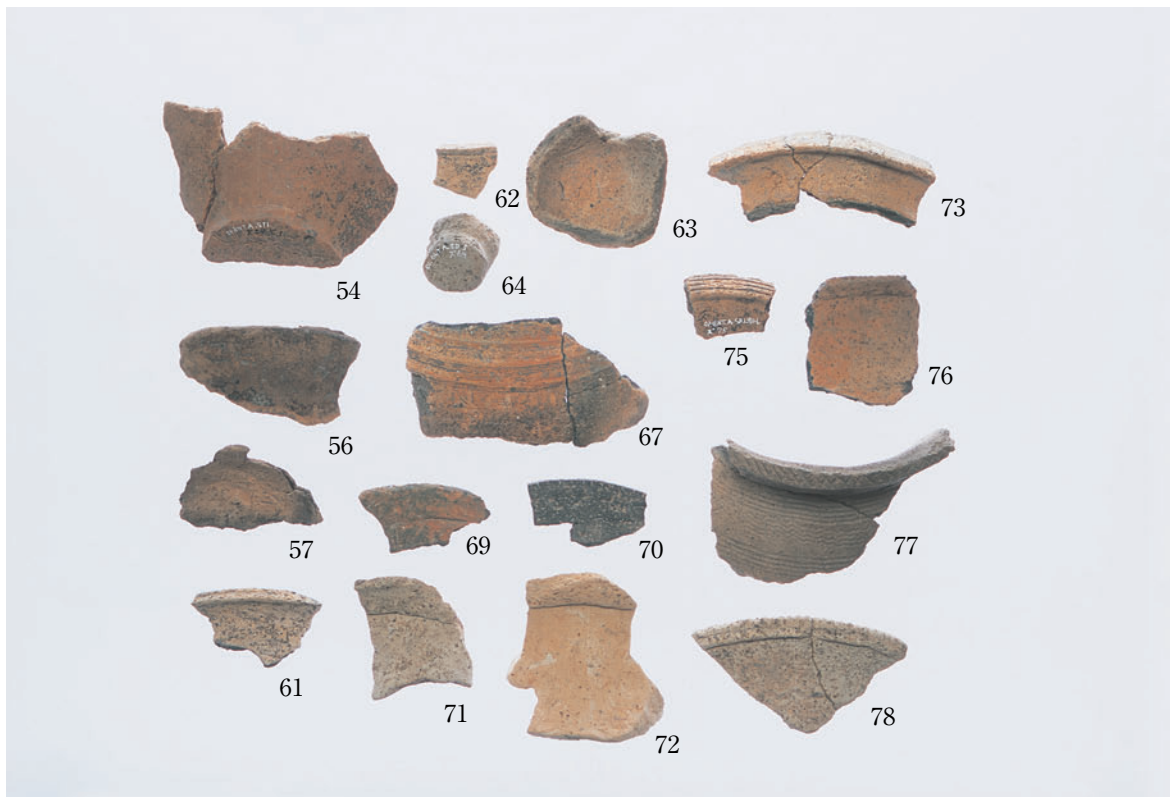
A①区 SD1(1) SD1~3(2~11) SD2(16・21)



A①区 SD2(22~25・27)



A①区 SD2(28・29・31~34) SD3(30) A②区上面 P17(40) P24(41) P41(42)
P35(43) SK1(44~47) SD4(49)



A②区下面 ST1(54) ST2(56) SK4(57) SD5(61~64) SD7(67) SR1(69~73・75~78)



A②区下面 SR1 (74・79~88・92・93)



A②区下面 SR1 (91・94) P 13 (98) A③区下面 ST3 (100~103)



A③区下面 ST3 (104) SK8 (108) A②区 遺構検出面 (109) IV層 (110)
A区 遺物包含層 (111~114)



A②区 V層 (115・117) IV層 (116) 南トレンチ (118) A区 遺物包含層 (119・121) 表採 (120)



B①区 ST1 (127) SD1 (128~133) SD2 (136) SD4 (137) SD7 (138) SD8 (139)



B①区 SD10 (141~143) SD11 (146・147) 遺物包含層 (150・152~157)



B①区 遺物包含層(151・158~169)



A①区 SD2(37~39) A②区上面 SK1(48) A②区下面 ST1(55) SK4(59・60)
SD5(66) SD6(68) SR1(95)



A②区下面 SR1 (96・97) A③区下面 ST3 (105・106)
 A②区 南トレンチ (122・125) A区 表採 (123) A②区 V層 (124) 遺構検出面 (126)

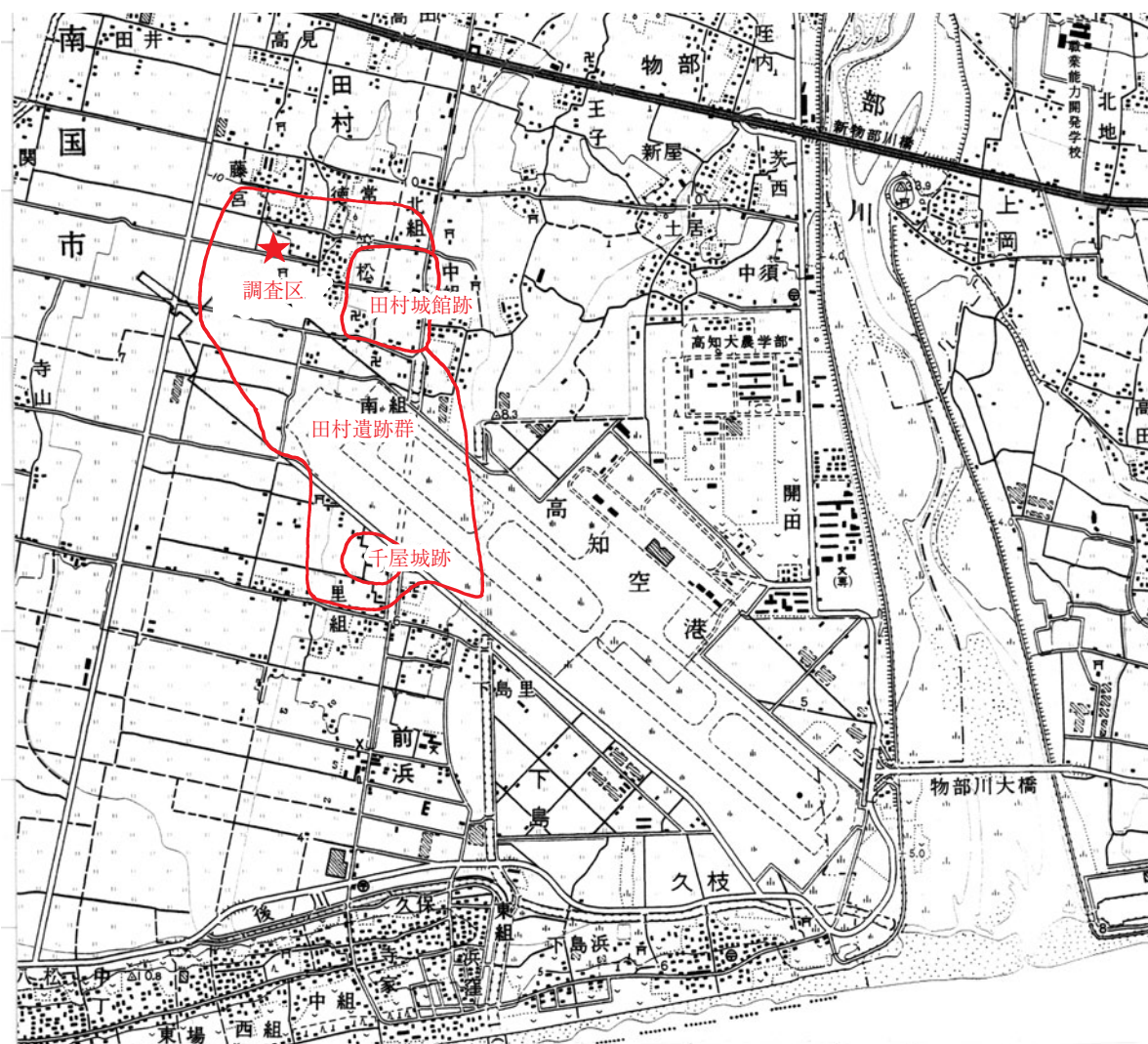


B①区 SD1 (134・135) SD9 (140) SD10 (144・145) SD16 (148) SK1 (149)
 遺物包含層 (170～172)

第 I 章 調査の契機と経過

今回の高知空港拡張整備事業に伴い、拡張部周辺域を緩衝緑地機能も含めた緑地公園として高知県が整備を行う計画が立てられ、高知県立高知空港緑の広場整備事業として実施されることとなった。この公園整備事業に伴い空港本体拡張範囲の調査対象地の北側部分が田村遺跡群の範囲に含まれることから、掘削を伴う水路工事部について発掘調査が実施された。同時に公園用地内に空港拡張工事の広報用に展望台とインフォメーションハウスが建設されることとなり、その取り扱いについて協議が行われた。その結果、インフォメーションハウスについては盛土を伴う仮設建物なので対象外とし、展望台については基礎工事のため掘削を伴うことから調査対象となった。調査の方法については、展望台の建設位置が田村遺跡群の北西端にあたることから、遺構・遺物の密度は低いと考えられ、工事面積も狭いことから立会調査として対応することとなった。

立会調査は平成13年10月2日に行われ、調査面積は26.5m²であった。検出された遺構は溝とピットであり、出土遺物も少量であることから、立会調査の報告は本書（田村遺跡群・緑の広場調査報告書）付編として収録することとした。



第 1 図 調査区位置図 (S = 1/25,000)

第Ⅱ章 調査の概要

1. 調査の方法

今回の調査対象区は田村遺跡群の北西部に所在しており、当初から遺構・遺物の検出が予想された。調査区東壁にトレンチを設定し、土層確認を行った。土層確認の結果、遺物の出土が非常に希薄なことから、重機掘削を主体に人力を併用して遺物包含層の掘削を行った。遺構は第Ⅳ層上面で確認できた。

測量については3級基準点を使用した。

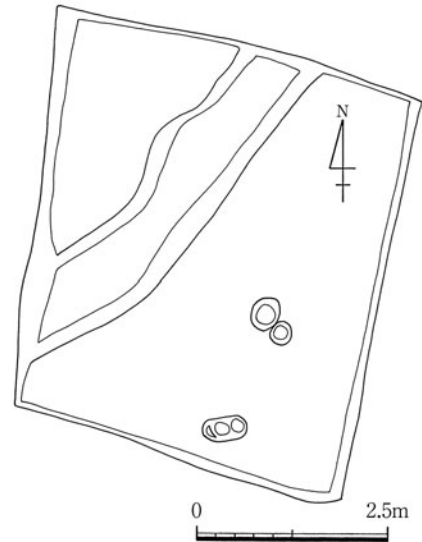
2. 調査区の概要

調査区は南北約5.3m、東西約5mを測る。検出された遺構は溝跡1条、ピット3個である。

これらの遺構は第Ⅲ層上面から掘り込まれたものであったが、第Ⅲ層では明確な確認ができなかった。

遺構検出面は第Ⅳ層上面である。

本調査区では古代の遺構と、弥生時代・古墳または古代の遺物が確認できた。



第2図 遺構平面図

層序

遺物包含層は第Ⅰ層の耕作土を除く、第Ⅱ・Ⅲ層である。ただし遺物の出土はいずれの層も非常に希薄であった。遺物は第Ⅰ・Ⅱ層から、弥生土器3点、第Ⅲ層からは須恵器1点が出土しており、いずれも細片である。

確認された基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層 暗灰黄色土（シルト）

第Ⅱ層 褐色土（シルト）

第Ⅲ層 暗褐色土（シルト。褐色シルト混）

第Ⅳ層 黒褐色土（粘性シルト。褐色シルトの小ブロック混）

第Ⅴ層 灰黄褐色土（砂質シルト）

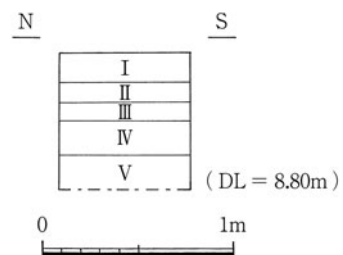
第Ⅰ層は耕作土である。

第Ⅱ層は古代の遺物包含層である。

第Ⅲ層からは須恵器片が出土しており、遺物包含層と考えられる。

第Ⅳ層は遺構検出面である。

第Ⅴ層は無遺物層である。



第3図 調査区土層柱状図

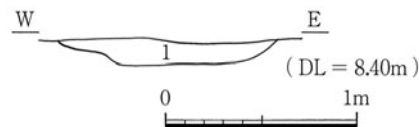
第Ⅲ章 遺構と遺物

当調査区で検出された遺構は溝跡1条、ピット3個である。ピットは溝跡の南で検出された。そのうちP2・3は隣接し、P1はその南に位置する。遺物が出土したのは溝跡のみで、P1～3からは出土しなかった。ただし埋土の色調から、溝と同時期のものである可能性が高い。

(1) 溝跡

SD1

調査区を北東から南西方向に流れる溝跡で、検出長約4.8m、幅約1.1m、深さ12cmを測る。断面は浅いU字形を呈する。第Ⅱ層の包含層に比べ、埋土に砂粒が混じることから、SD1は溝として機能していたと考えられる。出土遺物は黒色土器とみられるもの1点、弥生土器2点が出土したが、いずれも細片のため復元図示はできなかった。SD1は出土遺物から、古代の溝跡と考えられる。



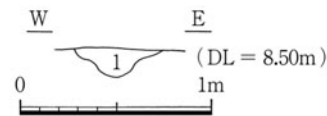
埋土
1、灰黄褐色土(砂質シルト)

第4図 SD1南壁セクション

(2) ピット

P1

調査区南端で検出された。長径54cm、短径31cm、深さ15cmを測る。テラス状の段部を持つ。切合の可能性もあるが、平面・断面の観察では確認できなかった。埋土は灰黄褐色シルトに3cm大の黒褐色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。



埋土
1、灰黄褐色土(シルト。3cm大の黒褐色シルトブロック混)

第5図 P1南壁セクション

P2

P1の北で検出され、P3と隣接する。長径49cm、短径32cm、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトに3cm大の黒褐色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

P3

P2の東に隣接して検出された。長径30cm、短径29cm、深さ6cmを測る。埋土は灰黄褐色シルトに3cm大の黒褐色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

第Ⅳ章 まとめ

本調査区の所在する田村遺跡群は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。これまでの発掘調査により、本調査区の東では弥生時代の遺構、古代の官衙関連遺構などが検出されている。このことから当該期の遺構・遺物の検出が予想された。

調査により検出された遺構は、古代の溝跡1条、ピット3個である。溝跡は北東から南西の方向に延びている。この溝跡は、調査B区の西で検出された古代の溝跡の方向とほぼ近似していることから、B区の溝跡に繋がるか、関連を持つものと考えられる。平成8年度から行われている田村遺跡群の発掘調査では、本調査区の西に近接するN3区で東西方向に延びる古代の溝跡が7条検出されている。調査区の東に位置するI4区では掘立柱建物跡、柵列、東西方向に延びる溝跡が、またI4区より約190m南に位置するF4区でも掘立柱建物跡、土坑など古代の遺構群が検出され、須恵器・土師器などの遺物が出土している。これらの遺構群は方形のプランを持つ掘立柱建物跡が主体をなしており、香長平野の条里方向（N-11°-E）に沿って真北から東に10°前後ずれるという一定の方向性が守られている。I区で検出された古代の遺構は、さらに北に広がる可能性が高い。

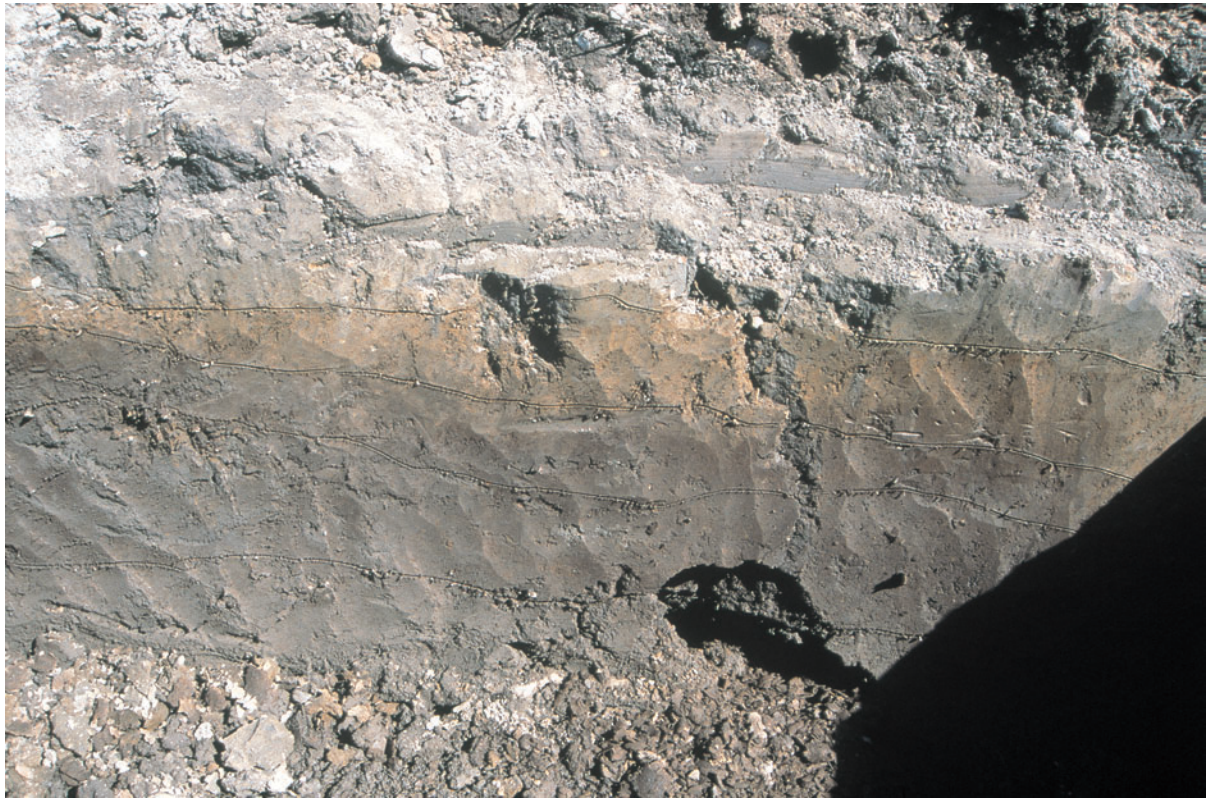
本調査区で検出された溝跡も、それら一連の遺構と関連するものと考えられる。検出されたピットについては、掘立柱建物あるいは柵列を構成して調査区外に広がる可能性もあるが、確認はできなかった。



遺構検出状態（東より）



遺構完掘状態（北より）



調査区東壁セクション



SD1 (南より)

報告書抄録

ふりがな	たむらいせきぐん・みどりのひろばちょうさほうこくしょ							
書名	田村遺跡群・緑の広場調査報告書							
副書名	高知県立高知空港緑の広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第72集							
編著者名	山田和吉・堅田至・森田尚宏・小野由香							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL 088-864-0671							
発行年月日	2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たむらいせきぐん 田村遺跡群	こうちけんなんこくし 高知県南国市 たむら 田村	39204	040234	33度 33分 00秒	133度 39分 50秒	2002.8.30 } 2002.10.04	668	緑の広場公園整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
田村遺跡群	集落跡	弥生時代 古代	(弥生) 竪穴住居跡 7棟 土坑 11基 溝跡 8条 自然流路 1条 ピット 127個 (古代) 柱穴 74個 柵列 2条 溝跡 15条		(弥生) 弥生土器、壺、 甕、高杯、鉢、 石斧、石包丁、 石鏃、石錐、 叩石 (古代) 緑釉陶器 須恵器、杯、 杯蓋、壺、甕 土師器、杯、 甕 青磁 (中世)		空港拡張本体に伴う発掘調査により確認された田村遺跡群の一部であり、さらに北方に広がるものと考えられる。	

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第72集

田村遺跡群・緑の広場調査報告書

－高知県立高知空港緑の広場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2002年3月29日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 (株)飛鳥